
鏡界戦 -ファントム・クラウン-

エスパー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡界戦 - フォントム・クラウン -

【Nコード】

N0401U

【作者名】

エスパー

【あらすじ】

日常を求める少年、神藤巧。 非日常を求める少女、水嶋曉奈。少年と少女は、お互いが違う物に憧れを抱いていた。 高校生活が始まって一カ月が経った頃。突如として現れた異空間『鏡界』に飲み込まれ、異形の怪物が住む謎の空間へと落ちた巧と曉奈。二人の前に現れた謎の青年『幻影の道化』^{フォントム・クラウン}は、ただこう告げた。 「ようこそ。 愚かで哀れな子羊たち」 幻影の道化の言葉に導かれる様に、二人は怪物に立ち向かうための不思議な力に目覚める。その力を使い、巧は日常に戻るため、曉奈は非日常を生きるため、 『

『災魔』と戦いながら、二人は異空間の謎を探っていく。果たして二人は、無事に現実の世界へ帰る事が出来るのか？

プロローグ1 Boyside(前書き)

公募の為に消しておりました、作者の処女作です。
お時間のある方は、ぜひ読んでやってください。

プロローグ1 Boy side

最初は悪い夢だと思った。

ここは自分が存在する『日常』とは違う、『非日常』の世界だ。あんな物が存在するはずがないと、少年はそう思った。

だがその光景は……、その臭いは……、間違いなく本物だった。血を塗りつけたかの様に紅黒く染まる、現実味のない空。辺りに漂う血の臭い。そして、少年の眼に映る物。それは少年の『日常』には存在しない、『非日常』の存在だった。

「何なんだ、あれ……」

少年はただ、そう呟いた。

少年は何気ない日常を過ごしていきたくて思っていた。特別な事など何もない、ただ家族がいて、ただ友人がいて、ただ安穩と暮らしていければそれでよかった。そんな日常を守っていきたくかった。

だがこの日、この瞬間、少年の日常は狂い始める。願っていた日常が、非日常という名の怪物に侵され始める。

だからこそ少年は、神藤巧しんとうたくみは抗う事を決めた。

自分の願った日常を、取り戻すために。

Act・1 出現

眩しい朝日の中、紺の学生服に身を包んだ黒髪の少年は、ゆつくりと通りを歩いていった。

彼の名は神藤巧。どこことなく落ち着いた雰囲気を漂わせる、前髪が少しだけ左に長い髪形をした彼は、つい先月高校に入学したばかりの、言わば新入生だ。

歩道の整備された通学路には、巧の他にも通勤を急ぐサラリーマンや、他校の学生の姿が見られる。

春の温かい陽光を浴びながら、巧は左手の腕時計に目を向ける。デジタルの時計に表示されている時刻は、午前八時十分。始業のベルが鳴るまでにはまだ若干余裕がある。

（この春から高校に通い始めて、もう一カ月か。早いなあ……）
腕時計に表示されている日付を見て、ぼんやりとそんな事を思った。

何事もない、平凡な日常。それは巧が一番大事にしたいと思っている事だ。家族や友達と楽しく過ごして、今はいけないけれど彼女だつて作りたい。そんな当たり前な日常を過ごしていけるんだろうなと、そう思っていた。

少なくとも、この瞬間までは。

それは横断歩道で信号待ちをしている時だった。
パキッ。

「……？」

ふいに、何か固い物が割れるような音が聴こえた気がして、巧は後ろを振り向いた。だが特に目立った物は何もない。巧と同じように信号待ちをしている茶色いスーツを着たサラリーマン風の男性が

いるだけだ。

（気のせいかな？）

そう思つて再び前を向こうとしたその時。

パキッ。パキキッ。

また同じような音が聴こえた。しかもさつきより、音が大きくなっている。

「何だ？ この音、一体どこから」

パキパキッ。パキパキパキパキッ。

連鎖するに連れて大きくなっていく謎の音。さすがに不審に思つたのか、サラリーマン風の男性もキョロキョロと辺りを見回している。と、その時だった。

バキンッ。

明らかに、何かが完全に割れた音がした。その音源を探して、巧が何気なく頭上に目を向けると。

「……え？」

そこには何もないはずだった。正確に言えば、遙か上空にある青空が見えるはずだった。だがそこにあったのは、虚空に浮かぶ巨大な穴だった。まるで洞窟の入口が宙に浮いているかのように見える。ぽっかりと開いた穴の内部は暗く、はつきりと見通す事が出来ない。そしてその穴の周囲には、無数の亀裂が入っている。

「なっ、何だよこれ……！？」

驚愕する巧の視界の中。穴の奥の暗がりで、何かが動いているように見えた。

（！ 穴の奥に何か）

そこで唐突に、巧の意識は途切れた。

「……ん」

頬に何か温かい物が触れた感触がして、巧はゆっくりと目を開けた。ぼんやりとした頭で、自分が今地面に横になっている事に気付いた。

「あれ？ 俺、どうして……」

「目が覚めたかい？」

「え……？」

意識が徐々にハッキリとしてくる。体を起こしながら声のした方を見て、巧はポカンとなった。

おかしな格好をした青年が、ニコニコしながらこっちを見ている。童話やおとぎ話に出てきそうな西洋風の服の上から、身長とほぼ同じ長さの黒いマントを着て、顔の左半分だけに、ピエロのメイクをした仮面を付けている。薄藍色の瞳に銀髪という容姿から、一瞬外国人かと思ったが、先程聴いたのは確かに日本語だった。あるいは何かのコスプレなのかとも思ったが、生憎そんな催しは巧の住んでいる街では行われていない。

呆けている巧を意に介した様子もなく、青年は楽しそうに話し始める。

「それにしても久しぶりだなあ」

青年の姿に気を取られていた巧は、

「ここに人間が落ちてくるなんて」

その台詞を聞き逃す所だった。

「え？」

今この青年は何と言った？ 青年の言葉に巧は一瞬固まった。

（今の台詞だと、まるで自分が人間じゃないみたいな）

青年はニコニコしながら巧の顔を覗き込み、

「ようこそ。愚かで哀れな子羊さん」
そんな台詞を口にした。

言葉の意味がわからず首を傾げそうになった時、巧は唐突に思った。

（ここはどこだ!？）

巧は辺りを見回した。

人がいないどころか、人の気配すら感じない。

自分の周囲にあるのは見覚えのない住宅街のような場所。歩道沿いに植えられた木々は枯れ果て、立ち並んでいる建物は、窓が割れ、屋根は崩れ、コンクリート製の壁にはヒビが入り、とても人が住めるような状態ではない。どの建物を見ても、皆同じように朽ち果てていた。

確実に、さっきまで自分が立っていた場所ではない。ならばここは一体どこなのか。

巧は茫然として周囲を、そして空を見上げる。

「空が……」

見上げた先にあつたのは、血を塗りつけたかのように紅黒い、現実味のない空だった。

夕焼けの色などではあり得ない。まして今は午前中、青空が見えているはずの時間帯だ。気を失っていたにしても、こんなに時間が経っている事があるものだろうか。

嫌な予感がして、左手の腕時計を見る。

デジタルの腕時計には、時刻はおろか日付すら表示されていなかった。

「そんな……。一体」

「本当はもう気付いてるんだろう?」

腕時計から目が離せずにいる巧に青年は言った。

「ご察しの通り、ここはキミがいた世界じゃないよ、神藤巧くん」

「!?!」

驚いて巧は顔を上げる。

キミがいた世界じゃない。

その台詞よりも先に、青年が自分の名前を知っている事に驚いた。自己紹介などしていない。どこかで会った事もない。真正正銘、初対面のはずだ。にも関わらず、青年は巧の名前を言い当てた。

「どうして」

「キミの名前を知ってるかって?」

巧の言葉を遮るようにして青年は続ける。

「そりゃ知ってるさ。キミの事なら何でも知ってる。なんなら生年月日も答えようか? あ、それよりもキミの家族構成の方がいいかなあ?」

「な……」

質問を先読みした割に、答えらしい答えになっていない。しかも余計に謎が増えた。相変わらずニコニコとした表情を崩さない青年は、戸惑う巧を見て楽しんでるようだ。

巧は乱れた気持ちを落ち着かせるため、軽く深呼吸をした。そして切り出す。

「教えてくれ。あんた何者なんだ? それに、ここが俺のいた世界じゃないと言うなら、ここはどこなんだよ?」

巧に問われ、青年は顎に手を当てて悩むような仕草を見せた。が、特に熟考した様子もない。すぐに返答は返ってきた。

「そうだねえ。じゃあとりあえず自己紹介しておくよ」

青年は軽くターンすると、右手を胸に当てて軽くお辞儀をした。

「ボクの名前は、ファントム・クラウン幻影の道化。この世界、『鏡界』の案内人さ」

いきなり妙な単語が出てきたので、巧は首を傾げるしかない。

「ファントム? キョウカイって……、何だよそれ?」

青年の名前は明らかに偽名としか思えない。ゲームのRPGに出

てきそうな名前だ。おまけにこの世界の名前とやらも、言葉で聴いただけではどんな字を書くのかわからなかった。

理解不能な顔をしている巧を見ても、青年は気にした様子もなく続ける。

「だからこの世界の名前さ。いや、世界というより空間だね。そんなに広い場所じゃないよ。半径三キロメートルくらいかな」

ファントムやらキョウカイやらと訳のわからない言葉を並べる割に、物凄く現実的な事を言う。ならばと思い、巧は自分にとって今一番肝心な事を聞いてみた。

「……出口はあるのか？」

「あるよ。入口は一方通行だからすぐ閉じちゃうけど」

「あんたさっき、自分の事を案内人って言ったよな。じゃあ、出口の場所も知ってるのか？」

「もちろん。じゃなきゃ案内人なんて名乗れないでしょ」

「……」

正直な所、全く訳がわからない。嘘臭い名前を名乗ったかと思えば、出口という現実的な話にもスラスラと答えるおかしな格好をした青年。

それに眼が覚めていきなり、「ここは別の世界（空間）です」とかなんとか言われて、それを「はいそうですか」なんて鵜呑みにできる奴は頭がおかしいんじゃないかと思う。残念ながら、巧は鵜呑みにできる方の人間ではない。悪い夢だと思った方が気が楽だった。「じゃあ、出口まで案内してくれ」

別に現実だと認めてしまった訳ではない。これが夢なら早く覚めてしまいたいと心底思ったただけだ。

すると青年・幻影の道化は意外にも、その言葉に素直に応じてくれた。

「了解。でもその前に」

ファントム・クラウン
幻影の道化の言葉に被さるようにして、それは突然頭上から降ってきた。

グシャッ。

柔らかい物が潰れるような不快な音と共に、生温かい液体が巧の頬に飛び散った。

「え？」

頬に飛び散った液体を指で拭い、それが人間の血だと気付くのに、三秒掛かった。頭上から落下してきた物体が人間の身体だと認識するのに五秒掛かった。それが降ってきた頭上を見上げるのに、二秒掛かった。そこで巧の眼は留まる。

「何なんだ、あれ……」

硬直する巧の耳に、おどけた声が届いた。

「あれをなんとかしないとね」

視線の先にあったのは非日常。現実にはあり得ない存在。

それは、異形の姿をした、化物だった。

「お前の一番大切な物って何だ？」

急に真面目な雰囲気ですう問われ、巧は眼を瞬かせた。

その言葉はクラスメイトで友人である、高橋和真たかはし かずまに言われた事だった。中学二年の頃、昼休みに学校の屋上で二人で昼食をとっていた時の事だ。

巧と和真は昔からの長い付き合いで、お互いに何でも語り合える仲だ。大抵はバカな掛け合いになる事が多いのだが、和真はたまにこうして真面目な話を振ってくる。長年の付き合いで慣れていると

はいえ、直前まで笑い話を続けていたのだから、急な話題転換には少々戸惑う。

「何だよ突然。そんな事聞いてどうするんだ？」

「いいから答えるよ。ホレホレ」

屋上の手すりにもたれながら、和真は手を振って会話を促す。

巧としても、その問いに対する答えがあるにはある。だが、それを口にするのは躊躇いがあった。いくら真面目な話をしている最中だと言っても、笑われる確率の方が高いように思えたからだ。

「……笑うなよ」

「そりゃ内容によるな」

「……」

念を押しても和真の答えはそっけない。たつぷり十秒間を開けて、巧はポツリと呟いた。

「……日常」

「は？」

わざとらしく耳に手を当てて聴こえないと訴える和真。観念して巧は声のポリウムを元に戻した。

「だから、日常だよ。何にもない日常。学校通って勉強したり、お前や他の奴らとバカな話したりとか、そういう何でもない事が、俺が一番大切だっと思う事だ」

自分でも言っていて照れ臭くなっているのが、頬の熱さでわかる。だがそれが正直な気持ちだった。

そんな様子を見て、隣りにいる和真は声を殺して笑っているんじゃないかと思った。ところが、意外にも和真は真剣な顔でそれを聞いていた。

「なるほどね。お前らしいや」

そう言って和真は、ニカツと快活に笑ってくれた。

なぜ今になってそんな昔の事を思い出したのか。

自分はもう夢と現実の区別がなくなっているのかと、巧は思った。

見上げた先にいたのは異形の化物。人間のような身体の形をしているが、顔の部分は鰐になっていて、体中が蛇のような鱗に覆われている。手や足には猛禽類のような鋭い爪があり、体長三メートルはあるかというその化物は、背中に翼を生やして空中に浮かんでいる。

そして、その化物の口から滴る紅い液体。

巧は恐る恐る、もう一度自分の傍に落ちてきた物体に目を向けた。血溜まりに沈むそれは判別しにくくなってはいるが、間違いなく人間の身体だった。そしてもう一つ、ある事に気付く。

（……！ この服）

ボロボロになって血に染まっている布切れは、原形を留めていないが、茶色いスーツのように見えた。そして思い出す。そういえば自分が気を失う前、誰かがこれと同じ色のスーツを着ていたはずだと。

（まさか……。俺の後ろにいた）

「ウツ」

胃がねじ切れるような感覚を覚えて、巧は口を押さえて膝をついた。とてつもなく気分が悪い。

確かに意識を失う前、信号待ちをしていた自分の後ろには、サラリーマン風の男性が立っていた。その男性が着ていたスーツも、確か茶色だったはずだ。

でも確証がない。同じ色のスーツなんてこの世にいくらでもある。その男性だという証拠などどこにもない。

だが、だからといって確認しようという気にもなれない。死体がそこに転がっているという事実だけで充分だった。

「大丈夫かい？ 顔が真っ青だよ」

軽い調子で聴こえた声に、巧は信じられない物でも見るかのように、その声の主を見た。

「あんた……、何とも思わないのか？」

「？ 何がだい？」

「！」

巧は言葉を失った。気にしていないとか、そういうレベルの話じゃない。何の問題があるのかわからないと、こいつは、幻影の道化は言っている。この惨状を目の当たりにして。

「ホラホラ。そんな事より、早く逃げた方がいいんじゃないかな？」
ファントム・クラウン

幻影の道化に言われて、巧はハッと頭上を見上げた。

化物が低く唸りながらこちらを見ている。

今の今まで奴が動かなかったのは、巧の存在に気付いていなかったからか。それとも、口の中に残る獲物の味をクチャクチャと反芻していたからか。

どちらにせよ、化物は次の標的を巧に絞ったらしい。爬虫類の特徴的な眼が巧を捉えた。

「グオオオオ！」

「う、うわああ！」

その咆哮にようやく恐怖を覚え、巧は一目散に走り出した。

周りには人気のない、すでに朽ち果てた住宅街。まるでゴーストタウンに迷い込んでしまったかのようだ。どこまで走っても、どれだけ走っても、すれ違う人間など一人もいない。助けを求められる相手など、どこにもいない。

追ってくる化物には翼が生えている。いくら全速力で走ろうとも、追いつかれるのは時間の問題だった。追いつかれたら最後。次は自

分が血溜まりに沈む事になる。

（何なんだ！ 何でこんな事になってるんだよ！）

現実なのか夢なのか未だに判別できないが、だがさっきの死体は限りなく現実味を帯びていた。そして今、自分に死を齎すであろう存在が、すぐそこまで迫ってきている。

最初は理不尽だと思った。

いきなり訳のわからない空間に落とされて、訳がわからないまま自分が死ぬとしたら、こんな理不尽過ぎる事はない。自分はただ、何の変哲もない日常を過ごしていければ、それでよかったのに。

次を感じたのは怒りだった。

なぜ自分がこんな目に逢わなければならない？ 自分を殺そうとしているのは誰だ？ 自分が一番大切だと思っていた日常を、自分が過ごしていききたいと願った日常を、奪おうと、壊そうとしているのは誰だ？

怒りが沸々と、巧の体の中で湧きあがっていく。

抗いたと思った。自分に迫る死の運命に、抗いたいと。

いつの間にか、巧は走るのを止めていた。化物に背を向けるのを止めていた。自分の中の何かが、そうさせていた。

「邪魔するなよ」

ポツリと呟いた巧の顔には、恐れなど全くなかった。

化物に向かって一歩踏み出す。それだけで力が湧いてくるような気がした。

化物に向かってもう一歩踏み出す。それだけで、何かが生まれようとしていた。

翼を広げて向かって来ていた化物は、地響きと共に地面に降り立った。低い唸り声を上げながら、逃げるのを止めた獲物を捕えるために、まっすぐに突き進んでくる。

「俺が過ごす日常を」

巧の目の前まで歩いて来た化物は、その鋭い爪を容赦なく振り下ろした。

「邪魔するなあッ！」

それは一瞬の出来事だった。

振り下ろされた化物の右腕の肘から先が、何の前触れもなく不自然な方向に吹き飛んだ。化物の右腕が、いとも容易く切断されていた。

大きく弧を描いて巧の後方に切り飛ばされたそれは、灰のようにボロボロと崩れて風化していく。

「ギヤアアッ！」

悲痛な叫び声を上げながら、化物は後ろへと倒れこんだ。

轟音を響かせて倒れる化物の姿を見て、巧は今更のように我に返った。自分の目の前に、大きな物体が浮かんでいる。

「これは」

目の前に浮かぶそれは、自分の身長と同じ長さはあるつかという、巨大な片刃の長剣だった。

剣の先端はカッターの刃のように鋭く尖っており、刀身は磨き込まれた鏡のように、薄らと巧の顔を映している。刀身の根元には紺碧に輝く玉が埋め込まれており、その直下、鰐の部分は片側が柄頭まで杵状に繋がっていて、丁度サーベルの護拳のようになっていて、淡く光を放っているそれは、とても神々しい物に見えた。

一体どこからこんな物が現れたのか。

しかもその剣は、まるで自分を掴めと言っているかのように、刀身部分を上に向けて、柄の部分を巧の胸の辺りにして浮いている。

巧はゆつくりと、柄の部分に手を掛けた。すると淡い光が消え、手に固い感触が伝わってくる。しかも自分の身長とほぼ同じ長さがあるにも関わらず、それほど重みを感じない。何とも不思議な感覚だった。

しばらくその剣を眺めて巧は呆けていた。しかし、剣の向こう側で何かが動くのを感じて意識を戻す。

「グオオオッ！」

化物は右腕の切断面を左手で押さえながら、それでもなお鋭い眼

光で雄叫びを上げた。切断面から血は出ていないようだが、やはり痛みがあるのだろう。先程より動きが鈍くなっているのがわかる。

「痛みがあるのか。意外だな」

自分でも驚く程に冷静さを取り戻していると、巧は思った。今目の前には異形の姿をした化物がいると言うのに、微塵も恐怖を感じていない。それどころか余裕すら感じていた。

負けるはずがない、と。

「悪い。お前は俺にとって邪魔な存在なんだ。だから」

手にしていた長剣を水平に構え、振り抜く体勢に持っていく。

「消えてくれ」

それだけを冷酷に告げ、巧は長剣を一気に振り抜いた。

「ギィヤアッ！」

真一文字に体を両断された化物は、断末魔の叫びを上げながら見る見る内に灰となり、肉片の一つも残す事なく完全に消滅した。

その途端、辺りに静寂が訪れる。後に残ったのは紅黒い空に覆われた空間と、人の死を体験したという、言いようのない虚しさだけだった。

「ッ」

糸の切れた操り人形のように、巧は力なくその場に跪いた。

支えをなくして地面に落ちた長剣が、ガシャンと鈍い音を立てた。するとその長剣は、役目を終えた事を理解したかのように、淡い光を放ちながらスゥーと消え去った。

だがそれすらも、視界に入れようとはしなかった。

今はもう何も考えたくない。それが正直な心境だった。

考えようとすれば、さっき起きた出来事を嫌でも思い出してしまふ。そして思い出したからと言ってどうする事も出来ない。あそこにあるのは、すでに死んでしまっている人なのだから。

すると、俯いている巧の耳にコツコツと足音が聴こえてきた。足音の主は一人しかいない。巧にはもう、それを確認する気力すらなかった。

「いやゝ凄いな、キミ。まさか『心羅』に目覚めるなんて思いもしなかったよ」

案の定、聴こえたのは幻影の道化ファントム・クラウンの声だった。

ついさっきまでの一連の出来事をどこかで見ていたのだろう。声に一層の明るさが混じっていた。

「ここに落ちてきた人間は今まで何人もいたけど、キミみたいに落ちてきてすぐ『力』に目覚める人間は珍しいんだ。ホント久しぶりに良い物見せてもらったよ」

顔を見る気もないが、恐らくまたあのニコニコとした笑顔で話しているのだろう。

そう思うと、巧は心がざわめくを感じた。さっき化物に追われている時に感じた、怒りに似ている気がする。

「あれ、どうしたんだい？ 気分でも悪いの？」

膝を付いたまま顔を上げない巧に、相変わらず軽い調子で幻影の道化ファントム・クラウンは声を掛ける。本気で心配していない事など、顔を見なくても容易にわかった。

だからこそ余計に、怒りを感じる。

なぜこの状況でそんな軽い調子を保つ事が出来るのか、と。

「さっきの人はどうなったんだ」

答えは自分でもわかりきっている。それでも聞かずにはいられなかった。

「さっきのつて。ああ、そういえばキミの他にもう一人いたんだっただね。すっかり忘れてたよ」

ギリッと、巧は奥歯を強く噛み締めた。

全く意に介した様子がない。それどころかこいつは今何と言った？ 忘れていただと？

「さっきの人は、どうなったんだよ？」

同じ質問をしているのに語気が強くなっている事を、巧は自分でも感じていた。間違いなく怒りを感じている。目の前の青年に対して。目の前の青年の、態度に対して。

「さあ？ もうとつくに死んでるんじゃないかな？ キミだつて見ただろう、あの血の量を。大体、頭からパツクリいかれてるんだ。無事な方がどうかしてる」

「ふざけんなッ！！」

ファントム・クラウン

巧は思い切り、幻影の道化の胸倉を両手で掴んだ。胸倉を掴んだ手が、微かに震えている。

もう我慢の限界だつた。幻影の道化があと一言でも発しよう物なら、顔を思い切り殴ってしまいそうだ。

しかし、必死の形相で息を荒げる巧を見ても、幻影の道化はニコニコしている。ニコニコしながら言う。

ファントム・クラウン

「何をそんなに怒ってるんだい、神藤巧くん」

「人が死んだんだぞ。一人の人間がついさつき死んだんだ！ なのになんでお前はそうやってニコニコしてられるんだよ！？ なんて思わないのか！」

「ああ、なんだ。それで怒ってるのか」

胸倉を掴まれたまましばらく考え込んだ幻影の道化は、ようやく納得したというような表情を見せた。そしてまた、笑顔を見せながら言う。

「悪いけど、ボクにキミ達人間みたいなマトモな感情を期待しても無駄だよ。だって、ボクは人間じゃないんだから」

「！？」

突然の言葉に驚きながらも、巧は心のどこかで納得している自分がある事に気付いた。

考えてみれば、何もおかしい事はないのかもしれない。自分が今いる、このあり得ない空間。そしてそこに、この青年はいた。まるで当たり前だと言わんばかりに。

それにこの青年は言っていた。「人間が落ちてくるのは久しぶりだ」と。それはつまり、元々ここには人間なんて一人もいないという事ではないか。

巧自身、最初にそう思ったではないか。「この男は人間じゃない

のか？」と。

「わかるかい？　ボクはキミ達人間の言葉で言う所の化物って奴さ。そんな存在に、マトモな感情が備わってる訳がないだろう？　だからボクはこんな状況でも、こうして笑ってられるのさ」

そう言って笑ってみせる彼の顔は、恐ろしい程に冷徹だった。冷笑という言葉は、この男の表情に当てはまる言葉だと実感した。

先程までの怒りを失ってしまった巧は、ファントム・クラウン幻影の道化の胸倉から手を離れた。

その途端、ファントム・クラウン幻影の道化の表情は、また元通りのニコニコ顔に戻ってしまった。

ついさっき見た冷笑の後にこの表情を見ると、なんだかとても不気味な物を見ている気がして、何とも言えない気分になる。

「さてと。じゃあ約束通り、道案内をしてあげるよ。キミは化物と戦える力を手にしたんだ。それをうまく使えば、この空間から脱出できるかもね」

今の場の空気に全く不釣り合いな明るい声で、ファントム・クラウン幻影の道化はそう告げた。

『鏡界』内にある街並みは、巧が住んでいる街には存在しない。現実
実にこんなゴーストタウンが存在していたら、すぐにでも取り壊されてしまっ
ただろう。

つまりここは、現実の世界とは全く別の世界という事だ。
重苦しい気分のまま、巧は出口までの道すがら、状況を整理するために
幻影の道化に色々と質問をしていた。

まずこの空間、『鏡界』について。

この空間『鏡界』は、内部が半径三キロメートル程の広さで、端の方には触れられない不可視の壁のような物がある。つまり空間の端っこのまで行くと、そこから先は行き止まりになっている。そして空間自体が現実世界と断絶されているため、出口以外の場所から脱出する事は不可能なのだという。

「それに気付いてるだろうけど、この空間には生物が一切存在しない。存在しているのはさつきキミが倒した、『災魔』という化物だけだ。あとそうだ、キミがいた現実の世界とこの空間とでは、経過する時間に差異がある。これも結構重要だね」

とは言う物の、説明している者の口調が軽いため、あまり重要な事を言われている気になれない。

ところで、今会話の中にあつた『災魔』とはどういう存在か。もちろんそれについても巧は質問している。

『災魔』とは巧が体験した通り、『鏡界』内に存在している異形の化物の事だ。

獣のような姿をした者から人型に近い者までと、その姿形は多種多様である。人型に近い者もいる、という話だが、だからといって『災魔』は言語機能を持つている訳ではない。

「まあ、ここにこうして言葉を話す化物がいるんだから、そういう期待を持つてもおかしくはないよねえ。だって、言葉が通じれば『食べないでください』ってお願い出来るんだから」

『災魔』は『鏡界』内に落ちた人間を喰らおうと襲ってくる。

巧はさっきの惨劇を思い出して、また気分が悪くなった。

なぜあの化物は人間を喰らおうとするのか。そんな質問に、ファンタム・クラウンの道化は当たり前のように言った。

「キミ達人間の常識が通じる相手じゃないんだよ。だって、化物なんだから」

ファンタム・クラウンでも、と幻影の道化は続ける。

「キミなら多分、これから先奴らに襲われても平気だよ。力に目覚

めた人間なんだから」

「力って、さつき出てきたあの剣の事か？」

「そうだよ。あれは『心羅』という名の、『災魔』に対抗するための特別な力さ。そう、特別な力。誰でも発現できるような代物じゃない。まさしく、選ばれた人間にしか扱えない力だよ」

『心羅』。選ばれた人間にしか扱う事ができない特別な力。それはさっきの一連の出来事で何となく理解できた。

ではなぜ自分がそんな力を発現できたのか。そう巧が問うと、
「そればかりはボクにもわからないよ。そういう素養があったって事なんじゃないの？」

そう言ってニコニコとするだけだった。

どうもこの男、自分にとって都合の悪い内容に話が及ぶと、「わからない」「知らない」と言ってとぼける節がある。

現に、「何であんたはここにいるんだ？」とか、「自分の事を化物だと言うが、じゃああんた自身も災魔なのか？」といった質問をすると、

「わからないし知らないよ。キミの事ならなんでもわかるけど」
と言ってはぐらかすばかりだった。

（これ以上質問しても無意味か……）

本人が答えようとしないうちに、いくら聞いても無駄だという事を巧は知っている。答えないならそれでもいいと、巧は質問をするのを止めた。

すると今度は、ファントム・クラウン幻影の道化の方が巧に問い掛ける。

「それにしても、随分熱心に質問するね。さっきまで夢が現実か測りかねてるって感じだったのに。どういう心境の変化だい？」
「……」

巧はすぐには答えなかった。

確かに自分でも、これが現実だと受け入れ始めている事には気付いていた。

だがその一方で、今でもできるなら、これが夢であってほしいと

思っている自分がある。しかしそれは、単なる現実逃避だ。なぜならあの光景は、あの血に染まった光景は、自分が感じた恐怖は、間違いなく本物だったのだから。

今もあの場所に戻らずに出口に向かっているのは、確かめるのが怖いからだ。確かめたらその瞬間、自分はもう戻れなくなる気がした。自分が過ごしたいと願っていた、日常という明るい世界へ。

「責任を感じてるのかい？ さっきの人間に対して」

「！」

ファントム・クラウン

幻影の道化の言葉に、巧はギクリとした。

ファントム・クラウン

気が付くと、幻影の道化は無表情でこちらを見ている。たったそれだけで、全てを見透かされている気がした。

「自分の特別な力が、もう少し早く覚醒していれば、あの人間を助けられたんじゃないか。もっと早くあの人間を見つけていれば、あんな結末にはならなかったんじゃないか　とかそんな感じかい？　そう思っているなら、それは全くの見間違いだよ、神藤巧くん」

「何だつて？」

ファントム・クラウン

険しい顔をする巧を見て、幻影の道化は煩わしそうにため息をついた。そして巧の方に向かってゆっくりと近付いてくる。

「キミはさ、神様にでもなったつもりなのかい？　確かにキミは特別な力に目覚めた。そういう意味では、キミは他の人間と一線を画す存在になったと言っているだろう。でもあの時は違う」

ファントム・クラウン

巧の周囲をゆっくりとした歩調で歩き回りながら、幻影の道化は続ける。

「キミが生きている現実の世界では、キミが関わりない場所で、色んな理由で人が死んでいくだろう？　キミはその全てを、自分の手で止められるとも言っているかい？　それと同じ事さ。あの時こうしていればとか、こうなっていればとか、そんなのは結局、ただの後付けなんだよ。あの場面でキミにできる事は何もなかったんだ。それが全てさ」

そう言って右隣で立ち止まり、肩を軽くポンと叩いた。

依然として険しい表情の巧を無視するかのように、再び幻影の道ファンタム・クラ化は、出口があるのであろう方向に向かって歩き始める。

「そんな無駄な事考えるよりも、キミは自分の日常に戻る事だけを考えた方がいいんじゃないかな？」

肩越しに告げられた言葉には、何の感情も籠っていないかった。

慰めている訳ではない。彼はただ事実を告げているだけだ。

「くそ」

全てをわかった上で、それでも巧はそう呟いた。

簡単に認める事など、できる訳がなかった。

Act・2 脱出

巧が『鏡界』に落ちてから、すでに一時間以上が経過していた。
ファントム・クラウン

幻影の道化は、現実の世界とこの空間とでは経過する時間に差異がある、と言っていた。その差異が一体どの程度なのかを巧は知らない。

現実世界で最後に確認した時刻は、午前八時十分。それから現実の世界では、一体どれぐらいの時間が流れたのだろうか？

もしかしたら日数単位、あるいは年数単位かもしれない。そう考えると、恐ろしくて聞く事ができなかった。

ファントム・クラウン
どれぐらい歩いた頃だろうか。ふいに幻影の道化が告げる。

「もう少しで着くよ。あの角を曲がってしばらく直進すれば、ようやくゴールだ」

ファントム・クラウン
そう言って幻影の道化は、ニコニコとした笑顔を見せる。

それが作り笑顔である事は、もうすでにわかりきっていた。その作り笑顔の奥で、彼は一体何を考えているのだろうか、と巧は思う。別段知りたいと思う訳でもないが、だからと言って全く気にならない訳でもない。何とも複雑な心境だった。

目の前の青年は、そんな巧の胸中に気付いているのだろうか。

(……見抜かれても不思議じゃないけどな)

なにせ「キミの事なら何でも知ってる」なんて台詞を吐く奴だ。「それくらい見抜いてるよ」、なんて言われてもおかしくない。

「良かったねえ。これで晴れて現実の世界に」
ファントム・クラウン
そこまで言い掛けて、突然幻影の道化は立ち止まった。

少し後ろを歩いていた巧は、同じように立ち止まり声を掛ける。「どうしたんだ？」

「……」
ファントム・クラウン
声を掛けても幻影の道化は返事をしない。

その顔には今までのような作り笑顔がない。無表情のままただジツと、少し先に見える曲がり角の辺りを見つめている。巧にはそれが、何かを警戒しているように見えた。

「何だよ？ あそこに何かあるのか？」

そう言つて巧が、青年の横を通り過ぎようとした時だった。

ファントム・クラウン

幻影の道化がその肩をいきなりガツと掴んだ。あまりの強さに巧は後ろへひっくり返りそうになった。

ファントム・クラウン

なんとか体勢を立て直し、慌てて幻影の道化に掴み掛かる。

「いきなり何するんだよ！」

ファントム・クラウン

不満をぶつける巧をチラリとも見ず、幻影の道化は困ったような声を出した。

「これはちよつとまずいかも知れないよ、神藤巧くん」

「は？ 何の事だ？」

「キミ、『心羅』の使い方は把握してるのかい？ どうやってあの剣を呼び出すのか、とか」

「なんだよいきなり。……まあ、何とも言えない。あの時は無我夢中だったし」

ファントム・クラウン

そんな頼りない言葉に、幻影の道化は「そうかい」と言った。

マトモな感情が備わっていない。そう自分で言っていたはずだが、今の彼の顔には若干焦りの色が見えている気がする。

「どうしたんだよ、一体？」

「神藤巧くん。『心羅』の力を使いこなせていないキミに、とっても素敵なお知らせだ」

「へ？」

その台詞はマンガやアニメなんかでよく目にする、いわゆるパターンな展開の開始を告げる言葉だなあと、巧は思った。

そう、つまりこういう場合、素敵なお知らせとは当事者にとって全く素敵などではなく、非常に悪いお知らせだと言っている事になる。これがよくあるパターン。

「で、そのお知らせって？」

少々顔を引きつらせながら、巧は幻影の道化と同じく、前方の曲がり角の方を見つめる。

するとその時、曲がり角の向こうの方からズンという鈍い音が聴こえてきた。音の響きからして、何か大きい物がこちらに向かつて歩いて来るような音。

物凄く嫌な予感がする。

「この『鏡界』に存在している『災魔』たちにはね、ある法則があるんだ」

「法則？」

そういう重要な感じの事は、もっと早くに教えておいてほしいと巧は思った。

曲がり角の奥から聞こえてくるズンという鈍い音は、心なしか複数に分かれて響いて来ているような気がする。

「さつきキミを襲ったヤツのように、『災魔』には常に単独で行動するタイプと、何体かの群れを作って行動するタイプの二種類があるんだ」

「それで？」

なんだかもう、答えは聞くまでもないような気がしたが、それでも一応尋ねてみた。その間にも、曲がり角の奥から聴こえてくる複数の音は、徐々にこちらへ近づいて来ている。

「つまりだ。もうキミの耳にも届いていると思うけど、今まさにこちらに迫りつつあるあの音の正体は、群れを成した『災魔』だ。そしてキミはまだ、自身の力を使いこなせていない状態にある」

これ以上聞いていても前置きが長くなるだけなので、さっさと結論付けてしまおう。

「もういい、わかった。逃げればいいんだろ？」

「理解が早くて助かるよ」

ファントム・クラウン

言うが早いか幻影の道化は、華麗に回れ右をして歩いてきた道を逆走し始めた。

その動作に少々遅れを取った巧は、丁度曲がり角を曲がってきた

『災魔』と鉢合わせする格好になった。

ファントム・クラウン

幻影の道化の言う通り、現れた『災魔』は三体いた。三体とも同じ姿をしている。

赤ん坊のようにずんぐりむっくりとした体型から、これが人型に近い『災魔』だろうと巧は思った。

人型に近い、と言っても、大きさはさっきの『災魔』とそれほど変わらない。麦わら帽子を斜めにかぶり、片方の目は隠れているが、もう片方の目は顔部分の輪郭と反比例して異様に大きい。フランス人形を模したような碧い眼からは、生気を全く感じられない。焼け焦げたドレスのような物を身に纏い、両手には巨大な鉈を握っている。

なんだかもう、色々とゴチャ混ぜな感じた。

「さっきの『災魔』の方がまだマシな格好だ！」

そう捨て台詞を残して巧は幻影の道化の後を追った。もちろん、鉢合わせする格好になっているのだから、『災魔』たちも後を追ってくる。妙な追いかっこが始まった。

先に走り出していた薄情者に追い付いた所で、さっそく巧は掴み掛かった。

「なんで真っ先にお前が逃げ出してるんだ！ さっき自分の事を化物と同じだみたいと言ってたくせに、戦ったりする事できないのかよ！？」

「言っただろう？ ボクはあくまで案内人なんだ。残念ながら、キミが期待するような力は持ち合わせてないよ」

「何だよそれ！？ 使えない奴だな！」

「それを言うならキミの方だろう。戦う力があるのはキミの方なんだから、キミこそ何とかしてみせたらどうなんだい？」

こういう擬音は、どうやらこういう場面で鳴るらしい。カチンと来るとはまさにこの瞬間の事だ。

巧はそれこそ靴が焼けるかのような急ブレーキをかけ、クルッと後ろを向いた。背後で幻影の道化がこちらに向き直る気配がした。

ファントム・クラウン

「そこまで言うならやってやるよ。お前は黙ってそこで見てろ！」
巧は前を向いたまま、背後の青年に思いつき怒鳴りつけると、
三体の『災魔』に向かって猛然と駆け出した。

距離は約三メートル。すぐにでも、『災魔』の持つ巨大な鉈が襲
い掛かってくる。

駆けながら巧は意識を集中させる。感覚を思い出そうとする。幻
影の道化が心羅と呼んだあの力を、初めて発現した時の感覚を。

あの時は無我夢中だった。でも今は違う。今ならわかる。自分の
中に眠っている、強大な力の存在が。

距離はもう一メートルにまで狭まっていた。三体の『災魔』の内、
先頭を走る『災魔』が、その巨大な鉈を振り上げた。そこで巧は叫
んだ。

「出て来い、『心羅』！！」

その瞬間、巧の身体から淡い光が発せられ、振り下ろされた鉈が
何かに阻まれた。

光が消えたその場所にあつたのは、巨大な片刃の長剣。巧が呼び
出した、『心羅』の力だった。

巧は瞬時にその剣の柄を握り、受け止めていた鉈を押し返した。
その反動で、『災魔』は自分の体重を支えきれずに後ろへと倒れ込
む。激しい轟音が辺りに響き渡った。

掴んだ剣を片手で一振りすると、巧は誇らしげに後ろを振り返っ
た。

「どうだ！ 言われた通り発現したぞ、文句あるか！」

少し離れた位置に立っていた幻影の道化は、勝ち誇った顔をして
いる少年に対して冷静に言う。

「それは結構な事だけど、よそ見していると危ないよ？」

「！」

背中に悪寒を感じて、巧は振り返るよりも飛び退く方を選んだ。
結果的に、それは好判断だった。いつの間にか起き上がっていた
『災魔』が、さっきまで自分が立っていた場所に鉈で一撃を加えた

のだ。そのまま振り返っていたら、恐らく巧の身体は頭から両断されていただろう。

嫌な汗が体中から噴き出した。

「油断大敵って奴だな」

自嘲気味にそう言っ、巧は剣を構え直す。『災魔』たちも鉈を構えてはいるが、滅多矢鱈に攻撃を加えてこようとはしない。巧の出方を窺っているようにも見えた。

（さて、どうする？ 確かに力は発現できたけど、剣術なんて素人同然だし、しかも多勢に無勢だ。後ろの道化は役に立たないし……）

内心で状況を整理しながら、それとなく背後にいる青年を貶してみる。だがそんな事をしてても状況が良くなる訳でもない。

すると突然、一体の『災魔』が動き出した。両腕を高く振り上げ、一気に振り下ろしてくる。

「くっ！」

巧はそれを受け止めず、後方に跳躍する事で躲した。勢いを殺す事なく振り下ろされた巨大な二本の鉈が、轟音を立てて地面にめり込む。

着地した巧が剣を構え直そうとしたその時、今度は別の一体が跳躍して頭上から降ってきた。それを避けるため、地面を蹴って右へ転がる。

すると今度は、残っていた一体が猛然と突進してきた。

「なっ!？」

態勢を整える暇もなく、巧は突進をもろに喰らい、さらに後方へ飛ばされた。

巧はうまく受け身を取る事が出来ず、何度も地面を転がった。

「くっ……、痛ってえ」

全身を襲う痛みに耐えながら、巧は何とか立ち上がる。地面を転がったため、制服のあちこちが少し裂けている。意識はハッキリしているが、体のあちこちを擦り剥いたりしているようだ。身体から

微かに血の臭いがする。

（マズイ。このままじゃやられるのは時間の問題だ。どうしたら）

「苦戦してるようだねえ」

「！」

いつの間にか、すぐ隣に幻影の道化が立っていた。こんな状況でもニコニコしているのは相変わらずだ。

「当たり前だろ。特別な力って言ったって、俺は剣なんて扱えないんだ。それに向こうは」

「それはキミが、その剣を単なる武器だと思ってるからだよ」

「え？」

言葉の真意がわからず巧は首を傾げた。単なる武器だと思ってるからだ、とはどういう意味だ？

「だって、これは武器だろ？ 銃や槍と一緒に」

「それは単なる武器じゃない。キミの心その物だよ」

「俺の、心？」

不思議そうな顔をする巧に対して、ファントム・クラウン幻影の道化は説き伏せるかのよう_にに告げる。

「『心羅』の力はね、心の象徴なんだ。キミが願うそれだけで、『心羅』の力は答えてくれる。当然さ、だって、キミ自身の心なんだから」

「……」

「さあ、キミはキミの心に、何を願う？」

戦いの極意を教わった訳ではない。敵の倒し方を習った訳でもない。だが不思議と、巧は焦りや不安が消えていくのを感じた。

今なら戦える。たとえ相手が何体いようと。

傲慢とも言える程の自信を漲らせ、巧は災魔の群れに向かって歩み出す。

今問われたばかりの言葉を心の中で反芻し、フツと笑ってみせる。
（何を願うか、だって？ そんなの決まってる。俺が願うのは）

一歩一歩強く踏みしめながら、『災魔』の群れとの距離を縮めていく。

そんな巧の身体から流れ出る静かだが力強い覇気に、『災魔』たちは明らかにたじろいでいる。生気がないはずのその顔に、恐れの色が浮かんでいるような気がした。

「俺が願うのは、日常だ。そして、俺が願う日常を守るための、力だ！」

「グ、グアアア！」

前進する巧の一番近くにいた『災魔』が鉈を振り上げた。それを合図に巧は疾走した。

『災魔』が振り下ろした鉈が頭上に迫る瞬間、巧は身体を右に捻り、紙一重でそれを躲した。

「はあああつ！」

身体を捻った事で生まれた回転の勢いを殺す事なく、剣を斜め上へ振り抜いた。ザシュという鋭い音と共に、いとも容易く『災魔』の身体が両断される。

その『災魔』の身体が崩れ落ちるのを待ったりはしない。振り抜いた剣を引き戻し、傍らにいた別の『災魔』に突きを放つ。長い刀身が災魔の胸の中心に吸い込まれ、その身体を貫いた。

「ギアアアアツ！」

胸を貫かれた『災魔』の悲鳴が辺りに響く。その『災魔』の正面から残りの一体が、巧を挟み込む形で襲い掛かる。

巧は貫いた状態のままの剣を無理矢理引き抜く。血が噴き出す事はないが、肉が抉れる嫌な音がした。

だが気に留める事はない。引き抜いた剣を下向きに構え、背後に迫る『災魔』を、振り返ると同時に斜め下から斬り裂いた。

その場で半回転した格好になった巧は、胸を貫かれ、苦しげに呻く『災魔』に止めを刺すため、再び半回転した。

「だあああつ！」

今度は上段に構えた剣を、思い切り振り下ろした。『災魔』の身

体が頭から両断され、景色が左右に分かれた。

流れるような動作で『災魔』を斬り倒した巧はフウッと息を付く。周囲で灰になっていく『災魔』の身体を見つめながら、動きの見違えた自分自身に驚いていた。

「……」

無言のまま、ただ自分の右手の掌を見つめる。感覚を確かめるように、巧はゆっくりとその手を握り締めた。

「凄い凄い。まさか、ちよっとヒントを与えただけでここまで強くなるなんてね。大したもんだよ」

ファントム・クラウン

幻影の道化はニコニコしながら軽く手を叩いている。彼のその振る舞いのせいか、あまり褒められている気がしない。

「まあ、お前のアドバイスのおかげだしな。どうにかなったよ」

心に願う。ただそれだけで、使用者の能力がここまで上がるとは、『心羅』とはまさに心の力と言える。

巧は一度剣を見つめた後、内心で、助かった、と呟いた。

それを戦闘終了の合図と受け取ったかのように、剣は淡い光を放って消え去った。

（なるほど。心で願う、って訳か）

ファントム・クラウン

言葉に出さずに納得して、改めて幻影の道化に尋ねる。

「それはそうと、出口が近いみたいな事言ってたよな。どの辺りにあるんだ？」

「ああ、そうだったね。じゃあ案内するよ」

ファントム・クラウン

歩き始める幻影の道化の後に続いて、巧はゆっくりと歩き出した。

「ここが出口だよ」

ファントム・クラウン

そう言って幻影の道化は立ち止まり、道の先の方を指差した。彼が示すその場所には、特にそれらしい物が見当たらない。そこは相変らず、廃墟となった住宅街の一角にある歩道のない道路だった。

「ここって言っても……、何もないぞ」

訝しげな顔をする巧に、相変わらずの作り笑顔で幻影の道化は告げる。
ファントム・クラウン

「そう、何もない所だね。でも間違いなくここだ」

まさか騙されたのだろうか？ 今更になって、そんな不安が巧の胸を過ぎる。

するとそんな不安を簡単に見抜いたように、幻影の道化が愉快そうに言う。
ファントム・クラウン

「心配しなくても騙してなんかないさ。何もないのは当たり前だよ。だってこれから開くんだから」

「え？」

ファントム・クラウン

幻影の道化は巧から数歩離れると、何もない虚空に向けて掌を差し向けた。

「我、扉を開く者なり。我、道を示す者なり。今ここに、我が盟約の形を現せ」

ファントム・クラウン

謎の文言を口にした後、幻影の道化は何もないはずの虚空を、掌に力を込めて押した。

すると不思議な事が起こった。

彼の掌を中心に、まるで水面に小石を投じた時のような波紋が広がって、何もない虚空が陽炎のように歪んだ。その歪みはやがて渦のように虚空を捻じ曲げ、その中心に暗い空洞のような物を生み出した。形は少々違うが、巧が鏡界に落ちた時に通ったあの穴に似ている。

「さあ、ここを潜れば、キミのもといた現実世界へ帰れるよ。おめでとう、神藤巧くん」

「……」

信じられないような体験を立て続けにして、やっとの思いで出口まで辿り着いたというのに、巧の気分はなぜか晴れない。

人の死を間近に体験したから、という理由だけではないような気がする。他にもっと、胸の内に引っかかっている物がある。

「どうしたんだい？ 帰りがかったんだろ、キミ自身の日常へ」

ファントム・クラウン

幻影の道化はただそう促すだけで、何も語ろうとしない。

思えば全ての謎が解消した訳ではなかった。

なぜこんな空間が存在するのか。なぜ人間を飲み込むのか。他にも挙げればいくつがある。そしてその最たる謎が、目の前の青年の存在だった。

「あんたは、一体」

何者なんだ、と問おうとして、巧は最後まで言い切る事が出来なかった。

躊躇った、からではない。背筋にとつともない悪寒が走ったからだ。

「何だ、この嫌な感じ？ 誰かに見張られてるような……」

「フフ」

「！」

押し殺すような笑い声が聴こえて、巧は眼を見開いた。

ファントム・クラウン

目の前に立っている幻影の道化が、声を殺して笑っている。決して明るい感じの笑いではない。嘲笑とも取れる笑いに、巧は警戒感を露わにする。

「何が可笑しいんだよ？」

「フフ……、いやごめんよ。キミといるとホントに退屈しないなあ
と思っ
てね」

「どういう意」

そこで巧は気配の正体に気付いた。さっきの悪寒は目の前の青年からしたのではない。自分と幻影の道化を囲むようにして、様々な

方向に何かがいる。

「どうやらさっきの『災魔』は、群れの一部分に過ぎなかったようだね」

「！」

朽ち果てた建物の陰から現れたのは、先程倒したのと同じ姿をした『災魔』だった。しかもその数が尋常ではない。

建物の陰という陰から、何体も次々と現れる。目算できるだけでも十数体はいる。

「なっ、なんでこんなに！」

「群れを作る災魔がいるのは珍しい事ではないけど、一度にここまですで現れるのは初めてだよ。やっぱり何かあるのかなあ、キミには」

意味深な発言をとりあえず聞き流しながら、巧は『心羅』を発現させた。剣を構え、群れた『災魔』たちを見る。

先程は付け焼刃の能力向上ながら、何とか倒す事ができたが、ここまで数が多いとさすがにそうはいかないだろう。ざっと見ても数は数倍。とても今の巧一人で対処できる数ではない。

緊張が身体を支配し、鼓動が徐々に速くなっていく。

「くそ……！　ここまで来て、こんな状況になるなんて！」

運が悪いなんてレベルの話じゃない。最悪だ。

希望を掴みかけたその瞬間に、絶望に絡みつかれ、一気に引きずり落とされたような気分だ。

「フウ、仕方ない。　神藤巧くん。悪いがキミとはお別れだ」

「え？　なッ！」

突然背後から襟首を掴まれ、巧はそのまま、開いていた出口に無理矢理放り込まれた。

その瞬間、身体がまるで引力に引かれているかのように、後ろ向きに思いつきり引っ張られる。抗おうとして手足をバタバタさせても、引力はどんどん強くなる。

「お、おい！　あんた、一体どういいうつもり」

穴の向こうに見える幻影の道化の背中が、徐々に遠退いていく。

それでもなぜか声だけは鮮明に聴こえた。

「キミは日常に戻りたかつたんだろう？　ならこんな所で油を売つてる必要はないよ」

「なっ！　待てよ！　まだ俺はあんたに聞きたい事が」

遠ざかる青年の背中に手を伸ばしても、距離は縮まる処か離れていく。

いつしかその背中が見えなくなると、眩い光によって巧の視界は真っ白になった。

「あれ？」

ふと気が付くと、そこには見覚えのある風景があった。

川の堤防に作られた遊歩道。土手を下ると川があり、その手前には地元のサッカーチームが試合を行うためのグラウンドがある。ここは巧の家からほど近い場所にある憩いの場だった。

「戻って……きたのか？」

巧は茫然と空を見上げる。青く透き通った空。血を塗りつけたような紅黒い空では、決してなかった。

今までの出来事は一体なんだったのだろうか。

辺りの様子を窺いながら巧は考え込む。夢にしてはかなりリアルな出来事だった。そもそも自分だって、これは現実だと最後の方は理解していたはずだ。今更夢才ちだったなんて事は無いだろう。

大体自分は登校途中だったはずだ。通学路を外れてこんな所に来ている訳が。

と、そこまで考えて思考が止まった。

「そうだ！ 学校！」

慌てて腕時計に目をやる。あれだけハードな出来事の後でも、壊れた様子は全くない。

現在、午後十二時五十分。デジタル時計の日付の部分は、最後に確認した日付と同じだった。つまりあれから四時間以上が経過しているだけ、という事になる。まあそれがすでに問題なのだが。

「……とりあえず今からでも行くか」

今の今まで自分に振りかかっていた出来事を、巧はあえて深く考えないようにした。

とりあえず今は、学校に急ぐ事の方が重要そうだ。

プロローグ2 Girl side

最初はただの夢だと思った。

突然目の前に現れた『非日常』は、彼女にそう錯覚させた。

ただと違う、そうじゃない。間違っているのは自分だ。あれは確かに、そこに存在している。

その少女は『非日常』を受け入れた。何の迷いもなく、自分の身体の一部であるかの様に、いとも簡単に。

「おもしろそうね」

少女は本当に楽しそうにそう言った。

少女は何もない日常にウンザリしていた。何事もなく過ぎていく日々に、物足りなさを感じていた。学業も私生活も順風満帆。だからこそ、日常に劇的な変化を起こしたかった。

彼女は非日常に憧れていた。何もない日常には興味がなかった。

だがこの日、この瞬間、彼女の日常は終わりを告げる。憧れていた非日常が、日常という名の怠情を破壊し始める。

だからこそ彼女は、水嶋^{みずしま}暁奈^{あきな}は生きていく事を決めた。

憧れを抱いていた、非日常の中で。

Act・3 遭遇

暁奈はただ退屈していた。

高校に通い始めてから一カ月も経った頃。暁奈は日に日に、そう感じる事が多くなっていった。

学業や私生活に不満がある訳ではない。むしろその全てが上手く行っている。そう、上手く行っているからこそ、退屈だと感じずにはいらなかった。

変化のない日常に。刺激のない毎日に。

暁奈の通っている学校は、県下でも名の知れた進学校だが、校則はそれほど厳しくない。スカートの長さは指定されていないし、あまりにも派手な色でさえなければ、髪を染めるのも自由だ。現に暁奈も、少し短めの髪を胡桃色に染めている。

だが、彼女はその外見とは裏腹に、かなりの優等生だ。

私立朝倉高等学校において、暁奈は常に学年のトップクラスの成績を収めている。運動においてもその能力は高く、まさに文武両道だった。

性格の面にしても、彼女は明るく、人当たりもいい。おまけに外見も、黒真珠を思わせる大きな瞳が印象的な、端正な顔立ちをしている。その為学校内、特に同学年の間では、彼女はかなりの有名人だ。

例え性格や外見を差し引いても、学校内で暁奈の問題点を探すのは、恐らく無理だろう。

その事は本人も、ある程度自覚していた。

自覚して、退屈な日々を過ごしていた。

学業において競争相手がいないから、ではない。おもしろいと思える事がないから、という訳でもない。暁奈が感じている退屈とは、そういう類の話ではない。

毎日が同じ事の繰り返し。変化しない日常こそが、彼女が感じている物の原因だった。

何か変化が起きてほしい。

それも並大抵の事ではなく、自分の心を惜し気もなく高揚させてくれるような、劇的な変化が。

暁奈はそう、非日常に憧れを抱いていた。

ところが、そんな彼女の願いは、ある日突然叶えられる。

それは下校途中の事だった。

その日の帰り道、暁奈はたまたま一人だった。

友達と一緒に帰る時以外、暁奈は特に寄り道をしない。いつも使っている通学路を通って、まっすぐ家まで帰るのが彼女の常だ。

それは丁度、家と学校の中間辺りにある商店街を抜けて、住宅密集地へと繋がる道を歩いていた時だった。

暁奈は何か割れるような音を聞いた。固い物を足で踏みつけて砕いているような、不思議な音。不審に思い、暁奈が周囲を見回している時だった。

暁奈から少し離れた所を歩いていた買い物帰りらしき中年の女性が、眼の前で突然消えた。何の比喻でもなく、文字通り消え去った。あまりに突然の事に、一瞬何が起きたのかわからなかった。

「え……、何あれ？」

そんな暁奈の眼に映ったのは、虚空に浮かぶ巨大な穴だった。まるで空間その物が裂けたかのように口を開けているそれは、どう見ても物理的にあり得ない物だった。

「まさか、さっきの人もあの中に？」

何の確証もなく、暁奈はそう感じた。

普通の人間なら、目の前に得体の知れない物が現れば、少なからず恐怖を感じるだろう。

だがそれに目を奪われた瞬間、暁奈が感じたのは全く別の物だっ

た。

鼓動が高鳴っている。ずっと待ち焦がれていた物が、願い続けた物が、すぐそこにあると。間違いなくあれは非日常の現象だと自分の心がそう言っている。

「おもしろそうね」

大好きなおもちゃを買い与えられた子供のように、暁奈は満面の笑みを作る。そして何の躊躇いもなく駆け出した。自分を手招きしている非日常へと向かって。

暁奈の意識が途絶えたのは、その直後だった。

時間を僅かだけ遡る。

朝倉市と言う街の、東の外れにある住宅街の中の一軒家。それが巧の住んでいる家だ。

放課後、特に何事もなく家に辿り着いた巧は、重たい脚を引きずるようにして家の中に入った。

「ただいま」

巧は力なく吐き出すようにそう言って、玄関のドアを閉めた。間もなくして、セーラー服にエプロン姿の可愛い女の子が、「お帰り」と言っ巧を出迎えた。

軽く癖の入った黒髪のロングヘアに、青い花柄のヘアピンを付けている中学生くらいの少女。

彼女は巧の妹で、神藤和菜恵しんとう かなえと言う。歳は巧の二つ下で、現在中学二年生だ。訳あって家を空ける事の多い母親に代わって家事全般をこなす、年の割にしっかりした子だ。兄妹の仲はよく、巧は和菜

恵の事を『カナ』と呼んでいる。

帰ってくるなりげんなりした様子の兄を見て、笑みを含んで和菜恵が言う。

「どうしたの？ お兄ちゃん、何かやけに疲れてない？」

「いやまあ、色々あってな……」

今日自分に起きた出来事を正直に話す訳にもいかず、巧はやれやれと溜め息をついた。

あの後結局、学校に登校出来たのは午後の授業が始まった頃だった。

どこかで失くした鞆をやつとの思いで探し出し（鞆はなぜか、通学路の道路の脇にある茂みの中にあつた）、肘や膝の辺りの布が擦り切れてしまった学生服を着替えるため、一旦家に戻った。

巧の両親は共働きで、父親の方は単身赴任中。母親の方も仕事が忙しく、昼間に家にいる事は滅多にない。そんな訳で、着替えに帰っても特に問題はなかった。

学校に着いてからは、担任への言い訳には「風邪を引いた妹の看病」で事足りたが、親友の高橋和真や友人たちにはその程度では誤魔化せず、別の言い訳を考えるのにかなり苦労した。

そついう経緯を経て、本日二回目の帰宅。正直疲労感が半端ではない。すぐにでもベッドに倒れ込んでしまいたい気分だ。

「どうする？ ご飯作ってあるけど……」

おずおずと躊躇いがちに和菜恵は尋ねてくる。彼女の眼には今の巧がかなり疲れているように見えるらしい。まあ実際その通りなのだが。

「ああ、うん、食べるよ。先にちよつと着替えてくるから。ありがとう、カナ」

「うん、わかった」

巧の言葉でわかりやすいぐらいに顔をパアッと輝かせる和菜恵は、パタパタとリビングの方へ駆けていく。その背中を見送った後、巧は自室のある二階へと向かった。

階段を上りながら巧はふと、あの世界での出来事を思い出した。人の死を体験し、化物に追われ、化物と戦い、そして帰ってきた。今でもあれは夢だったのかと不思議に思う。そう思える程、巧の日常は何の変化も起こしていない。

だがそれでも考えてしまう。自分を現実世界へと送り返してくれたあの青年は、あの後どうなったのだろう、と。

彼は戦う力を持っていないと言っていた。もしそれが本当なら、彼は今頃。

巧は自室の前に辿り着き、ドアを開けて中に入った。

「やあ、お帰り」

そして盛大にずっこけた。

自分が使っているベッドでゆったりくつろいでいるのは、紛れもなく幻影の道化だった。
ファントム・クラウン

部屋を勝手に物色したのだろう。幻影の道化の周りには、本棚に綺麗に整頓してあったはずのマンガや雑誌が、これでもかと言う程散らかっていた。
ファントム・クラウン

巧はその中から一番分厚そうな本を一冊拾い上げ、それで幻影の道化の頭を思いっきり叩いた。
クラウン

「何であんたがここにいるんだよ!?　って言うか人の部屋で何勝手にくつろいでんだ!」

「痛いなあ……。キミが帰ってくるのを待ってたんだよ」

頭を摩りながらベッドから降りる幻影の道化。当然悪びれる様子など微塵も感じられない。
ファントム・クラウン

「何が待ってただ、ったく……。大体どこから入ったんだよ?」

「それは企業秘密って奴だよ」

「別に知りたくて聞いたんじゃない」

やれやれと、巧は勉強机の椅子に腰掛ける。

その巧と話をするためのだろう。勉強机の右隣にある、ベランダに出るために設置された長枠のガラス戸に、幻影の道化は背を預けた。

この青年がこうしてここに存在しているという事は、やはり今日起きた出来事は全て現実だったという事だ。

それがいい事なのか悪い事なのか、巧には判断出来なかった。

「……無事だったんだな。あの後どうしたんだ？ 戦う力は持っていないんじゃないのか？」

先に口を開いたのは巧の方だった。意外にも、自分は幻影の道化の身を案じていたらしい。

幻影の道化の方もこれには意外だったようで、眼を丸くした後、いつもの軽い調子で口を開いた。

「別に、何も術がないとは言っていないよ。ただ二人でいた時よりも、一人でいた方が都合が良かったってだけの話さ」

「……？」

言葉の意味がわからず巧は訝しげな顔をした。それを気に留めず幻影の道化は続ける。

「キミは早く現実世界に戻りたいって感じだったし、あの数の災魔を相手にするのは、今のキミじゃ荷が重すぎる。まあ、お互い無事だったんだから、それで良しとしようじゃないか」

この話はこれで終わりとばかりに、幻影の道化は右手をひらひらと振ってみせる。

「それにしても、キミが僕の身を案じてくれてたとはね。てつきり嫌われてるものとはかり思ってたのに」

そう言ってわかりやすくニコニコとされると非常にバツが悪い。別に照れ隠しのつもりはなかったが、巧は露骨に顔を逸らした。

「別に、好き嫌いの問題じゃない。あんたにはまだ、色々と聞いた事があったからな」

心から心配していた、という訳ではないが、少なくとも気になっ

ていたのは事実だ。

この男にはまだ聞きたい事、聞き切れていない事が色々ある。それを解消しないまま二度と会う事がなくなるなんて、それこそ耐えられそうにない。

椅子の背凭れから身体を離し、巧は手を組んで仮面の青年を真っ直ぐに見た。

「教えてくれよ。あんたは一体何者なんだ？ あの空間、『鏡界』って一体何なんだ？ 何であんな物が存在するんだ？」

矢継ぎ早に質問を浴びせる巧に、ファントム・クラウン幻影の道化はしばらく無言を貫いた。その顔にあの作り笑顔はなく、ただ無表情のまま巧を見つめ返している。

「……わかったよ。どうやら話さないと納得しないようだしね」
まるで自分の隠していた犯罪を自供する犯人のように、ファントム・クラウ幻影の道化は肩をすくめて溜め息をついた。

「キミはさ、運命って言葉を信じるかい？」

「え……？」

急な話題の転換に、巧は付いていけなかった。怪訝な顔をしている巧の前を通り過ぎ、ファントム・クラウン幻影の道化は再びベッドに腰掛ける。その表情は、どこか切なさが混じっているように見えた。

「ボクはね、運命って言葉を信じてるんだ。……いや、違うか。自分自分の身に起きた事を認めたくないから、運命って物のせいにして誤魔化してるんだろうな」

「……どういう意味だよ？」

言葉の意図が読み取れない。一体彼は、自分に何を伝えようとしているのか。

質問の答えを待っていると、ファントム・クラウン幻影の道化が自嘲気味に笑ってみせた。その顔は、今までに見たどの笑みよりも、彼の内心を明確に表現しているように見えた。

「ボクはね、元はキミと同じ、『人間』だったんだよ」
「！」

巧は言葉自体には驚いたが、同時に少し納得のいかない部分があった。

確かに眼の前の青年は、自分の事を化物と同じだと言っていた。だがそれは言葉だけで、彼が化物染みた姿になったりした訳ではない。あの異様な空間に存在していた事は事実だが、見た目だって、最初外国人かと思つた程、人間その物の姿をしている。

ならば今の言葉はどういう事なのか。

巧は冷静に、ファントム・クラウン幻影の道化が言葉を紡ぐのを待った。

「ボクは昔、キミのように『鏡界』に飲み込まれた。そしてそこで、『災魔』に喰われたんだよ」

「！ 喰われたって……」

それはつまり死んだという事。

化物に喰い殺された、という事。

ならば今日の前にいる青年は何なのか。

言葉を詰まらせる巧から、ファントム・クラウン幻影の道化は視線を外した。何かを思

い出すように、その薄藍色の瞳は虚空を見つめている。

「確かにボクはあの時死んだ……。自分でもその自覚がある。でもそれが全てじゃない。その後があるんだよ」

「後……？」

「『声』がね、聴こえたんだ。『災魔』に喰われた後、自分が死んだっていう自覚があるのに、なぜか意識だけははつきりとあった。その時聴こえてきたのは、誰かの『声』だった」

今でもはつきりと覚えている。あの時の出来事を。

ファントム・クラウン幻影の道化の表情には、そんな心の声が映し出されているようだった。

『鏡界』に飲み込まれたあの日、ファントム・クラウン幻影の道化は『災魔』に喰われて死んだ。死んだと思った。だがそれで終わりではなかった。

ファントム・クラウン視界が消え、何一つ見えない暗闇の中で、幻影の道化は『声』を

聴いた。遠く木霊す雷鳴のような、重みのある深い『声』。それは彼の耳に聴こえた物か、それとも脳に直接響いた物か。

「現実世界から隔絶された、愚かで哀れな子羊よ。お前に役割を与えてやるう」

声の主はそう言つて、幻影の道化を嘲笑つかのように、拒否する時間を与えなかった。

「これは盟約。これからお前は、この『鏡界』の住人であり、案内人となる。これから訪れるであろう子羊どもの、導き手となるのだ。今この瞬間から、お前の新たな名は」

「

「ファントム・クラウン幻影の道化。それがボクに与えられた名前だつた」

自分に身に起きた出来事を語り終えた幻影の道化は、ファントム・クラウン腰掛けていたベッドから立ち上がり、再びガラス戸の前に立つて外の風景に目を向ける。

外は夕日に照らされ、何もかもが橙色に染められている。その眼は多分、何かを見つめている訳ではないのだろうかと、巧は思った。「あの日、『鏡界』の案内人となつた瞬間から、ボクは自分の過去を思い出す事ができない。……自分の本当の名前も、歳も、どこに住んで、どんな人生を送っていたのかも、もう何も思い出せない」ファントム・クラウンそう語る幻影の道化の背中中は、見ている者の胸を締め付ける程、とても悲しげに見えた。

しばらく二人の間に沈黙が下りた。それを巧は、ゆっくりと打ち破る。

「じゃあ、あんたにもわからないのか？ 『鏡界』がなんなのかとか、何のために存在してるのか、とか」

「残念ながらね。あの空間に関する知識は、案内人になると同時に頭に溢れ返ってきたけど、肝心な部分についてはわからないままだ。……あの『声』の主が誰なのかって事もね」

青年の伏し目がちな表情が、窓ガラスに映り込んでいる。その顔

が、嘘や隠し事をしてはいないと語っているようだった。

謎が一つ解明されたかと思えば、また新たに謎が芽吹く。このままでは埒が明かない。

少し気分を変えるため、巧は違った質問を試みる事にした。

「そういえば、俺の事何でも知ってるって言ってたけど、あれはどうしてなんだ？」

話題を変更した事で、ファントム・クラウン 幻影の道化も一段落ついたと認識したのだろう。巧の方へ振り返り、またニコニコとした顔で話し始める。

「あれは案内人であるボク 능력でね。『鏡界』内に落ちてきた人間の記憶を、覗く事ができるんだ。試しにキミの子供の頃の失敗談を話して見せようか？ キミは小学校五年生の時に――」

「わかった、もういい」

有無を言わず会話を断ち切る巧。小学校で、しかも五年生の頃の失敗談と言えば、思い当たる物は一つしかない。

古傷を抉られたような気分を変えるため、巧はもう一つ問い掛ける。

「さっき『鏡界』の住人って言ってたけど、今ここにいてるって事は、現実世界に出て来られるのか？」

話題を黙殺された事に多少の不満を感じている様子だが、ファントム・クラウン 道化は軽い調子で答える。

「ああ、今ここにいてるボクは『本体』じゃないよ。『思念』だけを飛ばしてキミの前に映してるだけだ」

「そうなのか？ じゃあやっぱり現実の世界には――」

「うん、出られないよ。それに出られたとしても、ボクの姿や声はキミみたいに『力』に目覚めた人間にしか見えないし聴こえないはずだから。この『思念』もね」

軽い気持ちで聞いた事が意外と重要な事だったので、巧は少々驚いた。

すると突然、何かに気が付いたようにファントム・クラウン 幻影の道化が顔を上げた。その眼は何もない虚空を見つめている。

「？ どうした？」

「いや、ごめんよ。どうもお客さんが来たらしい」

「え？」

何の事かわからず巧が首を傾げた時だった。

部屋のドアが外から数回ノックされた。そのすぐ後に、聴き慣れた和菜恵の声が聴こえてくる。

「お兄ちゃん、何してるの？ 早くしないと晩御飯冷めちゃうよ？」

「あ、ああ。悪い、すぐ行く」

ファントム・クラウン

幻影の道化との会話を聞かれていたのかと焦ったが、和菜恵は声だけ掛けると、また階下に降りて行ったようだ。

フウと巧は息を吐く。

ファントム・クラウン

まあさっきの話が本当なら、幻影の道化の声は和菜恵には聴こえていないはずだと巧は思った。だがよく考えてみるとそれは、自分が独り言を言っている怪しい奴、と思われる可能性を大いに含んでいる。

聴かれてない事を祈るばかりだと巧がドアから視線を戻すと、今まで目の前にいたはずの青年の姿がどこにもない。

「あれ？ いつの間に……」

和菜恵が来るのに気付いて消えたんだろうな、と勝手に結論付け、ベッドに散らかされたままのマンガや雑誌を本棚に戻し、Ｔシャツとジーンズに着替えて、巧は部屋を後にした。

ファントム・クラウン

幻影の道化が消えた理由。

自分の予想が全くの勘違いだった事を巧が知るのは、もっと後になつてからの事だった。

暁奈が眼を覚ますと、そこにはおかしな光景が広がっていた。

夕焼けの色ではない、紅黒い色に染められた空。朽ち果てて廃墟となつてしまつた見覚えのない街並み。そして。

「こんばんわ。愚かで哀れな子羊さん」

目の前に立っていたのは、童話やおとぎ話に出てきそうな西洋風の服の上から、身長とほぼ同じ長さの黒いマントを着て、顔の左半分だけにピエロのメイクをした仮面を付けている、銀髪に薄藍色の瞳をした青年だった。

だが暁奈は、大して驚いた様子も見せず青年に問う。

「あなた、誰？」

「ボク？ ボクはこの世界の案内人、ファントム・クラウン幻影の道化だよ。よろしくね、

水嶋暁奈さん」

「！」

暁奈もさすがにこれには驚いた。青年はなぜか自分の名前を知っている。それだけで充分おもしろかった。

「スゴイ！ 私の名前を知ってるなんて！」

嬉しそうなその反応を見て、ファントム・クラウン幻影の道化はキョトンとしている。なぜそんな反応ができるのか、と言いたげな顔だ。

「……驚かないのかい？」

ファントム・クラウンしばらく間を空けてから幻影の道化はそう尋ねてきた。それでも暁奈の反応は変わらない。

「驚いてるわよ？ だからスゴイって言ったんじゃない」

「……」

さつきからどうも、目の前の青年は自分の事を不思議そうに観察している。何かおかしな事を言っただろうかと考えてみたが、暁奈には思い当たる節がない。

「どうかしたの？」

考えても理由がわからなかったので、とりあえず幻影の道化に尋ねてみる。すると返ってきたのは意外な言葉だった。

「キミ、随分と変わってるね。非日常の世界に憧れてるなんてさ」
「！」

今までの会話だけで、ファントム・クラウン幻影の道化は暁奈の心の内にある物を見抜いていた。正直驚いたが、それでも暁奈は嬉しそうに明るく笑う。
「あなたって凄いのね。ちょっと会話しただけでそこまで見抜いちやうなんて」

「それだけが取り柄みたいなもんだからね」

自嘲気味に肩をすくめる青年を見て、暁奈はクスツと微笑する。
「なんだか妙におどけていて、まさしく『道化』という感じだなあと
思った。」

ファントム・クラウン「ねえ、幻影の道化さん。ここは本当に非日常の世界なの？」

暁奈は改めて尋ねた。

答えを聞かなくても、暁奈にはここが非日常の世界だという確信に近い物があつた。間違いなく現実だという自覚もある。

ファントム・クラウンそれでも幻影の道化に尋ねたのは、自分がまだ、日常から抜け出せていないんじゃないかという不安が、心のどこかに残っていたからだ。

ファントム・クラウンだが幻影の道化は、そんな暁奈の不安をニコニコとした笑顔で打ち払う。

「そうだよ。ここは『鏡界』と言って、キミがいた現実の世界とは違う、別の世界だ。そんなに心配しなくても、ここはキミが望んでいる通りの世界だよ」

その言葉を聴いただけで充分だった。本当に嬉しそうに、暁奈は眼を輝かせながら幻影の道化に頭を下げた。

ファントム・クラウン「私をこの世界に呼んでくれてありがとう、幻影の道化さん！ 嬉しくてたまらないわ！」

あの虚空に開いた穴に飛び込む時、暁奈はこの世界が自分を手招きして呼んでいるように感じた。それはもしかしたら、この青年が

自分と呼んでくれていたからなんじゃないか。

そう考えるだけで、暁奈の胸は次第に高鳴っていく。

劇的な変化が訪れた、と。

「フツ」

「！」

そんな暁奈の気分には水を注すかのように、突然目の前の青年が右手で自分の顔を覆った。よく見ると、身体が微かに震えている。

それが笑いを押し殺そうとしている動作だと気付くのに、その時間には掛からなかった。

「アハハハハハ！」

ファントム・クラウン

ついに耐えきれなくなったのか、幻影の道化は身体を揺らして高らかに笑い始めた。

だが暁奈には、それがなぜなのかわからない。何がそんなに面白いのだろうか？

「全く……、同じ人間同士でここまで違うとはね、フフ」

笑いを含みながら何かを言った気がしたが、暁奈にはハッキリと聴き取れなかった。

「どうしたの？ 何がそんなに」

「キミは異常だよ」

「！」

何の脈絡もなく突然そんな事を言われた。異常？ 自分が？

「さっき変わってるねってキミに言ったけど、どうやらあれは間違いだ。そんなレベルの話じゃない。キミの非日常に対する憧れは、最早心酔に値する物だよ」

そう言われて暁奈は初めて疑問を感じた。自分は異常なのか、と。今まで考えた事もなかった。確かに、自分は他の人間と違って非日常に憧れている。でもそれだけだ。

勉強にしたって運動にしたって、自分が他の者と比べられない程の能力を持つていると思っただ事はない。自分は考え方は違うが、他の部分は大多数の人間と変わらないと、そう思っていた。

ファントム・クラウン
だが幻影の道化は言った。

キミは異常だと。キミの思いは憧れではなく心酔だと。

暁奈はこの時初めて、自分が他の人間とは根本的に違いがあるんだと認識した。自分は変わってるんじゃない、異常なんだ、と。

「一体何がそこまでキミを駆り立てているのかな？ 実に興味深い限りだよ」
ファントム・クラウン

暁奈の様子を眺める幻影の道化の表情は、身も凍るような冷たい笑顔だった。

「そんな『異常』なキミに、いい物を見せてあげるよ。付いておいで」

ファントム・クラウン
背を向けて歩き出す幻影の道化に暁奈は尋ねる。

「どこに行くつもりなの？」

「それは着いてからのお楽しみ」

振り向いた青年の顔は、元のニコニコとした笑顔に戻っていた。

神藤家の夕飯は大抵、巧と和菜恵の二人だけで取る事が多い。父親は単身赴任中で母親は多忙で家を空ける事が多い、という絵に描いたような共働きの家庭。

最後に一家四人で食卓を囲んだのは一体いつの事だったか。そんな事をぼんやりと考えながら、巧は和菜恵と向かい合って座り、箸を進めていた。

テーブルの傍に置かれた薄型のテレビからは、夕方のニュース番組が流れている。それをなんとなく見ながら夕飯のおかずの唐揚げを頬張っていた巧は、ふと視線を感じて向き直る。

向かい側の椅子に座っている和菜恵が、白米の入った茶碗と箸を持ったまま、穴が開く程巧の事を見つめていた。何か不満そうな顔をしている。

「な……、何だよ？」

別に大してやましい事がある訳でもないのに、自然と言葉が吃ってしまう。和菜恵に不満そうな顔をされると、なぜかいつもそうなるってしまうのだ。

「お兄ちゃん、さっき部屋で誰と何話してたの？」

「……！」

やはり聴かれていたか、と思い、巧は少々焦る。

だが『誰』と『何を』という事は、会話の相手や詳しい内容までは伝わっていないようだ。どうやら幻影の道化が言っていた事は本当らしい。

「何だよ、聴き耳立ててたのか？」

「ち、違うもん！」

悪戯っぽく言つと和菜恵はすぐに反論してきた。頬の辺りがちょっとだけ紅い。

「お兄ちゃんが中々降りて来ないから呼びに行ったら、部屋からお兄ちゃんの声だけ聴こえて気になったただけだもん」

「ああ、そっか……」

巧はわざとらしく、テーブルの上の麦茶が入ったコップを掴んで口に運ぶ。さて、どう言い訳した物か。

（何か今日は言い訳を考えてばかりだな）

学校での経緯を思い出してげんなりする。

不毛な事に脳味噌を使う余裕があるなら、少しでも自分の偏差値を上げる事を考えろ、という数学の担当教師の言葉が頭に浮かんだ。しかしこの場合は別だろうと、巧は内心で意味のない弁明をする。

まさか本当の事を話す訳にもいくまい。信じてもらえないばかりか、下手をすれば病院送り、なんてバカみたいな展開もあるかもしれない。身内だからこそより一層の注意が必要、という物だ。

巧は麦茶を飲み干すと、コップをテーブルに置いて和菜恵の方を見た。

「あれだよ、ホラ、携帯電話。携帯に和真から電話が掛かってきてさ。ちよつと長話してたんだ」

「高橋先輩と？」

親友の高橋和真とは長い付き合いで、和菜恵も和真とは面識がある。和菜恵も昔は『和真くん』と呼んで親しげにしていたが、中学に入ってから礼儀として『高橋先輩』と呼ぶようになった。

和真がそれを若干寂しがっている、というのは本人の強い希望で和菜恵には教えていない。

「そういう事。決してお前の兄貴は、ブツブツ独り言をしゃべっているような人間じゃないから、安心しろ」

「心配しなくても、そうだった時はいいお医者さん紹介してあげる。クラスの友達のお父さんが、そういう専門のお医者さんらしいから」
「どういう意味だよ」

そんな事を言い合って、結局最後は二人とも噴き出してしまった。二人だけの夕飯も、こういう雰囲気なら悪くない。会話が弾めば楽しい物だ。

「では次のニュースです」

しばらく笑っていた巧は、テレビから聴こえたその声に何気なく耳を傾けた。

「今日午前八時十分頃、朝倉市東部の路上で通勤中の会社員、桑名佳文さん三十六歳が、軽自動車に引かれて死亡するという事故が発生しました。事故現場となったのは」

午前八時十分という時間が気になって、巧はテレビの方に目を向けた。

そしてそこに映っていた事故現場の映像を見て愕然とする。

映像の左下に出ていた顔写真は、巧と共に鏡界に飲み込まれたあのサラリーマン風の男性だった。

「な……」

しかも事故現場とされているのは、巧が『鏡界』に飲み込まれたあの横断歩道のある場所だった。

（どういう事だ！？）

巧は辛うじて、その言葉を声には出さずに飲み込む事が出来た。訳がわからない。あの男性は確かに自分と共に『鏡界』に飲み込まれ、そして『災魔』に喰われた。現実世界には存在しない化物に喰い殺されたのだ。交通事故などという、現実的な理由ではない。しかもその遺体が、なぜ現実世界に出てきているのか。

（これも、あの『鏡界』が関係してる事なのか？）

疑問に思いつつも、巧には確信に近い物があつた。無関係なはずがない。こんなあり得ない現象が起きているのだから。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

和菜恵に声を掛けられ、巧は我に返った。和菜恵は巧と同じようにテレビのニュースに目を向け、驚いた表情になる。

「ここ、お兄ちゃんが通学に使ってる道じゃない。ひょっとしてお兄ちゃん、事故を目撃したの？」

「あ、いや……、違うよ。今日はたまたま違う道を通ったから知らなかったんだ。ホント、ビックリだよな」

多分自分は今、とても焦った顔をしているんだろうなと巧は思った。完全に動揺している。和菜恵を誤魔化しかれたという自信もない。現に和菜恵は、不思議そうな顔をして巧の顔を見つめている。

（ダメだ、落ち着け。落ち着くんのだ）

そう内心で言い聞かせても、心臓の鼓動は一向に治まりそうにない。

聞かなければと思った。ファントム・クラウン 幻影の道化なら、必ず何か知っているに違いない。

その後とりあえず夕飯を平らげ、巧は自室へと急いだ。

普段なら食器の片付けを和菜恵と一緒に行うのだが、今日だけは和菜恵に頼み込んで任せる事にした。

今は一刻も早く真相を確かめる必要がある。

「やあ、夕飯はおいしかったかい？」

ある程度予想して自室のドアを開けると、ファントム・クラウン 幻影の道化は勉強机の角に浅く腰を掛けていた。

「どついう事が説明しろよ」

ドアを閉めると同時に、開口一番で巧は言った。語気が若干荒くなっている。

「怖い顔だな。何があつたんだい？ 突然説明しろって言われても何の事かわからないよ。先に説明するべきなのは、キミの方なんじゃないかな？」

「……ッ」

ファントム・クラウン 苛立ち紛れに幻影の道化を睨んでみたが、確かに言い分は向こうの方が正しい。

巧は落ち着いて、順を追って説明した。

「なるほどね」

ファントム・クラウン

話を聞き終えた幻影の道化は軽い調子でそう答えた。

「そういえばその辺りの事については話してなかったね。気を悪くしないでくれよ。別に隠していたつもりはないんだ。話せるタイミングがなかっただけ」

「前置きはいいからさっさと教えてくれ」

巧の言葉には一切容赦がなかった。今は、彼の軽い調子に合わせ

る余裕がないのだ。

ファントム・クラウン

幻影の道化は表情を消すと、淡々と語り始めた。

「『鏡界』内で死んだ人間は、『異物』として現実世界に放り出されるんだ。その際、その人間の『死』という物の原因や経緯が、事実とは異なる形で現実世界に認知される。……今回の場合は、それが偶々交通事故だった、という事だよ。場合によっては事件になったり、病死になったりもする」

「何で、そんな事になるんだ？」

「『鏡界』という『非日常』の存在は、現実世界にとって『あつてはならない』存在なんだ。その存在が現実世界に正しく認知されてしまうと、双方の世界が『融合』を起こしてしまう。それを防ぐために『存在の隠蔽』が行われているんだ。……それと同様に、自力であの空間から抜け出せた者がいたとしても、その人物の記憶からは、『鏡界内で起こった全ての事象』が消去される。つまり、何も覚えていない、という事になるのさ。尤も、キミのように『力』に目覚めている者は別だけだね」

現実世界に存在を認知されないために、『鏡界』は生き残った者にも死んだ者にも影響を与える。それは等しく改竄と呼べる行為だ。だが巧には疑問が残る。そもそもそんな危惧を抱き、死因や記憶の改竄を行っているのは誰なのか、と。

「それはあんた自身がやってる事じゃないんだよな？」

「違う……、と言つても信じてもらえないだろうけどね。ボクはただ、知識としてそれを知っているだけで、誰が行っているのかまではわからない」

「……」

ファントム・クラウン

あの空間には、幻影の道化すら知らない何かが潜んでいるとでも言うのか。

もしそうだとしても、それを確かめるためには、再び『鏡界』へ足を踏み入れるしかない。

逡巡するのもそこそこに、巧は顔を上げる。

「ファントム・クラウン 幻影の道化。もう一度俺を『鏡界』へ連れて行ってくれ」

「……いいのかい？ キミはもう日常に戻ったんだ。これ以上関わる必要なんてないんだよ？」

自分の身を案じているから質問しているんじゃないと、巧にはわかっていた。

思えば『鏡界』の中でも似たような事があった。あの時も、幻影の道化はただ事実だけを告げていた。

それと同じだ。そこには何の感情も意図もない。あるのはただ、厳然たる事実だけ。それでも巧は答える。

「確かにそうだけど、あの空間が存在する限り、同じ事がまた何度でも起きる。それを見て見ぬふりするなんて、俺にはできない。そんなのは、俺の求めている日常じゃない」

真っ直ぐにファントム・クラウン幻影の道化を見つめる巧の瞳には、強い意志の光が宿っている。今度は自分から、非日常へ足を踏み入れる。今の巧に迷いは一切ない。

「わかった。じゃあ案内するよ」

そう言っファントム・クラウンて立ち上がった幻影の道化は、ふと思いついたように告げる。

「ああ、そういえば忘れる所だった」

「？ 何だよ？」

「『鏡界』に、また別の人間が落ちたから」

「！？」

今更になつての報告に、巧はただ言葉を失うしかなかった。

暁奈は目の前の光景に絶句した。

化物が、人間を喰らっている。

彼の、ファントム・クラウン幻影の道化の見せたかった物とは、これの事だったのか。

『鏡界』という名の紅黒い空の下、ゴーストタウンのような廃墟の街を歩き続け、辿り着いたのは朽ち果てたオフィスビルや雑居ビルが立ち並ぶ、片側二車線の交差点。

その交差点付近に辿り着いた時、前方の交差点中央で中年の女性が、今まさに化物に襲われそうになっていた。

あの中年の女性は、さっき自分が見かけた女性だ。

とつさに助けなければと走り出そうとした暁奈の二の腕を、ファントム・クラウン幻影の道化が力強く掴んだ。まるで助けに行こうとする暁奈を遮るかのように。

「放して！ あの人を助けなきゃ！」

「あの化物は『災魔』と言ってね。この空間に落ちてきた人間を喰らおうとするんだ」

「そうじゃなくて、あの人を助けないと」

「助ける？ 無理だよ。キミみたいなただの人間がどうにかできる相手じゃない」

「！？」

暁奈は自分の耳を疑った。この青年には、今の状況が理解できていないのか。

「それに、キミがあの人間を助ける事に何の意味があるんだい？」

「キミは非日常を望んでたんだろう？」

「それは」

確かにそうだ。自分は非日常の世界に憧れていたし、望んでいた。だがこんなのは話が別だ。自分はただ変化を望んでいただけで、決して人の死を望んでいた訳ではない。

ファントム・クラウン暁奈は幻影の道化の腕を振り払おうと、必死に抵抗する。

だが、すでに遅かった。

グシャツという生肉を引き裂いたような音が聴こえて振り向くと、そこにはもう女性の姿はなかった。

そこにあつたのは、大量の紅い液体と、原形を留めていない肉片だけだった。

「ッ」

暁奈は視線を逸らし、両目を固く瞑った。

なぜこんな事になったのか。何がいけなかったのか。そんな後悔の念ばかりが胸中を駆け巡る。

瞳を閉じた暗闇の中で、ファントム・クラウン幻影の道化が自分の腕をようやく離すのがわかった。それでもまだ、暁奈は眼を開ける事ができない。

「都合がいい物だね。そうやって見て見ぬふりをするのかい？」

青年の声で、暁奈はようやく目を開けた。

だが正面を向く勇氣はない。ファントム・クラウン幻影の道化の顔を見る余裕もない。顔を逸らしたままの暁奈に、青年は淡々と続ける。

「非日常とはこういう物なんだよ。それまで当たり前のように続いていた日常が、ある日突然狂わされる。人の『死』という物は、その最たる物だろう。それが別の者によって齎された『死』なら尚更ね」

「でも私は」

「こんな事を望んでいた訳じゃないって？ それはそうだろう。あの人間の『死』が、キミの責任という訳じゃない。責任と言うなら助けに入ろうとしたキミを止めたボクにある。だけどせめて、現実を受け入れる事ぐらいしたらどうだい？ キミは自分から望んで、非日常に足を踏み入れたんだから」

「……」

暁奈は黙ったまま顔を上げた。眼の前には、血に染まる光景と、異形の化物が佇んでいる。

「私は」

「グアアアッ」

何かを言おうとした暁奈の声は、化物の雄叫びによって掻き消された。すでに化物は、暁奈の存在に気付いている。

「ボクは逃げた方がいいと思うよ。キミは人間、あっちは化物だ。敵うはずがない」

「それでもいい。今の私は、逃げちゃいけない所にいる」

そう言って暁奈は、目の前の化物『災魔』を強く見据えた。眼を背ける訳にはいかなかった。

夕日が沈み、辺りはすっかり暗闇に包まれている。その闇を照らす街頭の明かりの下、巧は風のように疾走していた。

「ちよつと出掛けてくる」

キッチンで洗い物をしている和菜恵にそう告げたのは、ほんの十分程前の事だ。

「え、今から？ 何しに行くの？」

当然のように和菜恵は振り向いて尋ねてくる。巧は快活な笑顔を見せてそれに答えた。

「和真からの呼び出しだよ。帰りは何時になるかわからないから、戸締りして先に寝てていいぞ。じゃあな」

「ちよ、ちよつとお兄ちゃん？」

呼び止めようとする和菜恵を振り切って、巧は家を飛び出した。

我ながらこの急いでいる状況で、よくあんな作り笑顔を引つ張り出せたものだと思う。その辺り、ファントム・クラウン幻影の道化から影響を受け始めているのかも知れない。……あまりいい影響とは言えないが。

「可愛い妹さんだね」

ファントム・クラウン横合いから聴こえた幻影の道化の言葉を巧は無視する。

ファントム・クラウン今見えている幻影の道化は、『思念』という言葉通り、身体が少し宙に浮いた状態で、疾走する巧の横を付いて来ている。巧自身、霊の類は見た事がないが、浮遊霊とは多分こんな感じなのだろうなと思う。

「それよりも、『鏡界』に落ちた人間がいるって、何でもつと早く教えなかったんだ」

巧は今になって思う。和菜恵が自分の事を部屋まで呼びに来た時、彼が言った「お客さん」とは和菜恵の事ではなく、『鏡界』に落ちた人間の事だったのか、と。

ファントム・クラウン幻影の道化によれば、『本体』は『鏡界』から出る事ができない。ならばその『本体』が、『鏡界』内で新たな人間に遭遇したという事なのだろう。だからあの時突然、『思念』は姿を消したのだ。恐らく、その人間に意識を集中させるために。

「あの時はキミの方も、妹さんの登場で慌ててたみたいだったからねえ。話を続けない方がいいかと思っただよ」

肩をすくめる青年の表情には、反省の色が見られない。

この男は本当に何を考えているのだろうか？

何回目になるかわからないそんな疑問を、巧は頭を振って消し去る。

「それに、心配しなくても彼女は無事さ。まだ怪我一つしてないから」

「彼女？ 今度は女の人なのか。……って言うかちよつと待て。『まだ』って事は、これからするかもしれない状況にいるって事か？」
「さすが。理解が早いね」

「感心してる場合か！」

呆れたように言うと、巧はさらに走る速度を速めた。

今巧が向かっている場所は、自分が『鏡界』の入口に遭遇した横断歩道のある場所ではない。そこは全く別の場所に、新たな『鏡界』の入口が出現しているのだ。

ファントム・クラウン
家を出る前、幻影の道化が告げた『鏡界』の性質。

それによると、一度『鏡界』を抜け出してその空間に人間が一人もいなくなると、自動的にその空間は消滅してしまう。そしてまた、現実世界の新たな場所に、『鏡界』の入口が姿を現すそうだ。新たに落ちた女性は、その入口から『鏡界』に入ったらしい。

新たに生まれた『鏡界』の入口は、巧が通っている学校から程近い場所にある商店街を抜けて、住宅密集地へと繋がる道のどこかにあるらしい。幸運にも、巧はその辺りの地理にも詳しくかった。

速度を速め、走る事さらに十分。程なくして道の真ん中に浮かぶ、巨大な穴を見つける事ができた。その場所は街頭に照らされていないにも関わらず、巧にはその穴の存在をハッキリと視認する事ができた。

「ここだな」

巧は乱れた息を整えながら穴の方を見た。穴の存在自体を視認する事はできても、相変わらず穴の内部まで見通す事はできない。

「じゃあ、ボクは先に行ってるよ。早く彼女を見つけてあげてね」

「お、おい！ ここからは道案内無しなのか？」

ファントム・クラウン
幻影の道化は言葉を聞かずに煙のように消え去った。

「くそっ！」

吐き捨てるように叫ぶと、巧は穴の方へと足早に踏み出す。

その直後、巧の視界は暗転した。

暁奈の目の前にいる『災魔』は、まるで巨大な食虫植物のようだがこの場合、食虫ではなく食人の方が正しい。

全身に黒い斑模様があり、二足歩行だが、足は木の根のように、不規則な方向に生えてその巨体を支えている。腕と呼べる部分には、巨大な蔦が二本ずつあり、顔と呼べる部分には、朱色と黄色のグラデーションをした、毒々しい巨大な花があり、花の中心にある空洞の周りには、大小様々な形の牙がびっしりと並んでいる。

「グオオオオツ」

牙がびっしりと並んだ空洞から、『災魔』の雄叫びが響く。眼と呼べる部分は見当たらないが、確実に暁奈を標的に定め、徐々にこちらに詰め寄ってくる。

「逃げられないし、逃げたくない。だから、戦う！」

そう叫んだ瞬間、暁奈の周囲に光が満ち溢れた。その光は暁奈の胸元に集束し、徐々に形を成していく。

「これは……？」

「やっぱりね。なぜかそんな気がしたよ」

驚く暁奈の少し後ろで、ファントム・クラウン幻影の道化がそんな事を言った。自分自身に起きている現象から目が離せない暁奈は、振り返らないままその声に耳を傾ける。

「それは『災魔』を倒すための力、『心羅』だよ。心の力を具現化した、キミの特別な力だ」

「『心羅』？」

ファントム・クラウン幻影の道化が語り終わると同時に、光の集束が治まった。

そこに形を成したのは、銀色の弓だった。半月を描くその弓には弦が存在しない。持ち手部分のみが存在し、その持ち手のやや上部に、牡丹色の玉が埋め込まれている。

暁奈は意を決してその弓を左手で掴んだ。その左手に右手を添え、弓を引く動作に持っていく。

すると不思議な事に、存在していなかった弦と矢が、牡丹色の淡い光を放って出現した。

そしてそのまま、暁奈は牡丹色に輝く矢を放つ。

「はっ！」

放たれた光の矢は、真っ直ぐ『災魔』へと向かって行く。

『災魔』はその矢を叩き落そうと、右手の巨大な鳶を振り上げ、一気に振り下ろした。

巨大な鳶が放たれた光の矢に触れた瞬間、その矢が牡丹色の爆発を起こした。

「ギャアアッ！」

爆発を受けた『災魔』の巨大な鳶は、中間辺りから先が破裂したように吹き飛んでいた。その部分には黒く焦げ付いた跡があった。

暁奈は第二射を構え、そして躊躇う事なく放つ。

光の矢が、今度は『災魔』の右足の部分に命中する。その瞬間光の矢は炸裂し、爆発を起こす。片方の足が吹き飛んだ事で支えを失った『災魔』の身体は、轟音を響かせてコンクリートの地面に倒れ込んだ。

それを皮切りに、暁奈は続け様に三発の光の矢を『災魔』身体に叩き込んだ。身体のおちこちに光の矢の爆撃を受け、『災魔』の身体は消滅の危機に瀕している。

「グ、アアアッ」

それでも尚、身体を引きずり起こそうとした『災魔』の顔部分の中心、牙が並んだ空洞の中目掛けて、暁奈は止めとばかりに光の矢を射ち込んだ。

空洞の内部で牙にでも触れたのだろう。身体の内側で起きた爆発の衝撃で、『災魔』の身体は文字通り破裂した。飛び散った『災魔』の破片が、少しずつ灰になっていく。

それを終わりと感じ、暁奈は構えを解いた。

少し緊張していたのか、額の辺りが汗で湿っている。それを右手で軽く拭って、暁奈は幻影の道化に視線を向けた。

「おめでとう。これでキミも特別な力を持った人間の一人になった訳だ。これで思う存分、非日常の世界を楽しむ事ができるんじゃないかい？」

「キミも……？」

ただその一点が気になった。その言い方だとまるで、自分の他にも力を持った人間がいるみたいに聴こえる。

暁奈の表情でそれを察したのだろう。幻影の道化がニコニコとした顔で言ってくる。ファントム・クラウン

「気付いたみたいだね。その通り。『心羅』の力に目覚めているのは、キミだけじゃない。もう一人いるんだよ」

その言葉を証明するかのように、暁奈の耳に何者かの走る足音が聴こえてきた。それは『災魔』の物とは違う、人間らしい足音だった。

暁奈はゆつくりと、足音が近づいてくる方向に視線を向ける。

そして驚いた。その人物は、自分と同じ年代ぐらいに見える少年だった。向こうも酷く、驚いたような表情をしている。

「あなた、誰……？」

暁奈がそう問い掛けた人物は紛れもなく、神藤巧その人だった。

Act・4 消失

「あなた、誰……？」

そう問い掛けてくる人物の顔に、巧は心当たりがあった。

「水嶋、暁奈？」

彼女は自分と同じ学校に通っている、学年の中では結構な有名人だった。

成績優秀で運動神経も抜群、おまけに可愛いし人当たりもいい、という評判を和真が聞きつけ、顔を見に行こうと無理矢理連れて行かれた事があった。

もちろん声を掛けるなんて事はせず、遠巻きに顔を確かめた程度だった。だから向こうがこっちの事を知らなくても無理はない。

「私の事知ってるの？」

然して驚いた様子もなく、暁奈は自分に尋ねてくる。

学校の有名人と、こんな所で出くわすなんて予想もしていない。

そんな風に思いながら、巧は躊躇いがちに言葉を返す。

「いやその、あんたと同じ学校に通ってるからさ」

「え、そうなの？」

「ああ、俺はあんたの顔見た事あるんだ。あんた結構有名人だから」

そう言って何気なく視線を下ろした巧は、彼女の左手に握られている物を見て眼を瞠った。

彼女の左手に握られているのは、銀色の弓だった。

だがそこが一番肝心なのではない。問題なのは、弓に埋め込まれている宝石のような玉。牡丹色のそれと似た玉に、巧は見覚えがあった。

自分が発現した『心羅』の力。その長剣に埋め込まれていた玉も、色は違うがこんな形をしていた。

まさか、と巧は思う。

「あんた……、それ」

「え？」

巧が右手で指を差すと、暁奈は不思議な顔でその指の示す先の物体に目を向けた。そして気まずい様子も見せず、軽い調子で言う。

「ああ、これ？ これはね、『心羅』^{ファンタム・クラウン}っていう力なんだって。幻影^{ファンタム}の道化さんがそう教えてくれたわ」

「！」

やっぱりそうかと、巧は内心で驚きながらも納得する。

まさか彼女まで『心羅』に目覚めるとは……。

そう考えていると、彼女の背後からもう聞き慣れた声が聴こえてきた。

「遅かったね。ついさっきまで、彼女が『災魔』と戦ってたんだよ」
軽い調子の声に目を向けると、幻影^{ファンタム・クラウン}の道化がニコニコとした顔で

こちらを見ていた。なんだかうんざりした気分で巧は問い掛ける。

「どという事なんだよ？ 水嶋まで力に目覚めるなんて」

「だからそれはボクに聞かれてもわからないよ。彼女にもそういう素養があつたって事なんじゃないのかな？」

そう言つてわざとらしく首を傾げる仕草に、巧はやれやれと溜め息をついた。

すると、そのやり取りを見ていた暁奈が、眼を丸くして尋ねてくる。

「あれ……？ 二人は知り合いなの？」

巧と幻影^{ファンタム・クラウン}の道化。二人の間に立っている彼女の言葉は、どちらに對する質問なのかわからない。が、とりあえず先に巧が答える。

「まあ、な。俺も今日知り合つたばかりだけど」

そう答えていてふと思ひ出した。そういえば、自分はまだ自己紹介をしていない。

「悪い、自己紹介がまだだったな。俺は神藤巧。あんたと同じ高校一年だ。よろしくな」

「ええ、よろしく。私の名前は……、つてそつか。もう知ってるんだよね」

自然な感じで微笑む彼女は、前評判通り、人当たりのいい性格のようだ。

それがわかった事で巧は少し安堵していた。『心羅』に目覚め、『災魔』と戦った彼女が混乱を来していないだろうか、と危惧していたのだが、どうやら無用の心配だったらしい。

挨拶も済んだ所で、巧は気を引き締め直した。目的の人物も見つかったのだから、ここに長居する必要もない。この世界の事を調べるのは、一度現実世界に戻ってからでもいいだろう。

「さてと。じゃあ早くこの空間から出よう」

「えっ？ どうして？」

暁奈はキョトンとした顔で、巧の提案に疑問の声を上げた。

「いや、どうしてって……」

彼女の奇妙な発言に、巧は違和感を覚えた。さっきまで彼女は混乱していないと安堵していたのだが、それが覆されたような気がした。

「こいつから聞いてないのか？ 『災魔』たちはこの『鏡界』に落ちた人間を喰らおうと襲ってくるんだ。そんな危険な場所に、いつまでもいられないだろ？」

「大丈夫よ。だって私には『心羅』の力があるんだから、襲われてもまた退治できるわ」

「それはそうだけど……、現実の世界に帰りたくないのかよ？」

「無駄だよ、神藤巧くん」

暁奈との会話の間に、いきなり幻影の道化が割って入ってきた。今度はなんだよと言いたげな顔で、巧は乱入者の方を見た。

「その子、水嶋暁奈さんはね、キミと違って非日常の世界に憧れてるんだよ」

「！？」

巧は自分の耳を疑った。目の前にいる少女が、非日常に憧れてる

だって？ それはつまり、この『鏡界』という世界に來たがつていたという事か？

口を少し開けたまま言葉を紡がないでいる巧に、ファントム・クラウン幻影の道化は続ける。

「正直、彼女をここから連れ出すのはかなり難しいと思うよ。彼女は『心羅』を持ってるからね。他の人間より死ぬ確率が低い事は確かだ。彼女に自分から出ようという意思がない以上、キミにできる事はないんじゃないかな？」

「なっ……。だからって、このまま放つとけつて言うのか？」

「そうは言つてないよ。ただ、難しいんじゃないかって言ってるだけさ」

そう言つてニコニコしながら、わざとらしく肩をすくめる。その態度が気に喰わなかった巧が、ファントム・クラウン幻影の道化に詰め寄ろうとした時だった。

「ちょっと待つて」

不意に厳しい表情の暁奈が、そう言つて二人の会話を遮った。

その視線は二人ではなく、巧が走つてきた方向に向けられている。

「何か来る……」

厳しい表情のまま暁奈は牡丹色の弦を引き、いつでも矢を放てる状態で静止する。その動作に促され、ファントム・クラウン巧と幻影の道化も暁奈と同じ方を向いた。

「……？ 何だ、あれ？」

巧の目に留まったのは、遙か後方から歩いてくる人影のような物だった。

しかもよく見ると人影は大勢いる。ざっと見ただけでも二十人。それが軍隊のパレードのように横一列に並んで歩いて来ている。

「人……、じゃない。鎧……？」

近付いてくる人影は、全員が西洋の鎧を全身に隙間なく纏い、両刃の煌めく刃渡り一メートル程の剣と、直径七十センチ程の円形の

楯を持っていた。ファンタジーに出てきそう西洋の鎧の騎士の集団。その騎士たちは、剣と楯、鎧に至るまで全てを赤褐色に染め上げられている。

鎧特有の重苦しい音が幾重にも重なり、距離が縮むに連れて大きくなっていく。

「……どう考えても『災魔』だよな。今まで見た奴に比べたら、人間らしい形だけど」

向かってくる鎧の騎士の集団は、動きが規則正し過ぎて気持ち悪い。機械的に寸分違わないその動きは、人間味を全く感じさせない。しかもこの『鏡界』には、人間が存在しないという大前提がある。その点から見ても、目の前の集団が人間でない事は明らかだ。

巧は緊張した面持ちで身構える。暁奈の方も、厳しい表情のまま構えを崩さない。

ファントム・クラウン

だが幻影の道化だけは違った。構える訳でも、逃げる素振りを見せる訳でもなく、ただそこに呆然と立ち尽くしている。

「？ おい、どうしたんだよ。前みたいに逃げないのか？」

呆然としている青年に巧は嫌味っぽく笑って声を掛けた。

ファントム・クラウン

だが返事がない。あの集団が現れてから、幻影の道化は一言も発していない。

さすがに様子がおかしいと思い、巧は真顔に戻って強く呼び掛ける。

ファントム・クラウン

「おい、幻影の道化！ 返事しろ！ 聞してるのか？」

「神藤くん。あいつらが！」

「！」

暁奈の呼び掛けで巧は前方に視線を向けた。

見ると鎧の騎士の集団は、巧たちと三メートル程の距離を開けて静止している。あれだけ重苦しい音を出していた集団は、今は不気味な程静まり返っている。

巧は即座に『心羅』を発現させ、長剣を強く握り締めて構えた。すると横合いから驚きの声が掛かる。

「！　あなたも『心羅』を使えるのね」

「そういえば言ってなかったな。でも今は、そんな事気にしてる場合じゃないぜ？」

巧は視線を交わさず言葉だけを掛ける。今別の事に意識を向ければ、それだけで隙を作ってしまう。相手は大人数。気の緩みは無くすべきだ。

「　来タ」

「？」

不意にどこから声が聴こえた。暁奈や幻影の道化、まして巧の声でもない。少しくぐもった機械的な声。

まさかと、巧は目の前の鎧の騎士を改めて見る。声は間違いなく、そこから聴こえていた。

「『心羅』ヲ持ツ者ガ来タ」

「『心羅』ヲ持ツ者ガ現レタ」

「モウ充分ダ」

「オマエノ役目ハ終ワツタ」

「捕エヨ」

「捕エヨ」

鎧の騎士一体一体が数珠のように言葉を紡ぐ。まるで催眠術に掛けようとしてもしているように繰り返し聴こえてくる声は、聴いていて気持ちの悪い物ではない。まして相手の声が機械的なら尚更だ。

「何なんだお前ら？　『災魔』なのか？」

確か『災魔』には言語機能が備わっていないのではなかったか？　だが目の前の鎧の騎士たちは、機械的な声とはいえ当然のように言葉を話している。

すると巧の言葉が通じたのか、鎧の騎士たちの言葉の内容が変化する。

「人間。今、才前タチ二用八無イ」

「ココカラ去レ」

「去レ」

「我ラハ、幻影の道化ヲ捕縛スルノミ」
ファントム・クラウン

「才前タチ二用八無イ」

「!？」

巧は自分の耳を疑った。ファントム・クラウン 幻影の道化を捕縛するだと？

なぜ『災魔』たちがこいつを捕縛しようとするのか？ 彼はこの世界の住人のはずだ。『鏡界』に落ちてきた人間とは違う。それを狙う理由がどこにあると言うのか。

「どういう事だ！ 何でお前たちがこいつを狙う？」

「去レ、人間」

「才前タチ二用八無イ」

「去レ」

鎧の騎士たちは巧の質問に答えようとしない。一辺倒な言葉を投げ掛けてくるだけだ。

ファントム・クラウン 苛立ち紛れに巧は幻影の道化の方を見つめる。すると今まで放心状態だった青年が口を開いた。

「そうか。そういう事か」

一度俯いた後自嘲気味に笑って、ファントム・クラウン 幻影の道化は顔を上げた。

「仕方ない、キミたちに付いて行こう」

「!？ 何言つてんだ、あんた？」

驚きと少々の呆れを混ぜた表情を見せる巧。隣では、暁奈も意外そうな顔付きをしている。

「だって彼らの目的はボクなんだ。ならボクが付いていけば、それで全てが解決する」

「そうじゃなくて、説明してくれよ！ あいつらは何なんだ？ なんだあんたを狙ってる？」

ファントム・クラウン 納得がいかないと巧は、幻影の道化に詰め寄る。だが青年は意に介した様子もなく、巧の横を素通りして、鎧の騎士の集団に近付いていく。

「さあ行こう。キミたちは早く現実世界に帰るといい。……ああ、でも水嶋暁奈さんは帰りたくないんだっけ？ うーん、どうした物

かな」

「だから説明を」

「神藤くん！」

「！」

ファントム・クラウン

幻影の道化に近付こうとした巧に向けて、一体の鎧の騎士が一瞬で距離を詰めて斬撃を放った。

暁奈の叫び声で巧はとつさに反応し、赤褐色に染まった剣を何とか受け止めた。互いの剣に込められた力が拮抗し合い、軋んだ音を響かせる。

鏑迫り合いの状態で、鎧の騎士はくぐもった声で再び告げる。

「才前たち二用八無イ、去レ」

「それはこつちの台詞だ！ 退けよ！」

ファントム・クラウン

「我ラハ幻影の道化二ノミ用ガアル。邪魔ヲスルナ」

「邪魔なのはお前らだろ！ そいつをどうするつもりだ？」

「才前二答エル必要八無イ。去レ。去ラナケレバ、斬ル」

「上等だ……！ やつてみる！」

互いに剣を弾いて距離を取ると、巧は剣を構え直す。

相対する鎧の騎士が同じように剣を構え直すと、横合いから別の二体が現れた。三体は横並びになると、一斉に巧に襲い掛かった。

「やめろ！ 戦う必要なんてない！」

ファントム・クラウン

幻影の道化の叫ぶ声が聴こえたが、巧は無視して三体の鎧の騎士に向かって突進する。

するとその直後、風切り音が聴こえたかと思うと、左側にいた鎧の騎士の身体が、牡丹色の爆発を起こした。

チラリと後方を見ると、暁奈が二射目を放とうとしている。

巧は視線を戻すと真っ正面にいる鎧の騎士に斬り掛かった。再び鏑迫り合いの格好となった時、今度は右側で鎧の騎士の身体が爆発した。暁奈の光の矢が命中したのだ。

「オノレ！」

その爆発に鎧の騎士が気を取られた瞬間を、巧は見逃さなかった。

鏑迫り合いの状態から体重を掛けて押し返し、鎧の騎士のバランスが崩れた所に、真上から真っ直ぐに剣線を浴びせた。

巧の剣は剣線を止まらせる事なく、鎧の騎士の身体を頭から股の間まで一直線に分断した。二つに分かれて倒れた鎧は、瞬く間に灰となって消え失せていく。

「調子二乗ルナヨ、人間ドモ」

剣を構え直す巧の前には、さらに五体の鎧の騎士が立ち塞がっていた。

巧の後方では、暁奈がそれに狙いを定めて、弓を引いた状態を維持している。

五体の鎧の騎士が一斉に巧に斬り掛かろうとした、その時だった。
オーバー・ナイト
「赤褐色の騎士！」

「！」

ファントム・クラウン

幻影の道化が鎧の騎士の名前らしき物を叫ぶと、鎧の騎士たちは瞬時に動きを止めた。そのまま反抗する素振りも見せず、鎧の騎士たちは斬り掛かろうとする構えを解いた。

「キミたちの目的はボクの捕縛のはずだ！ 自分たちの盟約に反するつもりか？」

「」

鎧の騎士たちは無言のまま微動だにしない。

巧は怪訝に思いながらも構えを解かない。鎧の騎士たちが動き出せば、即座に反応できるようにする。暁奈も同様に、弓を引いた状態のまま状況が動くのを待つ。

するとまた、鎧の騎士たちのくぐもった声が聴こえてきた。

「盟約」

「盟約八守ラネバナラナイ」

「我ラハ駒」

「反スル事ハ許サレナイ」

巧の目の前にいた五体の鎧の騎士は、踵を返して幻影の道化の傍に帰っていく。それを見て、巧と暁奈は同時に構えを解いた。
ファントム・クラウン

「ファントム・クラウン
幻影の道化。どうするつもりだ？」

巧の問い掛けに、青年は無表情で答える。

「悪いけどキミたちに構ってる暇がなくなった。……と言うか、もうボクの役目は終わりみたいだ」

「！？ どういう意味だよ？ また何も教えずに行く気か？」

「巧、暁奈。ごめんよ……」

「！」

青年が二人の名前を呼んだ瞬間、辺り一面が激しい閃光に包まれて真っ白になった。

その光の中で巧は確かに見た。

ファントム・クラウン

幻影の道化が悲しげに微笑んでいるのを。

それはあまりにも突然の終結だった。

ふと気が付くと、目の前に広がっているのは見覚えのある広いグラウンドだった。地面には白い白線が規則的に引かれている。それがトラック競技に使うレーンだと、巧には理解できた。

辺りは薄暗闇だが、少し離れた位置に見慣れた校舎が立っているのがわかる。どうやらここは自分が通っている学校の敷地内らしい。……現実の世界？ 出口も通ってないのにどうして？」

疑問に思っていると、薄暗闇の中、横合いから聞き覚えのある声が聴こえた。

「そこにいるの、神藤くん？」

「！ 水嶋か。 怪我は無いか？」

薄暗闇の中では本人でないとその辺りが確認できない。巧が尋ね

ると布の擦れる音が微かに聴こえた。どうやら暁奈は自分の身体をあちこち確かめているようだ。

ほんの数秒後、再び声が返ってきた。

「うん、問題ないみたい。それよりも神藤くん。ここって」

「ああ、どうも現実の世界みたいだ。……でもおかしいんだよ。幻影ファントム・クラウンの道化の話だと、『鏡界』からは毎回決まった出口からじゃないと外に出られないはずなんだ。それなのに今回は無理矢理、有無を言わずだ。……一体どうなってるんだ？」

突然この世界に戻ってきた事もそうだが、幻影ファントム・クラウンの道化の事も気になる。

彼は、自分の役目が終わった、と言っていた。

そして巧が最後に見た、あの悲しげに微笑む姿。

あれは幻などではない。

ファントム・クラウン

恐らく幻影の道化の身に、決定的な何かが起こったのだ。それも悲劇的な何かが。そう考えるのが妥当だろう。でなければあの男が、あんな表情を見せる訳がない。

ファントム・クラウン

「何があっただろうね、幻影の道化さん。私たちに謝ってたよね？」

「ああ……」

何かが起こった事は事実だが、それを確かめる方法が今の巧たちには無い。とりあえず今はと、巧は頭を切り替える事にした。

「とにかく、現実の世界に帰ってきたんだ。今は家に帰ろう」

そう言っただけは腕時計のライトを付け、時間を確かめた。もうすでに日付が変わる時刻だ。

やばいかもなと、怒った顔で玄関に仁王立ちしている和菜恵の姿を想像しながら、巧は暁奈の方を見る。

「とりあえず、明日学校で話そう。あんた、家は近いのか？ なんか送っていくけど」

と言うか、もう深夜になろうとしているのだ。こんな時間に女の子を一人にするのは危な過ぎる。送るよ、と言いかけた巧の声を遮

るように、暁奈は軽い調子で告げる。

「大丈夫、家近いから。神藤くんも遅くなったらダメでしょ？」

「いや、まあそれはそうだけど……」

「平気だってば。じゃあまた明日、学校でね」

暁奈は巧の返答を待たずに、踵を返して走り去ってしまった。彼女の足音はすぐに聴こえなくなった。

薄暗いグラウンドに一人残された巧は、ぼんやりと考え込む。

彼女は非日常の世界に憧れていると、幻影の道化は言っていた。ファントム・クラウン

ならば今、無理矢理現実の世界に戻された暁奈の胸中は、一体どういう状態なのだろう。

暁奈の姿は薄暗闇に阻まれて、すでに見えなかった。

幕間 H i s f a t e i s . . .

彼は自分の運命を、その結末を、期せずして悟ってしまった。

自分は所詮、駒にしか過ぎなかったのだと。役目を終えれば使い捨てられるだけだったのだと。

誰のせいでもない。これは当然の帰結。

あの日から……、『鏡界』という牢獄に閉じ込められたあの日から……、こうなる事は決まっていたのだ、と。

ファントム・クラウン
幻影の道化。その名の通り、虚構の存在。

牢獄の中でただおどけていただけの、哀れな存在。

彼にはもう、役目は無い。

Act・5 襲撃

窓の外から微かに鳥の鳴き声が聴こえる。どうやら朝になったようだ。

浅い眠りから目を覚まし、暁奈は憂鬱な気分のまま身体を起こした。

軽く目を擦りながらベッドから出ると、そのまま窓辺まで歩いていく。閉まっていたクリーム色のカーテンを左右に開くと、途端に眩しい朝日が部屋の中に差し込む。

暁奈は陽光に眼を細めながら、昨晚の事を思い出していた。

巧と別れて深夜の学校から抜け出た暁奈は、すぐには家に戻らなかった。

暁奈の両親は、暁奈の私生活に対してあまり干渉してこない。無関心という訳ではないが、必要以上に踏み入ろうとはしなかった。だから遅くなっても適当に言い訳を並べれば、ある程度は誤魔化しきれぬ。

暁奈はもう一度、自分が『鏡界』に遭遇した場所へ向かってみる事にした。もう一度あの場所に行けば、まだあの世界への入口が残っているかもしれない、と思ったのだ。

淡い期待を抱きながら、暁奈は走り続けた。シャッターの下りた夜の商店街を駆け抜け、住宅密集地へと繋がる道に入り、漸く目的の場所へと辿り着いた。

だがそこに、暁奈が求めているた非日常は無かった。もしかしたら位置がずれているのかもしれないと、時間を掛けて辺りを探し回ってみたが、結局それは徒労に終わった。

暁奈が家に帰った時には、巧と別れてから二時間近くも経過していた。起きていた母親の方に少し怒られ、夜食と言う名の夕飯を少しだけ食べ、シャワーを済ませてベッドに潜り込む頃には、時計の針はすでに夜中の三時を回っていた。

ぐっすり、と言うほど眠れている訳もなく、暁奈はノロノロと制服に着替え始めた。

あれから幻影の道化はファンタム・クラウンどうなったのだろうか？

自分が求めていた非日常の世界は、こんなにも早く、こんなにもあっさりと消え去ってしまったのか？ そう考えると、暁奈は憂鬱な気分を払う事など出来なかった。

あの世界で『心羅』の力に目覚め、『災魔』たちと戦っていた時、暁奈の心はこれ以上ないくらい歓喜に打ち震えていた。

別に戦闘その物が楽しいという戦闘狂のような気分になった訳ではない。ただ、自分が今不思議な力を使って不気味な化物を退治している、という実体験が、心地よい刺激となって暁奈の心を満たしていた。

あの瞬間に早く戻りたい、と暁奈は思う。

そのためには何が何でも『鏡界』の入口を探し出さなければならぬ。そしてそのためにあの少年、神藤巧と話をするのだ。

そつえばあの少年は、自分が非日常に憧れていると知った時、まるで信じられない物でも見たかのように驚いた顔をしていた。

彼は自分とは違うのだろうか、と暁奈は思う。

非日常の存在を知っていながら、それに全く興味を示していないのだろうか、と。

今日彼と話せば、それがわかるかも知れない。

ぼんやりとそんな事を考えながら着替えを済ませた頃に、階下から母親が自分を呼ぶ声が聴こえた。

暁奈は無言のまま、鞆を持って部屋を後にした。

巧は暁奈とは違う意味で、憂鬱な気分登校していた。
昨日の晩、どこにも寄らずに家に帰りはしたが、それでもやはり
予想した通りの事が起きた。

巧が家の前に着き、玄関のドアノブに手を掛けるとカギが掛かっ
ていなかった。嫌な予感がして恐る恐るドアを開けると、そこには
パジャマ姿の和菜恵が仁王立ちして立っていた。

自分の予想的中率に自分自身で舌を巻いたが、出来れば当たって
ほしくない予想だった。

「こんな時間まで何してたの？」

可愛らしいがかなり怒っている様子の妹。まるで、旦那さんの帰
りを待っていた奥さんみたいな第一声だった。

一体いつからそこにいたんだと巧は突っ込みたかったが、どうや
ら冗談が通じる状況でもないらしい。

結局巧は謝る暇もなく、リビングに引きずられるようにして連れ
て行かれ、深夜だというのに延々一時間も説教を喰らった。

「……妹に説教されるっていうのも、おかしい話だよな」

兄としての威厳の無さに、自分自身で肩を落とす。

と、その巧の視界に、例の横断歩道が見えてきた。

自分が最初に『境界』に出くわした場所。それを渡るため、巧は
赤信号で立ち止まる。

ふと、歩道にあるガードレールの根元の部分を見ると、いくつかの小さな花束が添えられていた。巧は複雑な気持ちでそれを見つめる。

あのサラリーマン風の男性は、正確にはここで死んだ訳ではない。

『鏡界』で死んだ人間は、死の事実を書き換えられて、現実世界に吐き出される。

その法則に従い、彼の『鏡界』での死が、現実世界での死に書き換えられたのだ。

だがここに花束を添えた人たちは、そんな事が起きているなんて知りもしない。ただの不運な交通事故だと思っている。そう考えると、巧は居た堪れない気持ちになった。

自分は事の真相を知っている。

だがそれを伝える術がどこにあると言うのか。

言っても信じてもらえないだろうし、そんな事をすれば遺族の悲しみを煽るだけだ。

何もできない。それが全てだった。

くそつ、と巧は内心で呟く。

なぜあんな世界が存在するのか？ それを確かめようと決意した

矢先に、幻影の道化は謎の言葉を残して『鏡界』と共に消え去った。

一体彼はどうなったのか？

幻影の道化を捕縛しに来たという、あの鎧の騎士たちは何者なの

か？

何もかも、わからない事だらけだった。そしてそれを確かめる方法が、今の巧には無い。

憂鬱な気分は晴れそうにない。

目の前の信号は赤い色のままだった。

昼休み。

自分の教室で昼食を取り終えた巧は、偶然廊下を歩いていた暁奈を見つけ、一緒に屋上へと向かった。

巧たちが通っている私立朝倉高等学校は、四階建ての割と新しい校舎だ。教室棟と実習棟がコの字型で分かれている校舎の屋上は、昼休みと放課後の一時間だけ全面開放となっている。利用する生徒は日によってまちまちだが、教室で話すよりはと暁奈が屋上を選んだ。

事故防止のために設置されている金網のフェンスを横目に、巧と暁奈は屋上の隅を目指す。

「こうやってちゃんと話すのは、昨日の夜以来だな」

「そうだね」

巧と暁奈は屋上の隅に設置されている、二、三人用の長いベンチに腰を下ろした。

そして巧は、自分が今までに得た色々な情報を暁奈に話して聞かせた。『鏡界』の法則、幻影の道化の正体など、説明するのにだいぶ時間が掛かった。

「とまあこんな感じなんだけど、わかったか？」

「うん、問題ないよ。それでさ、これからの事なんだけど」

「あ、ああ」

なんだか暁奈の様子がおかしい、と巧は思った。何かに駆り立てられて焦っている、そんな風に見える。

怪訝な顔をしている巧の様子など意に介さず、暁奈は話を進める。

「私たちどうすればいいのかな？ さっきの話だと、幻影の道化さんファンタム・クラウンはこつちの世界には出て来られないから、『思念』を飛ばして来るんでしょ？ それまで待つって事？」

腕を組んで巧は「そうだな……」と考え込む。頭の中で情報と状況を整理し、ゆっくりと切り出す。

「幻影の道化の言う通りなら、昨日俺たちが入った『鏡界』の入口は消えてるって事になる。入口が無い以上、あいつの方から何か連絡が来ない限り、やっぱり俺たちは待つしかないと思う」

「そっか……」

「それに昨日の別れ方から考えたら、もしかするともう、『鏡界』その物が消滅してる可能性も」

「そんなの困るよ！」

「！」

「あ」

突然怒鳴って立ち上がったその後で、暁奈は自分がまずい事を言っただけというのを自覚したのだろう。尻すばみに勢いをなくすと巧から顔を逸らし、無言でまたベンチに腰を下ろした。

巧もどうしていいかわからず、何となく黙ってしまう。

沈黙が支配する中、巧はふと考える。ここまで彼女が非日常に拘る理由は何なのか、と。

全く理解できないとは言わない。巧だって非日常の世界に憧れる気持ちが無いと言えは嘘になる。ただそれ以上に、巧にとっては日常の方が大切なのだ。

だから不思議に思う。彼女の非日常に対する、執着心を。

「なあ、何であんたは、そんなに非日常の世界に憧れてるんだ？」
気付けば巧はそんな風に質問していた。

暁奈は相変わらず顔を逸らしたままだが、それでも巧の質問に答え始める。

「別に、深い理由なんてないよ。ただ退屈だったの。自分が毎日、同じ事繰り返ししてるだけのようない感じがして。だから刺激がほしかった」

た。何かが変わってほしかった。……それだけだよ」

そう語る暁奈の声は、少しだけ元気がないように聴こえた。そんな暁奈に巧が声を掛ける前に、暁奈は立ち上がって軽く伸びをした。
「異常なんだってさ、私」

「え……？」

巧に背を向けたまま、突然そんな事を言う暁奈。巧が怪訝な顔をしていると、暁奈が巧の方に振り返った。その顔には、少し陰りが見える。

ファントム・クラウン

「幻影の道化さんにね、そう言われちゃった。人が死ぬ事も非日常の内だ。だけどキミは非日常を求めてるくせに、人の死を求めようとはしない。そんな都合が良過ぎる、って。日常にしても非日常にしても、結局私は現実から目を背けてるだけなのかな？」

そう言って暁奈は眼を伏せる。

全くあの男は……、と巧は内心で溜め息をつく。

ファントム・クラウン

幻影の道化は事実しか言わない。それは巧も身をもって体験している。

あの男の言葉は正しいのかもしれないが、それが他人の気持ちを考えた上での発言ではない事は明らかだ。

「それに私、『災魔』に襲われてる人を助けられなくて……、死なせちゃったんだ」

「え……！？」

自分の知らない事実が出てきた事で、巧は言葉を失った。どういう経緯かはわからないが、暁奈も自分と同じように人の『死』を体験している。

陰ったままの暁奈の表情を見て、巧は何とも言えない気分になった。

暁奈は眼を伏せると、苦々しげに口を開いた。

「私が中途半端に非日常を望んだりしたから、あの人は死んじやつたのかな……」

自分を責めるような暁奈の言葉に、何を言うべきか迷っていた巧

は顔を上げた。

「そんな事無いだろ」

「……神藤くん？」

「確かにあんたは非日常に憧れてるみたいだけど、そんな事誰だって少しくらい考えるさ。それと人の死を直結させるなんて事の方が間違ってる」

巧は真っ直ぐに、暁奈の眼を見てそう言った。同情している訳ではない。自分の考えを述べているだけだ。

それに、と言って巧は続ける。

「俺もあんたと同じだよ。……助けられなかった人がいる」

「え？」

巧の告白を聞いて、暁奈は驚いた表情を見せた。

「俺はその人のためにも、『鏡界』の謎を探ろうと思ってる。だから水嶋。お前の力も貸してほしいんだ。これ以上、誰かの理不尽な『死』を招かないように」

暁奈は少し驚いた顔をしたが、巧の真剣な表情を見て口元を緩ませる。

「わかった。私に出来る事なら、何でもやるわ」

「……ありがとう、水嶋」

そう言って巧が快活に笑うと、暁奈も笑顔で答えてくれた。

それを少し照れ臭いと感じ、巧はわざとらしく立ち上がると伸びをして、晴天の青空を見つめて気を引き締めた。

「とにかく、今は状況が動くのを待つしかないんだ。いつ何が起きても、対処出来るようにしておかないとな」

「そうだね。ところでさ、神藤くんって何か部活に入ってる？」

「へ？ いや、入ってないけど、何で？」

突然の話題転換に巧はかなり戸惑った。暁奈の方はと言えば、よかった、と言って嬉しそうに手を叩いている。

「じゃあ今日一緒に帰らない？ 考えてみたら、私まだ神藤くんのことあんまり知らないし、色々聞いてみたいからさ。それに一緒にい

れば、もし突然『鏡界』が現れてもすぐに対処出来るでしょ？」

「……まあ、別にいいけど」

誘われた時は一瞬胸が高鳴ったが、『鏡界』という単語が出た瞬間、やっぱ俺の方はついでか、と巧は内心で肩を落とした。

暁奈にはそんな巧の心中などわかる訳もなく、ただ隣で嬉しそうにはしゃいでいる。

するとその時、昼休みの終わりを告げる予鈴のチャイムが鳴り響いた。巧と暁奈は二人して顔を見合わせる。

「え、もうそんな時間？」

「ちよつとゆつくりし過ぎたな。早く教室に」

戻ろう、と言い掛けてその動作は固まる。

屋上のフェンス越しに見えた風景に、巧は目を奪われた。

「ちよつと、待てよ……」

「？ どうしたの？」

驚愕したまま動こうとしない巧と同じ方向に、暁奈も視線を向ける。そして暁奈も驚いた表情になった。

屋上のフェンス越しには、地上にあるグラウンドなどの風景が見えるはずだった。

だが二人の視線の先にあったのは、自分たちが見失い、これから探そうと思っていた物だった。

それはまさしく、『鏡界』の入口。虚空に浮かび、人間を引きずり込む、魔の空間。

だが二人の視線の先にあるそれは、今までに見た物と明らかに違う物だった。

「何だよ、あれ。大きさがまでの比じゃない。デカ過ぎる……！」
今までの『鏡界』の入口は、直径がほぼ二メートル程の大きさだった。

だが今巧たちの視界にあるそれは、甘く見積もっても直径二十メ

ートルを超えている。まるで青空その物が、大きく口を開けて待っているかのようだ。

「そんな。あんな大きい物がここにあったら……」

暁奈は驚きのあまり、言葉を最後まで紡ぐ事ができない。しかし巧には、彼女の言おうとした事が容易に想像出来た。

ここは学校だ。生徒や職員といった大勢の人間がいる。今『鏡界』の力に飲み込まれたら、どれだけの人があの空間内へ落とされるか。考えただけでも身が震えた。間違いなく甚大な被害が出る。いや、或いはもうすでに何人もの人間が飲み込まれているかもしれない。躊躇っている暇は無かった。

「水嶋！」

「うん！」

二人が短く言葉を交わすと、二人の周囲に淡い光が現れた。互いの正面に集束した光はそれぞれ形を成し、巧の光は身長程の長さがある長剣、暁奈の光は弦のない銀色の弓へとそれぞれ変化した。

『災魔』と戦うための力、『心羅』の発現である。

二人は各々の武器を掴むと、屋上を疾走して加速を付け、一飛びで屋上の高いフェンスを飛び越えた。『心羅』の力によって、強化された身体能力が成せる芸当だ。

巧と暁奈はフェンスを飛び越えた勢いをそのままに、虚空に浮かぶ巨大な『鏡界』の入口を目指す。

やがて二人の意識は、一度暗転した。

暗転した視界が元に戻った時には、巧の身体はすでに『鏡界』の

中であつた。

右手には長剣が握られたままになっている。気を失っていたのは、ほんの一瞬だったようだ。

少し遅れて巧はある事に気付く。一緒に飛び込んだはずの暁奈の姿がない。

恐らく別の場所に落ちたのだらうと、巧は周囲を注意深く観察してみる。

相変わらず、辺りには廃墟となつた街並みが続いている。この場所に来るのも、これでもう三度目だ。

だが今回は少しだけ違う所がある。

それは、幻影の道化ファントム・クラウンが同行しているか、という所だ。

こうして『鏡界』の内部に入れば、遅かれ早かれ幻影の道化ファントム・クラウンは巧の前に姿を現した。ところが今回は、いつまで経ってもあの青年は現れない。

やはり彼の身に何か起こつたに違いない、と巧は思った。

「とにかく、俺や水嶋の他に飲み込まれた人がいるか、探してみよう」

声に出して確かめながら、巧はゆつくりと走り出した。

この空間が消滅していなかったという事は、幻影の道化ファントム・クラウンもまだどこかに存在しているはずだ。飲み込まれた人を探していれば、いずれ彼にも会えるだらう。巧には、そんな確信に近い物があつた。

その確信を胸に巧は一人、廃墟となつた街を突き進む。

そうしてしばらく走り続けていた巧は、通り過ぎていく辺りの風景の中に、何か違和感を覚えた。

今まで『鏡界』の内部で眼にした建造物と呼ばれる物は全て、何年もの年月を経て朽ち果ててしまったかのように、どれも傷付き、錆や罅に覆われ、半壊したような状態の物が殆どだった。

だがその建造物に混ざつて、真新しい物体がいくつも点在しているのが見える。

高さ三メートル程の黒く塗り潰されたその物体は、地面に対して

垂直に屹立している巨大な十字架だった。

疑問を感じて、進行方向の右側にあつたその十字架に、吸い寄せられるように近付いた。

下から徐々に視線を上げて、その眼を十字架の中心まで持つて来た時だった。巧はその十字架に何が吊るされているのか漸く理解した。

「これは……！」

十字架の中心、縦と横の柱が交差する部分に、巧と同じ年頃の少年が磔にされている。しかもその少年が着ている服は、巧の学校で使用されている制服だった。

まさかと思い、辺りに見える別の十字架の中心に目を向ける。その十字架には、巧の学校で使用されているセーラー服を着た少女がさらに別の場所にある十字架には、ワイシャツにネクタイ姿の中年の男性が、それぞれ磔にされている。

間違いないと巧は思った。黒い十字架に磔られているのは、自分と同じ高校に通う生徒と、勤務している教師だ。眼に見える範囲だけでも、かなりの数の黒い十字架が屹立しているのがわかる。

「まさか、ここにある十字架全部に？」

巧はそれらを見上げながら不審に思う。これだけ多くの人が『鏡界』に飲み込まれている事に驚きもしたが、それ以上に彼らがなぜこんな状態にされているのかわからない。

黒い十字架を見上げ、呆然していた巧の耳に、金属同士が擦れ合うような重苦しい音が響いてきた。

聞き覚えがある音だ。そう感じて巧は背後を振り返る。

「マタ会ツタナ、『力』ヲ持ツ人間ヨ」

視線の先には、全身を赤褐色に染め上げられた鎧の騎士が五体、横一列に屹立していた。皆一様に、その身の鎧と同色の剣と楯を携えている。

オーバーン・ナイト
「赤褐色の騎士……とか言ったか？」

鬱陶しそうに巧は呟き、長剣を両手で握り構えを取る。すると以前と同じように、少しくぐもった機械的な声が聴こえてきた。

「早々二剣ヲ向ケルトハナ。我々二聞キタイ事ガアルノデハナイカ？」

問い掛けられても、巧は構えを解かない。凜とした表情でただ言葉を返す。

「ああ、そうだな。でも話を聞くなら一体だけでいい。他の奴らは邪魔だ」

「強気ダナ、人間。……ナラバヤツテミルガイイ。本気デ一体ニデキルト思ウナラナ」

鎧の騎士たちは一斉に剣を構え、横一列の陣形を崩した。そして左右から巧を囲もうと、じりじりと移動していく。

その輪が完成する前に、巧は真つ正面にいる鎧の騎士に突貫した。囲まれるのを黙って待つつもりはない。

右下から斜め上へ振り上げた剣を、鎧の騎士は楯で受け止めた。

鈍い音がして剣線が遮られるが、巧は構わず体重を乗せて楯ごと剣を振り抜く。

「だあああつ！」

バットでボールを打ち返したように、鎧の騎士は楯ごと後方へ飛ばされた。そうして距離が開いた瞬間、横合いから別の騎士が襲い掛かる。

「ムンツ！」

横振りにして振られた赤褐色の剣を、巧は屈んで回避した。斬撃が空を切り、鎧の騎士の体勢が僅かに揺らぐ。

そこへ巧は屈んだ体勢から、その場で回転するように剣を横に振る。体勢を崩し、がら空になった鎧の騎士の胴に斬撃が吸い込まれ、胴を上下に分断した。

崩れ落ちる鎧の横を抜けて、他よりも動作の遅れていた鎧の騎士の一体と、瞬時に距離を詰める。

「ふっ！」

巧は短く息を吐き、左下から逆袈裟斬りを放ち、反撃の間を与えずに斬り伏せた。

残りはあと三体。

「人間風情ガ調子二乗ルナアア！」

残っていた三体の内、二体が同時に斬り掛かってきた。

同時に放たれた上段からの斬撃を、巧は剣を水平に構えて受け止めた。身の丈程もある長剣のため、二つ分の斬撃を受け止めても、まだまだ余裕がある。

「その人間風情にやられてんじゃねえ、よっ！」

言葉と同時に、右側にいた鎧の騎士の腹の辺りを、右足の裏で思い切り蹴飛ばした。靴の裏を介して固い感触が伝わってくるが、『心羅』の力で強化された脚力ならどうという事はない。

くの字に折れ曲がって後方に飛ぶ片割れを見て、残った方の鎧の騎士が僅かに慄く。

巧はそれを見逃さず、赤褐色の剣を押し返すと一旦後方に距離を取り、体勢を崩した鎧の騎士の真上に向かって跳躍した。

「うおおおっ！」

上段に高く振り上げた身の丈程の長剣を、落下と共に振り下ろした。

なんとか体勢を立て直した鎧の騎士が、楯を構えて受け止めようとする。

だが落下の速度が加わった斬撃は、赤褐色の楯ごと、鎧の騎士の身体を容易く両断した。

左右に分かれて灰になっていく鎧の身体を軽く見てから、巧は残った二体に告げる。

「どうやら結構簡単に行きそうだな。どうする……？ まだ続けるか？」

右手に持った剣を肩に掛け、巧はわざとらしく挑発してみせる。すると残った二体の片方が、くぐもった機械的な声で言う。

「調子二乗ルナト言ツタハズダ。ソノ程度デハマダ終ワラン」

「何だと？」

怪訝な顔をしてそう言った瞬間、巧の周りで異変が起きた。

以前見た『鏡界』の出口のように、渦を巻いているような空間の裂け目がいくつも出現し、その中から新たな鎧の騎士たちが何体も現れた。巧の背後に、朽ち果てた建物の屋上に、黒い十字架の影に、鎧の騎士たちの数は増え続ける。

「くそつ、なんて数だ……！」

「サア、『心羅』ヲ使ウ人間ヨ。開幕ノ鐘ガ鳴ルノハ、コレカラダ」
苦々しい笑みを見せる巧は、長剣を握る手にこれまで以上の力を込めた。

（何だろう、あれ）

朽ち果てた状態で乱立しているビルの最上部を、暁奈は跳躍を繰り返しながら、飛び石のように渡っていく。『心羅』の力で身体能力が向上しているため、この程度の芸当は朝飯前だ。

空中高くに跳躍する度、進行方向の遙か前方に巨大な黒い物体が見える。

その黒い物体は、地面に下半分が埋まった半球形の形をしていた。内部を見る事が出来れば、その中はドーム状に広がっている事だろう。その巨大なドーム状の黒い物体が暁奈には気になった。

先程目撃した、人が礫にされている黒い十字架と、何か関係があるのだろうか、と思考を巡らせる。

暁奈がそれを発見したのは、この世界に來た直後の事だった。廃

墟と化した街並みのいたる所に見えるその十字架を見て、最初は驚いた物の、暁奈はすぐに行動に移って、礫にされている人々を助けた。ようとした。

だがその行動は徒労に終わった。

『心羅』の力で、その十字架を破壊する事が出来なかったのだ。

最初に発見した人を助けようと、暁奈は十字架に向けて牡丹色の光の矢を何度も放った。だがなぜか、光の矢はそれに当たる直前になると、まるで見えない壁にでも衝突するかのようになり、途中で粉々に砕け散ってしまう。

他の場所にある十字架で試しても、結果は同じだった。

（何かの力が働いてる……）

そう確信した暁奈は、とりあえず高所に上り、辺りを遠くまで見通してみようと思い立ったのだ。別の力が働いているのなら、何かそれらしい物が見つかるかもしれない、と。

そして近場にあったビルの屋上に上った所で、暁奈は黒い十字架とは違う、謎の巨大な黒い物体を見つけたのだった。

その巨大な黒い物体は、どうやら『鏡界』の中央付近に存在しているようだ。一体あれが何のために存在しているのかわからないが、明らかに自然物でも人工物でもない。

敢えて言うなら、現実にはあり得ない現象、『非日常』の存在。

（『鏡界』を作り出している力と、関係がある……とか？）

不吉だがそんな予感がする。だからこそこうして今、暁奈はその中心部へ向かって突き進んでいる。

そして六度目の跳躍を終え、暁奈がビルの屋上に降り立った時だった。

「！？」

周囲に何かの気配を感じて、暁奈は瞬時に弓を引いた状態にした。現れた牡丹色の光の矢が、暁奈の顔を明るく照らす。

するとその時、まるでビルの壁面を駆け上がって来たかのように、視界の右側から突然、鎧の騎士が姿を現した。

「オーバー・ナイト
赤褐色の騎士……！」

跳躍の勢いを殺さずに斬り掛かってくる鎧の騎士に向けて、暁奈は待機させていた光の矢を瞬時に放った。牡丹色の爆発が、鎧の騎士の身体を包む。

「グアッ！」

光の矢の爆撃を受けて、鎧の騎士がそのまま地上へ落下していく。するとそれと入れ替わるように、今度は左後方から鎧の騎士が飛び上がった。

暁奈は瞬時に反転し、それを撃ち落とす。

すると今度は右後方、次は左前方、その次は左後方と、あらゆる方向から鎧の騎士が飛び上がってくる。

「なんて数の多さなの……！」

次々と飛び上がってくる鎧の騎士に向けて、右に左にと光の矢を放ち続けるが、徐々に対処が遅れ始める。

その場で全てを捌き切れなくなった暁奈は、その場から大きく飛び退いた。

跳躍した先の空中で身体を捻り、回転させる。そうして下を見ると、自分がさっきまで立っていた場所に、二十体近い数の鎧の騎士が群がっていた。

それを好機と見て、暁奈は弦を引く右手にこそとばかりに力を加えた。

「はあああつ！」

右手が力強く弦を引くと、弓と弦の間に極大の光の矢が現れた。集束された力が暁奈の腕の中で震える。それを躊躇う事なく、群がる鎧の騎士の中心に放った。

極大の光の矢は、まるで天から降る雷の如く、避雷針のようにそびえているビルの上に直撃した。

その直後、朽ち果てたビルの上が無数の鎧の騎士を巻き込んで、牡丹色の大爆発を起こした。ビル自体が荒廃していたため爆発の衝撃に耐えられず、轟音を響かせながらビルは瞬く間に倒壊していく。

空中を舞っていた暁奈は、地上を挟んで反対側にあった別のビルに軽やかに着地した。

と同時に、その膝が力なく崩れ落ちた。その身体は、自身でも驚く程に息を切らして喘いでいる。

「やっぱり……、いきなりあんな強い力……、使すべきじゃなかったかな……」

身体が重い、と暁奈は感じる。先程の極大の矢を放った事で、体力をかなり消耗しているようだ。

だがじつとしている訳には行かない。まだどこかに敵が残っている可能性がある。

乱れた息を整えながら、暁奈はゆっくりと立ち上がるうとした。

と、その時だった。

「驚クベキ破壊力ダガ、ドウヤラ酷ク消耗シテイル様ダナ」

「！」

横合いから聴こえたくぐもった声を、暁奈は愕然とした表情で聴き取った。

声のした方を見れば、ビルの屋上の際の部分に、さらに二十体近い鎧の騎士が屹立している。暁奈の表情が絶望の色に染め上げられていく。

「最悪ね……、こんな展開……」

そう呟きながら、自嘲気味に苦笑してみせる。

最早立ち上がる気力も無くなった暁奈に向かって、鎧の騎士たちは殺到した。

もう何十体目になるかわからない鎧の騎士の身体を斬り裂いた所で、巧はついに膝を付いた。汗が額から、ゆっくりと伝い落ちていく。

「はあっ、はあっ、はあっ」

長時間『心羅』の力を酷使したのもあるが、巧は普通の人間だ。体力に限界がある以上、赤褐色の騎士のような人海戦術で戦われると、結果は目に見えている。

現に巧の周囲には、未だ十体以上の鎧の騎士がいる。これだけ倒しても数が減らないという事は、倒した端から次々と新たな鎧の騎士たちが出現しているという事だ。いくらなんでも際限が無さ過ぎる。

「ドウシタ、モウ終ワリカ？」

「……ッ」

歯噛みして巧は立ち上がろうとするが、足に力が入らない。もうすでに身体が限界を迎えているのだろう。

鎧の騎士は終わりが近いと見たのか、武器を構える事すらしていない。

「幾ラ『心羅』ヲ持ツテイヨウトモ、所詮八人間ダナ。数デ押セバ何ト他愛モナイ」

「くそっ……！」

悔しさ紛れにそう吐き捨てるが、それでどうにかなる事でもない。再び立ち上がろうと、足に力を入れようとしたその時だった。

巧がいる位置よりも少し『鏡界』の中心部に近い所で、巨大な爆発が起こった。

一瞬牡丹色の光が見えた気がしたが、それに続いて辺りに轟音が響く。

恐らく何かの建物が倒壊したのだろう。心成しか自分が膝を付いている地面が、少し揺れているような気がした。

「なっ、何だ？」

土煙が巻き上がる中心部付近を巧が見ていると、鎧の騎士の一体

が、その方向を見る事なく告げる。

「才前ノ仲間ガ我々ト戦ッテイルダケダ。 アア、ダガ向コウハ
モウ終ワツタラシイ」

「? どういう意味だ」

後から付け足したような報告に、巧は土煙の上がる方向から視線を戻した。なぜ見てもいないのにあの場所で起こっている事がわかるのかと、そんな疑問の顔を見せる。

すると巧の真っ正面にいた鎧の騎士が、それに応えるように一歩前に進み出る。

「見テノ通り、我々ハ複数体イル。ソノ全テガ、アラユル情報ヲ瞬時ニ共有スル事ガ出来ル」

ソシテ、と鎧の騎士は続ける。

「向コウデ戦ッテイタ才前ノ仲間ハ、我々ニ敗北シタ。少シハ粘ッ
タ様ダガ、所詮ハ人間ダナ。実ニ呆氣ナイ幕切レダツタ」

「! 何だと……?」

巧は威勢よく齒向かおうとするが、身体が言う事を聞かない。口を動かすのがやっとだった。

鎧の騎士が言った敗北という言葉に、巧はとてつもなく嫌な物を感じた。まさか、と考えてしまう。

「安心シロ、死ンデハイナイ」

思考を読んだような意外な言葉に、巧は俯きかけていた顔を上げた。
た。

「本当か?」

「アア。才前タチハ二人トモ、生力シテ連レテイク必要ガアル。ア
ノ御方ノ所マデナ」

「あの御方……?」

誰の事だ、と巧は思う。だがその考えは、結論に辿り着く事はなかった。

真っ正面にいる鎧の騎士との会話に気を取られていた巧は、背後から別の鎧の騎士が近付いてくる事に気が付かなかった。

巧の首筋の辺りに、振り下ろされた赤褐色の剣の柄が深く叩き込まれた。

「ぐっ！」

鋭い痛みと衝撃で、巧の身体は前のめりになって倒れた。徐々に意識が薄れていく。

脳から身体への神経信号が一時的に遮断され、巧はそのまま意識を失った。

Act・6 真相

暗闇に光が訪れる。

徐々に意識を取り戻していく事を自覚しながら、巧はゆつくりと瞼を開いた。

首の後ろの部分に、鈍い痛みを覚える。そういえば背後から思い切り殴られたのだ。

首筋に右手を当てようとして、その手が自由に動かない事に気付く。まだ少しぼんやりとした頭で、巧は動かない自分の右腕に目を向けた。

するとその腕には、手首の辺りに銀の鎖が巻き付けられ、動かせないように拘束されていた。

右腕だけではない。

両足、腰、左腕、果ては首にまで銀の鎖が巻き付けられている。

漸く意識がはつきりしてきた所で巧は、少し前に見掛けた黒い十字架に、自分の身体が磔にされている事に気付いた。

「くそ……、何でこんな状態に？」

拘束を解こうと身体を動かしてみるのが、銀の鎖は強固なまでに、巧の身体を十字架に張り付けて離さない。

しばらく暴れていた巧だったが、不意に自分の左隣に、磔にされている暁奈の姿を見つけた。首に巻き付けられている鎖を鬱陶しく思いながら、巧は何とか首を左に巡らせ、気を失っている暁奈に声を掛ける。

「水嶋！ おい、しつかりしろ！ 水嶋！」

何度か呼び掛けていると、暁奈の身体が僅かに動いた。端正な形の瞼が、ゆつくりと開いていく。

「う……。新藤、くん……？」

意識を取り戻した暁奈の虚ろな眼が、心配そうな顔をした巧を映

し込んだ。

巧は少し安心して、身体を自由に動かせないながらも、暁奈の様子を確かめる。

「大丈夫か？ 怪我は？」

「うん、多分平気……。神藤くんこそ、大丈夫なの……。？」

暁奈のゆつくりとした声が返ってくる。どうやら自分以上に疲労しているようだ、と巧は思った。

「ああ、何ともない。こんな状態じゃ無ければな」

冗談っぽくそう言って、巧は笑ってみせた。

暁奈も、そんな巧の様子に軽く微笑んだ。と、その暁奈の表情が、前方の何かに気付いて怪訝な顔付きになる。

「神藤くん、あれ……」

「え……？」

暁奈に促されるようにして、巧は前方を向いた。そこで初めて、自分たちの目の前にある巨大な物体の存在に気付いた。

黒い壁、に一瞬見えたそれは、よく見ると球体のように、上部に行く程緩やかな曲線を描いている。まるで地面の中に巨大な黒いボールが埋まっっていて、その丁度上半分が地面から顔を出しているかのようだ。

「何なんだ、これ？ ドーム型の丸い物体にしか見えないけど……」
首に巻かれた銀の鎖のせいで視界を巡らせ難いが、巧は何とか全体像を把握する事が出来た。だが拘束されっぱなし身体は、もっと自由に動きたいと悲鳴を上げ始めている。

いい加減この状態をどうにかしたいと思っていると、目の前の黒い球体の一部分で不思議な事が起こった。

丁度巧たちの目線と同じ位置。その辺りで黒い球体の表面に歪みが現れた。その歪みはやがて波となり、球体の表面に波紋を広げていく。それが治まったかと思うと、今度は波紋の中心がズブリ、という奇妙な音を立てた。

その音の直後、まるで粘着性のある液体の中から這いずり出よう

とするかのように、整った形をした何かがこちら側に出てこようとしている。

「なっ……？」

巧は背筋に悪寒が走るのを感じた。こちらに何かが出てこようとしているのはわかるが、その工程が何とも気色悪い。ふと暁奈の方を見ると、彼女も同様に複雑な顔をしている。あまり注意して見ていたくないが、それでもやはり何が出てくるのか気になってしまう。すると、ブシュツと言う不快な音と共に、新たな物体が姿を現した。少し縦長の巨大な物体。それはまさしく。

「仮面……！」

巨大な仮面は水面から顔だけを出しているかのように、巧たちの目の前に浮遊している。

と、その仮面を見ていてある事に気が付いた。

仮面には中央に黒い線が引かれていて、右側と左側で表面に描かれている模様が異なっている。その仮面の半分、巧から見て右側の部分の模様に見覚えがあった。

おどけた表情を醸し出している、ピエロのメイクが施された、顔の左側を隠す仮面。
ファントム・クラウン

「幻影の道化の仮面と、同じ模様……？」

確かにそれは、彼が顔の左半分にだけ付けていた仮面と、模様が瓜二つだ。まさかと思い、巧はその仮面に向かって声を掛ける。

「あんたなのか？ ファントム・クラウン 幻影の道化！」

「」

巧の呼び掛けに、仮面から返事が返ってくる事はない。勘違いなのかと思った瞬間、反対側の仮面に変化が起きた。

反対側の仮面の表面には、何かの記号を現したような不規則な形の模様がいくつもあり、眼の辺りに覗き穴らしき空洞が開いている。その穴の中に、翡翠色の光が灯った。

まるで巧の呼び掛けに応じて、仮面の主が意識を取り戻したかのようだ。

「……神藤、巧。……水嶋、暁奈」

「「！」」

自分たちの名前を呼ばれて、巧と暁奈は驚いた。あの仮面は、明らかに意志を持って自分たちに語りかけている。

「あなたは、幻影の道化さんなの？」
ファントム・クラウン

巧に代わって今度は暁奈が呼び掛ける。その表情には、すこし安心したような笑みが浮かんでいた。

だがそれはほんの一瞬の事だった。

「残念ながらあの者ではない」
「！」

「奴はもう用済みだ。今私にとって必要な人材は、キミたちだよ」

声の主はあっさりと否定した。しかも幻影の道化の事を用済みだと吐き捨てた。まるで使えなくなった道具を切り捨てるかのように。

眼の前の仮面は幻影の道化ではなかった。チラリと横を見ると、

暁奈の表情が曇っているのがわかった。

巧は視線を戻すと、探るような調子で声を出す。

「お前、誰だ？ 必要な人材って一体何の事だ」

仮面の覗き穴から見える翡翠色の光が、言葉を発した巧の方に向けられた。

得体の知れない何かが、自分の事を見つめている。それだけで巧は、全身に悪寒が走るのを感じた。

「私の名は、メシエ。キミたちの世界を観測する者。……必要な人材とは、これから私が成し遂げようとする事に必要な、『力』を持った人間の事だよ、神藤巧」

自身の事をメシエと名乗った仮面の眼が、陽炎のように揺らめいた。自らを観測者と表現するメシエの言葉には、望みを果たそうとする強い意志のような物を感じ取れる。

「観測だと？ 成し遂げるって、何をするつもりだ」

「私はキミたちの住む世界とは別の世界の住人。私の住む世界に明確な名前など無い。敢えて言うなら『混沌』、と言った所か。その

『混沌』から、キミたちのいる世界へ渡り行こうとしているだけさ」
別の世界の住人。

その言葉は俄かには信じがたいが、巧自身、すでに『鏡界』というある種現実とは違う別の世界を体感している。『鏡界』という物がある以上、自分たちが住む世界とは別の世界があるとしても不思議ではない。むしろ自然と言える位だ。

その別の世界、メシエの言う『混沌』から、現実の世界へと渡る話を聞く限りでは、世界を渡り行くこと自体にあまり悪い印象はない。

だが何か、嫌な予感がする。

もうずっと以前から感じている、深い闇の中に取り残されたような不安感が。

「俺たちの世界に……？ 一体何のために？」

「言っただけだ、私は『観測する者』だ」と

巧の不安からの問い掛けを、メシエは諭すようにして封じた。仮面の向こう側から聴こえてくる声は、先程まで戦っていた鎧の騎士とは違って、はっきりと聴こえる。

「私は長きに渡り、キミたち人間の住む世界を観測していた。別の世界という物に、そしてその世界に住むキミたち人間に興味があった。そして観測を続ける内、その興味は益々強くなっていった」

巧も曉奈も、ただ黙ってメシエの話を聞いていた。表情などという物が存在するのかわからないが、仮面の内側には歓喜に打ち震えて笑みを零している、そんな気がした。

「私が一番興味を持ったのは、キミたち人間の持つ『感情』という物だ。『感情』という物が生み出す力は素晴らしい。喜び、怒り、哀しみ、楽しみ。それが正であろうと負であろうと、キミたち人間がその『感情』という物の下、どう生き、どう行動しようとするのか。それを私はこの眼で確かめたいと思った。私自身の住む世界という遠方からではなく、実際にキミたちの世界に踏み入って、より詳しく観測したい、と」

本当に楽しそうに、そして嬉しそうに、メシエの声は弾んでいた。ところが急に、その声の調子に陰りが見え始めた。

「……だが問題があった。キミたちの住む世界と、私が住む世界は相容れぬ存在。そう……、言わば水と油のような関係だ。キミたちの世界にとつて『異物』である私が、キミたちの世界に渡る事は出来ない。それは双方の世界の法則であり、超える事の出来ない壁だった」

越えられない現実を目の当たりにした時の事を思い出したのだろう。メシエの声は深く沈んでいるかのようにだった。

だがその調子も長くは続かなかった。まるで太陽が高く昇り始めるかのように、メシエの声は調子を取り戻していく。

「……だが私は思い付いたのだ。渡り行く方法が無ければ、自ら作り出せばいいと。キミたちの世界と私の世界、その境界線を取り払ってしまおうと。そのために私は、自身の望みを果たすための第一段階として、キミたちの世界と私の世界の間に、一つの空間を作り出す事にした。それが、『鏡界』だ」

「……」

もう充分に聞き慣れた単語を耳にして、巧と暁奈は眼を見開いた。この空間を作り出した張本人が、今目の前にいる。自分たちを非日常の世界へ引きずり込んだ、元凶が。

「『鏡界』とは、言わば合わせ鏡のような物だ。キミたちの世界の『現実』と、私の世界の『現実』が合わさり、このような空間を作り出している。そして『鏡界』には、双方の世界を司る『力』が存在している。だからキミたちの世界のような街並みもある。私の世界のような色の空がある。キミたちが化物と呼ぶ『災魔』がいる」

今、礎にされた自分たちの周りに見える景色は、虚構の物では無かったのか。現実にある街並みが『鏡界』内で具現化され、そこにメシエの世界の『力』が合わさる事で、このような廃墟と化した街並みが作られていたのか。

妙な納得と共に、巧は自分の中にある不安が、より大きくなるの

を感じた。紡がれていくメシエの言葉が、爆発寸前の爆弾のタイムのように思えた。

「そして世界の境界線を取り除くためには、双方の世界の『力の影響』を受けた生物が必要だと、私は考えた。……もうわかるだろう。そこでその生物に選んだのが、キミたち人間だ」

「……」

爆弾が爆発した気がした。

実際巧たちの衝撃は大きい。メシエは自分の欲望を叶える為の材料として、自分たち人間を選んだのだ。

「私は、双方の世界の『力の影響』を受けた人間を作り出す事と同時に、『鏡界』に落ちた人間がどういう行動を起こすのかも観測しようと思った。『鏡界』の入口をキミたちの世界に作り、人間を引きずり込み、『災魔』にキミたちを襲わせるように仕向ける。……

するとどうだ。その人間たちの中に、『災魔』に対抗する力を覚醒させる者たちが現れた。その力というのが、『心羅』だよ」

「じゃあ『心羅』の力は……」

「そう。『心羅』とは、私の世界の『力の影響』を受けた、キミたちの世界の『人間』が稀に覚醒させる特別な力だ。そしてこの力を扱う者こそ、私が求めていた存在。境界線を取り除くために必要なのは、双方の世界の『力の影響』を受けた生物。つまり……、『心羅』を覚醒させた人間」

それはつまり自分たちの事だ。

メシエは驚愕する巧と暁奈を差し置いて、淡々と続ける。

「あとはその人間と、この『鏡界』を同時に消滅させ、その瞬間に生まれる膨大なエネルギーをぶつければ、双方の世界を隔てている境界線は無くなり、私は自分の本来の望みを達成できるはずだった。だが……、見込みが甘かった」

「どういう事？」

暁奈が問い掛けると、メシエの陽炎のような翡翠色の瞳が見つめ返してきた。

「人材が足りなかったのさ。『心羅』を覚醒させた人間を生贄に捧げれば、境界線を打ち消せるという私の考えは間違っではないなかった。実際私は以前、『心羅』を覚醒させた人間の一人を捕え、自身の仮説を証明するために実験を行った。……だがその実験は失敗に終わったよ」

「何だと……!？」

実験を行い、そして失敗した。ならばその人間はどうなったのか。考えるまでもない、と巧は苦虫を噛み潰したような顔になった。メシエの言葉を聞いていれば、容易に想像出来る。生贄と称された者が無事で済むはずが無い。ましてその実験が失敗したのなら尚更だ。

「力を覚醒させた人間一人分のエネルギーでは、不足していたのだ。だから私は『鏡界』を存続させ、人間をこの空間に集め続けた。『心羅』を覚醒させた人間を集めるために」

だが……、とメシエは言い淀む。まるで説明するのが面倒だと言っているかのようだ。

「ここからが苦労の連続でね。一度に大量の人間を集めても、力を覚醒させるのはその内のほんの一握り。……しかもその人間が複数人存在する事は、今まで一度たりともなかった。実際、私がこの作業を始めてから集めた百四十三人の内、力に目覚めたのは僅か十一人。しかもその者たちは一堂に会する事なく、次々と『災魔』の餌食になっていった。御陰でどれだけ時間を無駄にした事か……」

「お前……!」

自分の勝手な欲望のために大勢の人を犠牲にしておきながら、メシエはそれを無駄と言った。磔にされている巧の手が、爪が肉に喰い込む程強く握り締められる。あんな非道な言葉を聞かされて、怒りを感じない訳がない。

だがメシエは気にした様子もない。その事に気付いてすらいらないようだ。

「このままではいつまで経っても、私の望みは叶えられない。そこ

で思い付いたのが、キミたちもよく知っている『案内人』の存在だ」
「……」

巧は一瞬先程までの怒りを忘れてしまった。メシエが誰の事を言っているのか、すぐにわかったからだ。

「この空間に集めた人間に情報を与え、導くための存在。それを作り出そうと考えた。『案内人』なる者がいれば、この空間内で人間が死ぬ確率が少しは減る。それが『心羅』に目覚めた者なら尚更な」
メシエはただ淡々と告げる。自分が行ってきた事の全てを、躊躇う様子も全く見せずに。

「しかも丁度その頃、『災魔』に喰われて死んだ人間が一人いた。私はその人間の精神に入り込み、生前の記憶を奪って操り人形とし、名を与えた。それがキミたちの案内人、幻影の道化だよ」

「なんて事を……」

暁奈が悲痛な声を漏らした。巧にはその心中を察する事が容易に出来た。なぜなら、幻影の道化の過去を彼女に話して聞かせたのは、紛れもなく自分なのだから。

幻影の道化から話を聞いた時も、自分が暁奈に話した時も、巧はやりきれない気持ちになった。

それなのに眼の前の仮面の存在は、そんな事を全く感じている様子が無い。感じている訳が無い。

こいつには、自分の目的を果たす、という事しか頭に無いのだから。

「実際、あの男は非常に役に立ってくれた。現にこうして、私の前に『心羅』を覚醒させた人間が二人並んでいる。実に喜ばしい事だ」
「ふざけるなよ。あいつはお前の道具じゃない！ それにあいつは、俺を日常に戻そうとしてくれていた。『災魔』の群れに襲われた時も、鎧の騎士に連れて行かれる時も……それはつまり、お前の望みを阻もうとしてたって事だろ！？」

巧の強い否定の言葉に、メシエはさらに否定の言葉を重ねて返す。
「言ったはずだ、奴は私の『操り人形』だと。奴自身その事に気付

いていたかは知らないが、私はあらゆる場面で奴の言葉や行動に制限を掛けていた。キミたちに不要な情報が漏れたり、キミたちが『鏡界』という非日常の世界から離れないようにな」

「！ 何だと……！？」

「……一度もおかしいとは思わなかったのか？ 奴の言葉や行動に、一貫性が無いという事に。現に今キミたちの目の前に、その証拠があるだろう」

巧はまさかと思う。自分がさっき感じた確信に近い物が、メシエの言葉によって現実味を帯びていく気がした。

「キミたちから見て右半分の仮面の模様。奴が付けていた仮面と、同じ模様だろう？ これこそが、奴が私の操り人形であったと共に、奴隷であったという何よりの証拠。キミたちは『心羅』を覚醒させた瞬間から、ここへ導かれる運命だったんだよ」

「そんな……」

確かに仮面の模様は同じ物だ。そう認めてしまったのだろう。暁奈の口から、諦めたような言葉が漏れた。

「……ふざけるなよ。全部お前の思い通りだったって言うのか……？」

感情を押し殺そうとしても、出来なかった。巧は問わずにはいられなかった。

ファントム・クラウン

「幻影の道化がお前の思い通りだったって言うなら、何で俺が『災魔』の群れに襲われてる時、俺を現実の世界に押し戻したんだ！

オーバーン・ナイト

赤褐色の騎士に連れて行かれそうだった時、どうして俺と水嶋を無理矢理現実の世界へ戻したんだよ！？」

「簡単な事だよ。『災魔』の群れから助けたのは、貴重な人材が失われるのを防ぐ為だ。赤褐色の騎士から助けたのは、貴重な人材を守ると共に、『儀式』を行う準備に入る為だ。幻影の道化にキミたちを助けるという意志があったかどうかは関係ない。全ては、私の意志によって行われていた事だ」

「お前え……！」

ギリツ、という歯を食い縛る音が聴こえた。自分でも驚く程、怒りを感じている。

するとメシエの言葉を聞いていた暁奈が、怪訝な顔で尋ねる。

「『儀式』って、何をするつもりなの？」

彼女は巧とは違い、冷静に状況を確かめようとしている。その事に感心したかのように、メシエは「賢明な判断だな」と付け足した。「さつきも言った通り、これからキミたちには生贄となってもらう。この『鏡界』とキミたちを一気に消滅させれば、その衝撃で境界線は消え去り、私はキミたちの世界へ渡り行く事が出来る」

「！ 待つて！ ここにいるのは私たちだけじゃないわ！ 他の人たちはどうなるの！？」

「当然キミたちと共に消滅する。……元々他の人間たちは、キミたち二人で失敗した場合の保険として引き込んだまでの事。こうしておけば、また力に目覚める者が現れるかもしれないからな」

「そんな……！」

メシエは本気でやろうとしている。例え巧や暁奈で失敗したとしても、世界の境界線を消し去る為なら成功するまで続けるだろう。そうなれば、今この空間に捕えられている人たちだけではない。

現実の世界にいる多くの人々が、真実を書き換え、捻じ曲げられる形で犠牲になる。

「そんな事、させてたまるかよ！」

自分が犠牲になるのもごめんだ。

ここで諦めて、誰かが犠牲になるのなんてもつとごめんだ。

（諦めてたまるか！）

巧は必死に自分の身体を束縛する銀の鎖を剥がそうと？く。

暁奈の瞳にも、抗いたいと願う強い意志が、揺らめく炎のように煌めいている。

だがどれだけ？き暴れても、身体を縛る枷は外れない。メシエはそれを諭すかのように告げる。

「無駄だ。キミたちを磔にしているその十字架は私の力で作った特

別製でね。『心羅』の力を封じ込める作用があるんだ。……もつとも剣や弓を呼び出せた所で、腕を振り回す事が出来ない状態では、枷を解く事も不可能だろうがね」

「くっ、そ……！」

諦めるつもりが無い二人は必死に抵抗を続ける。と、その時だった。

ズブツ。

「！？」

突然奇妙な音が、目の前の仮面の右側辺りの黒い壁から聴こえた。見るとその部分にだけ、表面に小さな波が立っている。まるで水の中から何かが顔を出そうとしているようだ。

するとメシエが、感嘆したような声を上げた。

「何だ、まだ意識があったのか。……しぶとい奴だ」

最後に忌々しそうに付け加える。その直後、小さく波立った部分の中心から、水面を叩くような音と共に、何かが勢い良く飛び出してきた。

「あれって……」

何かを悟ったかのように、暁奈がポツリと呟く。

飛び出してきた物は、人間らしい形をした右腕だった。恐らく壁の向こうで身体と繋がっているのだろう。その右腕は、見覚えのある服を纏っていた。

「まさか……」

その右腕は、周りの様子を確かめるように、黒い壁をペタペタと触っている。そしてその腕が、まるで腕立て伏せでもするかのように壁に手をつき肘を曲げ、目一杯力を込めた。

次の瞬間。水面が弾けるかのように黒い壁が飛び散り、中から人間の上半身が現れた。

ダランと垂れた上半身が持ち上がり、巧たちの方を向く。

そこには、二人がよく知っている者の顔があった。

「ファントム・クラウン 幻影の道化……！」

「やあ……、二人とも。どれくらいぶりだい？ ……まあとにかく、久しぶり」

少し疲労した表情の幻影の道化の顔には、以前付けていたピエロの仮面が無かった。青年の人間らしい素顔が、そこにはあった。

「まさか自力で出てくるとはな……。今更何をしに出てきた？」

表情があるのか無いのかわからないが、少なくとも今のメシエの声には、明らかに嫌悪の色が濃く出ていた。

それをいつもの調子で聞き流すように、ファントム・クラウン幻影の道化はニコニコする。尤もその表情は、かなり無理しているように見えた。

「いやいや、二人が頑張ってるのに、ボクだけこんな所で休んでる訳にはいかないなあと思つてさ……。ちよつとあなたに意地悪しに」
「……何だと？」

メシエが怪訝な声を上げた、その時だった。

突然何の前触れもなく、巧と暁奈を磔にしていた十字架が、身体を縛っていた鎖と共に粉々に砕け散った。

前兆も無いまま訪れた身体の内と落下に、巧と暁奈は上手く着地出来なかった。

「痛つてえ……」

「十字架が……、壊れた？」

「！ 貴様、何をした？」

メシエの翡翠色の瞳が、ファントム・クラウン幻影の道化を捕える。その眼の光は、怒りに揺らめいているようだ。

「簡単な事だよ……。あなたの力を利用して、彼らの枷を外しただけさ」

「貴様……！ 私の力を利用するなどという真似……、一体いつの間に……！」

「あなたの存在に気付いた時からだよ。ボクはこの世界の『案内人』だ。力の流れなんかも熟知してる。……ボクにそうあるよう仕向けたのは、他でもないあなた自身でしょう？」

「おのれ……、操り人形の分際で……！」

激昂した口調で幻影の道化を見据えるメシエの眼が、眩しい翡翠色の光を一瞬放った。

すると幻影の道化の周りの壁の中から、無数の黒い触手が飛び出し、その身体に乱暴に巻き付いた。

「貴様は大人しく、私の中で朽ち果てろ！」

「ぐっ……、うっ……！」

幻影の道化の身体が、徐々に壁の内側へと沈んでいく。最早彼には、抵抗する力も残っていないようだ。

「幻影の道化！」

巧は叫んで駆け出し、それに暁奈も続こうとした。

だが幻影の道化は、沈んでいく身体から右手を伸ばして、二人を制するように言う。

「ボクの、事は……、気にしないで。思う存分……、暴れて、やりなよ……。巧、暁奈」

「！」

届かないとわかっていても、巧は手を伸ばさずにはいらなかった。その右手は、虚しく空を掴む。

幻影の道化の姿は、すでにそこには無かった。

巧は俯いて、伸ばしていた右手をゆっくりと下ろした。

彼は最後に、巧と暁奈の事を名前で呼んだ。それはもう、彼自身がメシエの操り人形では無くなった事を現しているかのようだった。

「ありがとう、幻影の道化さん」

自分の少し後ろで暁奈がお礼を言い、微かに鼻を吸るのが聴こえた。多分、その眼は少し濡れているに違いない。

「チィ、人形風情が余計な真似を……。まあいい。抵抗するというのなら、キミたちを戦闘不能にして生贄にするだけの事だ。私がいる限り、キミたちはこの空間から逃げられないのだから」

メシエの言葉に反応するかのように、黒い壁のいたる所に波紋が生じ、無数の鎧の騎士たちが次々と飛び出してきた。遠慮も加減も無いと言わんばかりに、鎧の騎士の大群は、二人の視界を埋め尽く

していく。

「あんたがいる限り、か。だったら話は早いさ」

もう出来る事は一つだけ。遠慮も加減もいらぬのは、こちらも同じだった。

巧と暁奈の身体が光に包まれる。そしてその光が治まる頃には、少年の右手には身の丈程の長剣が、少女の左手には弦の無い三日月形の弓が、それぞれ握られていた。

「メシエ。俺たちは、あんたを倒して日常に帰る！」

開始の合図はただ一つ。

向かう相手は大多数。

巧と暁奈は戦う決意の宿る瞳で、強く前を見据えた。

Act・7 激突

身の丈程の長剣を携え、巧は鎧の騎士の群れに突貫した。

「うおおおおおつ！」

礫にされる前の戦闘での疲労は、全く感じない。むしろあの時よりもさらに身体が軽い気がする。

『心羅』とは、心の力。

ファントム・クラウン

それは以前、幻影の道化が言っていた言葉だ。

あの時の彼の言葉は、彼自身の言葉だったのか、それともメシエの言葉だったのか。

どちらにしても、それはどうやら本当らしい。心を強く持つ事が出来れば、自ずと『心羅』の力も強くなる。今の自分が、まさにその状態という訳だ。

(……あいつの言葉であってほしいけどな)

あの時は何となく聞き流していた言葉だったが、今になって、今だからこそ、そうであってほしいと思う。

剣を握る両手に一層の力を込め、二体の鎧の騎士を真一文字に一気に切り裂いた。休むつもりはない。群がる鎧の騎士たちの間を、巧は猛然と突き進む。

その巧を援護するように、暁奈は離れた位置から、巧の死角から襲い来る鎧の騎士を、光の矢で正確に撃ち落とす。死角を狙う者が二体なら二発、三体なら三発と、一発ずつ確実に命中させ、鎧の騎士を近付けさせない。

もちろん敵もバカではない。遠距離からの攻撃を行う彼女を先に討つべく、何体かが一斉に襲いかかろうとする。

だがそれが、今度は巧にとっての好機となる。

暁奈を狙いに行こうと気を散らした瞬間を見逃さず、巧は剣の長さを生かしてその者たちの行く手を遮り、真一文字や袈裟斬りなど

の斬撃を浴びせる。例えそれで倒せなかったとしても、今度は遠距離から暁奈が止めを刺す。

二人の流れるような動作のコンビネーションで、敵の数は徐々にだが、確実に減っていく。

「だあああああつ！」

眼の前で無防備になった鎧の騎士を切り払い、

「水嶋っ！」

巧は叫ぶと、自身に斬り掛かろうとしていた鎧の騎士の肩を踏み台にして、大きく暁奈の後方へ向かって跳躍した。

それを合図と受け取り、暁奈は右手に力を込め、現れた牡丹色の弦を勢い良く引く。

そこに集束された力は極大の光の矢となり、眩い光と共に大気を震えさせた。

「はあああああつ！！！」

放たれた極大の光の矢は雷の如く疾走し、群がる鎧の騎士の中心に飛来した。

直後。凄まじい光と爆音が辺りに衝撃を齎した。さながらミサイル爆撃でも受けたかのように、爆風は土煙を纏って辺りに吹き荒れる。

地上に撒き散らされた土煙を上空から振り払うように、巧は静かに着地した。

少し離れた位置には、構えを解いて悠然と立つ暁奈の姿があった。三日月形の弦の無い弓が、彼女の姿に優雅に映える。

「さっき見た爆発は、今の光の矢だったって訳か。間近で見てもとんでもない威力だな……」

「そ、そうかな？ 全然だと思っけど……」

照れたように右手で頭を掻く少女を見て、今ので全然なら全力で撃つたらどうなるんだよ……、と内心で肝を冷やす。暁奈は謙遜で『そんな事ない』と言っているのだろうが、それにしたってこの威力だ。そこは素直に認めてくれた方が、巧としても変な勘繰りを起

こさなくて済んだのだが。

苦笑いをしていた表情を真剣な表情に切り替え、巧は改めて剣を構え直す。

するとその時。

「なるほど」

「――」

僅かに薄まり始めた土煙の向こうから、涼しげなメシエの声が聴こえてきた。

先程の暁奈の攻撃はメシエではなく、鎧の騎士の群れに向かって放たれた物だ。別にメシエ自身が傷を負っていなくても不思議はないが、今の威力を目の当たりにしているにも関わらず、メシエの声は驚く程冷静だった。

想定内の威力。そう言われている気さえした。

「キミたちの力はわかった。さすがは『心羅』の使い手、と言った所か」

その言葉を言い終わる頃には、視界はかなり戻ってきていた。

二人の前に改めて、巨大な黒いドーム型の物体と、その側面に張り付くようにして浮かぶ、左右で模様の違う巨大な仮面が姿を現した。

地上から見上げると、さらに大きく感じる。これ全体がメシエの身体、と考えるべきなのだろうか？

「今の私の姿は、キミたちからすれば異様ななんだろうね」

巧と暁奈の心中を察したように、メシエは翡翠色の瞳を眼下の巧たちに向ける。

今その眼からは、何の感情も読み取れない。ただ翡翠色をした、陽炎のような光が揺らめいているようにしか見えない。

「この姿のまま……、というのも、いまいち芸が無いね」

「何だと……？」

その言い方が意味する所は、他に別の姿がある、という事か？訝しげな表情の巧と、警戒心を見せる暁奈の前で、メシエはゆっ

くりと告げる。

「一つ、面白い物を見せてあげよう……。これが私の曲芸だ」

告げると同時に、巨大な仮面の覗き穴から見えていた翡翠色の光が、蠟燭の火を吹き消したように消え去った。

すると突然、仮面の中央に引かれていた黒い線に沿って仮面が左右に分かれ、まるで両開きの扉のように外側に開いた。

ドーム状の物体の表面に開いた穴の中は暗く、中を見通す事が出来ない。

「今度は何が出てくるんだ……？」

何であろうとどうせ碌な物じゃない。これまでの散々な経験から察すれば、そう考えるのが一番利口だ。

暁奈もそう心得ているのだろう。すでに弓を構え、光の矢を出現させている。何が飛び出してきても撃ち落とせる状態だ。

「ふむ……。こんな姿を顕現させるのは初めての事だが、中々動きやすい物だな」

暗い穴の中から、コツコツと響く人間のような足音と共に、メシエの声が聴こえてきた。暗がりから徐々にその姿が露わになっていく。と、次の瞬間。

「！ えっ……？」

信じられない物でも見たように、暁奈が驚きの声を上げた。

最初、それがどういう事なのか巧にはわからなかった。首を傾げそうになった巧は、暗がりから出てきたメシエの姿を見て漸く理解した。

「なっ……、ファントム・クラウン幻影の道化……！？」

暗がりから出てきたメシエの姿は、自分たちが今まで何度も見てきた、ファントム・クラウン幻影の道化の姿その物だった。付けている仮面も、片側だけ見える顔立ちも、銀色の髪も、童話やおとぎ話に出てきそうな西洋風の服も、全てが同じだった。

唯一違う所と言えば、薄藍色だった瞳の色が、翡翠色に変わっている所だ。

まるでメシエが幻影の道化の皮を被って、彼に成り済ましているかのようだ。

「お前……、メシエなのか？」

「ああ、そうとも。驚いたかな？ キミたち人間の姿に合わせようと思って、奴の身体を拝借したんだがね」

「身体を拝借、って……」

言葉の意味する所を理解して、言い淀む暁奈。

ファントム・クラウン 幻影の道化と化したメシエは、不敵に笑ってみせる。

「もちろん、奴の精神はもう存在していない。この男の身体は、『観測者』メシエが貰い受けた」

「お前……！ 一体どこまであいつを利用すれば気が済むんだ！」

ファントム・クラウン 幻影の道化を『鏡界』に引きずり込み、『災魔』に襲われて死んだ彼の精神を乗っ取り、散々使い回した揚句、用済みと言って切り捨てた。にも拘わらず、今度は彼自身の肉体を使って悠然とそこに立っている。

そんなに自分の望みが大事なのかと、巧は怒りを感じずにはいられなかった。

「私は観測者だからね。キミたちがこの状況においてどういう感情を見せ、どういった行動を取るのか。それをこの眼で確かめておきたいんだよ。それにしても、奴はもう用済みだと思っていたんだが……。まさか最後の最後で使い道が見つかるとは。フフ、私も嬉しい限りだ」

何が観測者だ。

何が嬉しいだ。

自分の目的のために他人を犠牲にする、そんな物は願いとは言わない。

「ふざけ」

瞬間、叫ぼうとした巧の声を遮るように、メシエの身体が牡丹色

の爆発に巻き込まれた。

驚いて巧は彼女の方を見る。牡丹色の爆発を起こす攻撃者は、一人しか思い付かない。

視線の先にいた暁奈は、既に光の矢を放った後だった。彼女の目尻には、薄らと涙が溜まっている。

「私……、あなたみたいな人、大っ嫌いです！」

爆煙の向こうを睨みつけて、暁奈は大声で言い放った。彼女も巧と同様に、いや、もしかしたらそれ以上に、メシエの行動に怒りを感じているのだろう。

暁奈の迫力に負けて巧は少々呆然としていたが、爆煙の向こうで何か動く気配がして、再び気を引き締め直した。

「ふむ……、これは興味深いな」

爆煙の中から、メシエは悠然と歩いて現れた。まるで足下に見えない足場でもあるかのように、その身体は宙に浮いている。

「まさか、キミたちの奴に対する思い入れがここまで強いとは、正直考えてもいなかった。この姿で現れたのは私にとっては正解だな。キミたちの感情という物が、より良く観測出来る」

（！ 水嶋の攻撃で、傷一つ付いてないだと……！？）

確かに先程の攻撃はメシエに直撃していたはずだ。だがメシエの身体には、損傷と呼べる物が一つも無かった。負傷している様子もなく、服にすら汚れ一つ付いていない。

暁奈もそれに気付いたのか、メシエを睨みつけながらも、どこか驚きを隠せない様子だ。

「フフ……、実に面白い。さあ！ もっと私に見せてくれ！

キミたちの感情という物を！ そこから生まれる力という物を……」その瞬間、巧はメシエの姿を見失った。

いや、姿を見失ったと言うよりも、姿が消えたと言った方が正しい。

一秒にも満たない僅かな時間。その一瞬でメシエは、巧の真横に立っていた。

それに巧が気付くよりも早く、メシエは巧の右側頭部に掌底を叩き込んだ。

たった一撃。それだけで巧の身体は宙を舞った。

叩き飛ばされた先には、『鏡界』に聳える古びた五階建てのビルがある。

巧の身体はそのビルの中程に、矢のような速度で一直線に突っ込んだ。その瞬間、壁やガラスが砕ける轟音が辺りに響き渡った。

「えっ……！？」

その音で漸く、暁奈は何が起こったのか理解し振り向いた。

先程までそこにいたはずの巧の姿は無く、代わりにそこにはメシエが背を向けた状態で立っていた。そして、その身体から一直線上の先にあるビルの中程が、音を立てて崩れている。

「神藤くん！！」

声が届いているのかどうかわからない。ただ、巧から返事が返ってくる事は無かった。

暁奈は瞬時に、メシエに向けて三発の光の矢を放った。

だがメシエは振り返る事も無く、身体を僅かに逸らすだけでそれらを躲した。

目標を見失った光の矢たちが、そこら辺のビルの壁や地面に当たって爆発を起こす。

「爆発する光の矢など、触れさえしなければどうという事も無い。

……その程度か、水嶋暁奈」

「……っ！」

悔しさに言葉を詰まらせると、暁奈はもう一度弓を引いた。

すると、光の矢を放とうとするのを制止するかのように、メシエ

が右手を前に突き出した。その顔は不敵な笑顔に満ちている。

「キミは確か、非日常の世界に強い憧れを抱いていたな。そのキミが、なぜ私を倒そうと敵意を向けてくる？」

「なぜって……」

暁奈は弓を引いた状態で固まってしまった。問われている事が、メシエの意図がわからない。

「確かにキミのその力は、私に対抗し得る力だ。だがその力で私を倒せば、この『鏡界』はどうなると思う？ 当然消え去るに決まっている。だがそれは、キミの本当の望みか？ キミの望みは非日常の世界で生きる事のはずだ。そのキミが、自らの手で非日常の世界を壊そうと言うのか？」

暁奈は息を呑んだ。メシエはつまりこう言っている。

非日常を望んでいた暁奈自身が、非日常を壊すためにその核たる存在である自分と戦えるのか、と。

心を揺さぶろうとしている。だがそうだとわかっていても、暁奈は考えてしまう。

なぜ自分は戦おうとしているのか、と。

神藤巧。彼と違って自分には、日常を守ろうという強い意志がある訳ではない。むしろ非日常を望んでいたからこそ、自ら『鏡界』に足を踏み入れたのだ。彼とは対照的に、日常を守ろうと思う理由が、自分には無い。

ならばなぜ戦おうと思ったのか？

連れ去られた人がいるから？ 違う、そうではない。

犠牲者を出したくないから？ それはあるが、そこまで明確な理由ではない。

ならばなぜ？

(……そうだ。私は)

唇を強く結び、暁奈は弓を引く腕に力を込める。そして光の矢をメシエに向けて放った。

「！」

突然の攻撃に驚いた表情を見せた物の、メシエはそれを軽い動作で躲した。

光の矢が通り過ぎた数秒後、背後で爆発が起こる。その爆風を背に受けながらメシエが問い掛けてきた。

「……これが返答。そう取っていいという事かな？」

メシエの表情に、先程までの不敵さは無い。ただ不意打ちで攻撃された事への、静かな怒りが感じられた。

だが怖気づく訳にはいかない。暁奈はすぐさま、牡丹色の弦を引いて構える。

「確かに私は非日常に慣れてるし、神藤くんみたいに、日常を守るうっていう強い意志がある訳でもない……。でも、私があなたと戦う理由だけは、今ハッキリとわかったわ」

ギリツと、光の矢の狙いをメシエに定める。

ファントム・クラウン

「幻影の道化さんを弄んで、道具のように切り捨てる。私はそんなあなたのやり方が許せないだけ。だから私は戦う。例えその結果……、懂れていた物が消え失せるとしても！」

言い終えると同時に、暁奈は弦から右手を放した。光の矢は、再びメシエに向かって飛んでいく。

だがメシエはそれを、今度は避けようとさえしなかった。

「……そうか」

ただそう一言告げ、光の矢を右手で弾き返した。

爆発する事なく軌道を逸らされた光の矢は、地面に触れて爆発を起こした。

「なっ!？」

驚いて声を詰まらせつつも、暁奈は再度弓を引こうとする。

だがその瞬間、距離を詰めたメシエの右手が、弓を持った暁奈の左腕を掴み、その身体をいとも簡単に持ち上げた。

そしてその場で回転して勢いを付け、回転を止める瞬間に暁奈を投げ飛ばした。

暁奈の身体は乱雑に二、三度回転しながら、近くにあったコンク

リート製の壁に背中から激突した。

「かつ、はっ……！」

全身を襲う衝撃で、口から息が無理矢理吐き出された。壁に凭れるようにして倒れる暁奈に、メシエは涼しげに告げる。

「キミの感情は充分観測する事が出来た。ご苦労だったね……。あとは生贄になる時まで、そこで大人しくしているがいい」

その言葉と同時に、メシエの周囲に変化が起きた。

突然、翡翠色の光の玉が無数現れ、メシエを囲むようにクルクルと回転し始める。

インベリアル・ジエイド
「『翡翠の光弾』」

メシエが唱えると瞬時に回転が止まり、それらが光の尾を引いて直進し、暁奈の下に降り注いだ。

無数の爆発が起こったのはその直後だった。

「きやあああああつ！」

爆撃は暁奈と共に地面や壁を抉り、土煙を辺りに撒き散らした。土煙はしばらくその場に留まっていたが、やがて徐々に消え去っていく。

後に残ったのは、崩れた壁の破片や球状に挟れた地面、そして、意識を失い倒れている暁奈だった。

「さて、観測もそろそろ」

終わりにしよう、と続ける事は出来なかった。

突然、崩れかかっていたビルの中程から上部が爆発し、巨大な破片となって四方八方に飛散した。そのビルは、メシエが吹き飛ばしたとある少年が衝突したビルだった。

下半分となったビルの上部に、土煙の中から現れる人影があった。
「メシエエエエツ！！」

天が裂けるかのような叫び声を上げている少年を見つめ、メシエは本人の耳に届かない声で告げる。

「今度はキミの番か、神藤巧」

ビルに衝突してから少しの間、巧は気を失っていた。

眼が覚めて最初に目撃したのは、暁奈がメシエに投げ飛ばされる光景だった。壁に衝突して動く事の出来ない暁奈に、メシエは容赦なく止めを刺した。

そこで巧はついに我慢し切れなくなった。

『心羅』を再び発動させて、ビルの上層を粉々に吹き飛ばす。腹の底から怒りが湧き上がり、怒号となって口から出た。

「メシエエエエツ!!」

見下ろすと、メシエは悠然と自分を見上げていた。その口が何かをしゃべっていたようだが、気にする必要もつもりもない。

ビルの壁面に足を掛け、巧は弾丸のように一直線に突進した。その先には、不敵に笑うメシエの姿がある。

「うおおおおっ!!」

上段から放った斬撃を、メシエは身体を逸らして容易く躲した。ダンスのステップのように軽い足捌きで右に逃れたメシエに、巧は構わず横振りの斬撃を浴びせようとする。

だがその斬撃を、メシエは右手で簡単に受け止めた。巧の両腕に、金属を殴り付けた時のような鈍い痺れが起こる。

「単調な攻撃だ。そうやって、ただ闇雲に剣を振るうだけがキミの力なのかい？　だとしたら本当に残念だ。キミの力の底が知れる」
不敵に笑うメシエの手の中で、剣が細かく震えている。押し切ろうと力を込めているのにビクともしない。

「何で水嶋に止めを刺した？　あいつはもう起き上がれなかったんだ。それに、女なんだぞ？」

すぐ傍で倒れて動かない曉奈に、一瞬視線を向ける。

彼女の制服は所々破れたり裂けたりして、その下にある白い肌が露わになっていた。そしてその肌にも、擦り傷や切り傷が出来て血が滲んでいる部分がある。

女相手にここまでするのか。そんな巧の憤りを、メシエは拍子抜けした様子で流す。

「私にとってキミたち人間は、一種の個体でしかない。男だの女だのという概念は、生憎持ち合わせていないんだ」

「この……！」

「それともう一つ」

「！」

メシエは剣を払い除けると、速度の乗った左拳を巧の腹の中心に叩き込んだ。

「ぐほっ！」

身体をくの字に折り曲げて、巧の身体は後方に飛んだ。

地面を擦って止まった所で、巧は腹を抱え込んだ。熱を帯びた激しい痛みが、腹を中心に全身を駆け巡る。

痛みに悶えて立つ事の出来ない巧を涼しげに見下ろし、メシエは握っていた拳を解いた。

「私は手加減という物が出来ない性分だね。齒向かう気なら容赦はしない」

「あう、がつ……」

痛みに悶えてはいるが、巧は剣を握る手を放そうとはしない。

ふむ、とメシエは声を漏らす。そしてゆっくりとした歩調で巧の許まで歩いてくる。

「私がキミたちを殺せないと思っているようだが、それは見当違いだ、神藤巧」

メシエは巧の許まで来ると、髪の毛を鷲掴みにして無理矢理立ち上がらせた。

頭部の痛みを振り払おうと、巧がその手を掴むが、メシエは気に

した様子も無く続ける。

「『殺せない』のではなく、『殺さない』だけだよ。キミたちには私の望みのために、『鏡界』と共に生贄になってもらわなければならないからね。キミたちは生かしておく必要がある。だからキミたちに戦う意志がある限り、この苦しみがいつまでも続く……。ただそれだけの事だ」

冷たく告げると驚掴みにした腕を右に払い、巧の身体を簡単に放り投げた。巧の身体は飛び石のように地面を跳ね、コンクリート製の壁に衝突して止まった。

だが巧はそれで沈黙しなかった。

剣先を地面に当てて剣を支えにし、重力に逆らうようにゆっくりと立ち上がる。

「……まだ歯向かうつもりなのかい？」

その姿を哀れむような表情で見つめ、メシエは溜め息をついた。

一方の巧は剣を構え直し、メシエに向かって突進していく。

「うおおおおっ!!」

「……そうか。ならば仕方ない」

巧が放った下段からの袈裟斬りを左手で受け止め、メシエは巧の顔を右拳で殴りつけた。

「ぐっ！」

左頬に正拳突きを喰らいよろめいた巧の身体に、メシエは続け様に五発の拳を叩き込んだ。

次々に打撃を撃ち込まれ、耐えられなくなった巧は前のめりに倒れそうになった。

だがメシエはそれを許さず、倒れそうになる巧の制服の肩の部分をつ掴み、片手で軽々と持ち上げた。

糸の切れた操り人形のように、巧の身体は力なくダランと垂れ下がる。その腹の中心に容赦なく右拳を叩き込み、巧の身体を後方へ殴り飛ばした。

くの字に折れ曲がって飛んだ巧の身体は、コンクリート製の壁を

突き破って沈黙した。

メシエはそこまで悠然と歩いていくと、瓦礫に半分埋まった巧を冷めた眼で見下ろした。

「足の一本でも？ぎ取ってしまえば、もう立ち上がる事も出来まい」
メシエは無表情で告げると、巧の右足に手を掛けようと前屈みになった。

だが、次の瞬間。

「っ！？」

巧の足を掴む寸前、メシエの身体が突然静止した。そしてその身体が、小さく痙攣を起こしている。

瓦礫を退けながら上半身を起こした巧は、異変を起こして静止するメシエを見やる。

なぜ自分に止めを刺そうとして止まったのか？

怪訝に思っている間にも、メシエの身体の痙攣は次第に大きくなっていく。

「ぐっ……、何、だ、これは……！？」

謎の現象を振り払おうと、メシエは身体をあちこち振り回しながら二、三步後退する。そして何かに気付いたように、自分の頭を右手で掴んだ。

「そうか……！ 貴様の仕業か、ファントム・クラウン幻影の道化！」

「えっ！？」

メシエの様子を窺っていた巧はその言葉に驚いた。

ファントム・クラウン幻影の道化？ 彼はメシエに取り込まれて、精神が消滅したはずだ。それは他でもない、メシエ自身がそう言っていたのだから。

「何とか間に合ったみたいだね」

困惑している巧の目の前。丁度メシエとの中間辺りの景色が、まるでテレビの砂嵐でも見ているかのように、突然激しく歪んだ。

その歪みは徐々に形を成していき、見覚えのある背中が巧の前に現れた。

ファントム・クラウン「幻影の道化……？」

「やあ、巧。随分派手にやられたねえ。制服がボロボロじゃないか」顔を半分こちらに向け、自然な頬笑みを巧に見せる。

その表情には、以前あった作り笑顔という感じは無い。人間らしい、普通の青年の笑顔だった。

「貴様……！ 一体、何をした！？」

ファントム・クラウン 幻影の道化の笑顔の向こうから、憎悪に満ちた声が聴こえてきた。見るとそこには、同じ顔であって違う人物の、優しい頬笑みとは正

反対の表情があった。

ファントム・クラウン 幻影の道化とメシエ。

今や瞳の色以外、相違点の無い二つの存在は、非対称的な表情でお互いを見つめている。

すると片方、言わばオリジナルである幻影の道化の方が涼しげに答えた。

「観測者を気取ってるあなたの事だ……。きつと碌でもない事を彼らに仕掛けるだろうと思ったから、ボクの力を使って、ちよつと身体に細工させてもらったんだよ。まあボク自身の力が弱まってたから、だいぶ時間が掛かっちゃったけどね」

「何イ……！？ 貴様ごときが、どうやってこんな真似を……！」
ファントム・クラウン 憎しみの込められた翡翠色の瞳が、幻影の道化の姿を映し出す。

彼は不敵に笑ってみせた。

「ボクはこの世界の『案内人』で、あなたの『駒』だった。つまり、あなたの力の流れを理解している、唯一の存在。ボクがボクであればこそ、出来た芸当なんだよ」

「操り人形があ……！！」

怒りの感情をさらに深くするメシエの表情を見て、ファントム・クラウン 幻影の道化は不敵な笑みを消した。その顔には、冷徹とも言える厳しい表情が浮かんでいる。

「ボクにそうあるよう命じ、縛り付けたのはあなただ。もう後悔しても遅い。今のあなたは、あなたが道具として扱ってきた『災魔』たちと、同じ程度の存在でしかない」

「何だと……！？」

ファントム・クラウン

メシエから視線を外し、幻影の道化は優しい笑顔で巧の顔を見た。
「巧。今ならあいつを簡単に倒せる。あいつを倒してキミは……、いや、キミたちは日常に帰るんだ」

「……でもいいのか？ 今更だけどあの身体は……」

ファントム・クラウン

身体を拝借した、とメシエは言った。それはつまり、幻影の道化の身体その物はあちらで、それを倒すという事はつまり、彼を殺す事に等しい。

ファントム・クラウン

言い淀む巧の心中を察して、それでも幻影の道化は優しく、そして少しだけ寂しそうに笑ってみせた。

「言っただろ。ボクの事は気にしなくていいってさ。ボクはすでに一度死した存在だ。そんなボクを気遣う必要なんてどこにもないよ。それにキミや暁奈は、こんな所で終わっていい存在じゃない。……だから倒すんだ。キミたちの世界に帰る為に」

本当に優しい笑顔だった。

それが本当の、青年の表情だった。

その笑顔が眩し過ぎて、儚過ぎて、巧は眼を伏せるしかなかった。笑顔で告げる事なんて、絶対に出来なかった。

「ああ、わかった」

ファントム・クラウン

幻影の道化の横を通り抜け、巧はメシエに立ち向かう。

メシエは不愉快そうに頭を振ると、右拳を固く握り締めた。

「舐めるなよ……！ こんな事で、私の力が抑えられる物か！」

叫ぶと同時に突き出した拳は、巧の顔面に目掛けて吸い込まれていく。

その刹那。

メシエの拳は、巧の剣によって簡単に受け止められた。

「なっ……！？」

巧の身体は寸分足りとも動かなかった。

拳から伝わる衝撃も、容易く受け流す事が出来た。

ファントム・クラウン
幻影の道化の言葉が、形を成した瞬間だった。

「なるほどな」

巧は強烈に笑ってみせる。

「さっきまでのあんたの拳と……、大違いだ！」

メシエの拳を振り払い、巧は思い切りメシエの顔を殴り返した。今まで殴り飛ばされていた自分が、今度は殴り飛ばす側に回っていた。

メシエの身体は高速で宙を舞い、近くの住宅の壁面に衝突した。

轟音を響かせて壁面が崩れ、メシエの身体が瓦礫の中に沈む。

巧は殴った方の腕をグルグルと前回転させると、改めて剣を握り直した。

「行け、メシエ。あんたを斬る！」

止めとばかりに巧は勢い良く走り出す。

メシエは瓦礫の中から起き上がると、自分に向かってくる巧を怒りの籠った瞳で睨みつけた。

「舐めるな……、言っただけだ！」

叫ぶと同時にメシエが右腕を水平に払うと、翡翠色の光の玉が横一列に無数現れた。

水平に払った右腕を引き戻し、その腕を標的である巧に差し向ける。

インベリアル・ジェイド
「『翡翠の光弾』！」

翡翠色をした光弾の全てが、まるで流星群のように高速で放たれ、上下左右あらゆる方向から巧の身に降り注ぐと向かってきた。

（さっきの技か！）

それは警戒して立ち止まろうと、足でブレーキを掛ける寸前だった。

「！」

突然横合いから無数の牡丹色の光の矢が飛来し、翡翠色の光弾を次々と撃ち落とした。

眼の前で連続して起こる爆発に眼を細めながら、巧はその攻撃者の方を見る。

「水嶋！」

視線の先には、弓を構えた状態の暁奈が、その身体の怪我を感じさせない気迫で立っていた。

無言で巧に頷き返すと、暁奈は照準をメシエに向け、流星群のような数の光の矢を放つ。

「！ ちい！」

襲い来る光の矢の群れを躲す為なのだろう。メシエは再度、翡翠色の光弾を無数出現させた。

発射されたその光弾は、空中で光の矢の群れと衝突し、翡翠と牡丹、それぞれの色の連鎖爆発を起こす。

「甘いな！ その程度では私に当てる事など」

言葉の途中で、メシエは頭上の気配に気付いてハッとしたように顔を上げた。

すでにその瞬間、勝敗は決していた。

空中を華麗に舞う暁奈の弓には、眩い光を放つ極大の牡丹色の矢が構えられている。

気付くのが遅かったのだ。躲す事はもちろん、光弾を放つ暇さえ無いだろう。

凝縮された暁奈の力が、メシエに落雷のように降り注いだ。

眼を覆いたくなる程の凄まじい光と、地を揺るがす程の衝撃と、空を裂くかのような爆音が、『鏡界』内を一瞬で支配した。

力の圧力で押し潰され、苦しみと痛みを現したようなメシエの叫び声は、それによって掻き消された。

「ッ！」

その数十秒後、爆煙の中からメシエがなんとか這いずるようになり、抜け出してきた。

幻影の道化の働きによつて、『災魔』と同等の力しか發揮出来なくなつたその身体では、最早暁奈の最大の攻撃に耐え得る程の屈強さは無かつた。服のほとんどは焼き払われ、身体も焼け爛れたように、所々黒く変色している。

メシエの身に、消滅の危機が訪れようとしていた。

「……ふざ、けるな……」

多大な損傷を受けた身体を引きずるように、メシエはゆっくりと闊歩する。絞り出すようなその声には、自身の望みを諦める、という考えが一切感じられない。

「私は……、渡り行く……。私、自身の……、望みを、叶えるために……！」

こんな所で死ぬ訳にはいかない。

死んでたまる物か。

死にたくない。

そう叫んでいるかのように、メシエの声は徐々に大きくなつていく。

「私は……！ 私はあああつ……！」

宙を仰ぎ、メシエは咆哮する。

見上げる先には、『境界』の紅黒い空がある。

その視界を遮るようにして、巧は剣を高く掲げる。微かな光を反射させる剣の刀身が、メシエの瞳に映り込んだのだらう。メシエの視線が、確かめるようにゆっくりと下げられていく。

その一瞬、巧はメシエと眼が合った。

「じゃあな、観測者気取り……！」

捨て台詞を浴びせ、巧は一気に剣を振り下ろした。

「……！」

巧の剣は、メシエの身体を頭から股まで一直線に斬り裂いた。最後の言葉は聴き取れなかった。

Act・8 崩壊

暁奈は構えを解くと、左手に持っていた弦の無い三日月形の弓を消滅させた。

『心羅』の力の使い方は、もう呼吸するのと同じくらい容易いと感じるようになった。今のうちに、心で『消えろ』と念じれば、武器はそれに従って質感を失うように消滅してくれる。

それを確かめながら、暁奈は少し離れた位置にいる巧に眼を向けた。

彼も暁奈と同じように、武器を消滅させている。その視線の先には、倒れたまま動かないメシエの身体があつた。

いや、違う。正確には、あれはメシエ自身の身体ではない。メシエが自分たちと戦うために、ある人物から奪い取った身体だ。

ファンタム・クラウン
幻影の道化。

メシエの駒となり、操り人形となって、『鏡界』に落ちた人間を教え、導いてきた人物。

自分や巧をここまで導き、そして、恐らくは助けようとしてくれた人だ。

そんな彼の身体を、自分たちは攻撃した。メシエに乗っ取られてしまった以上、そこに彼自身の精神は存在していないのだから。

だがそれでも、と暁奈は思う。

何か他に方法は無かつたのか、と。例えば、メシエの精神だけをファンタム・クラウン幻影の道化の身体から引き離す、とか。

だが、本当にそんな方法があれば実行していただろう。それが無かつたから、こんな結末になってしまったのだ。

（止めを刺した訳じゃないから、私はまだマシな方なのかな……）
地面に伏したその身体を見つめたまま、巧は動こうとしない。そんな彼の虚しげな背中を見つめて暁奈は思う。

一体何と言って声を掛ければいいだろう？　そう暁奈が逡巡している時だった。

「いやあ、お疲れ様二人とも。ホント一時はどうなる事かと思ったけど、なんとか切り抜けられたね」

「！！　えっ……！！？」

聞き覚えのある声を耳にして暁奈は振り返った。

するとそこには、まるで何事も無かったかのように余裕のある表情を見せる、幻影の道化ファントム・クラウンの姿があった。

驚いた表情のまま、暁奈は固まる。

「あの……、えっと……、何で……？」

「？　どうしたんだい、二人して変な顔して」

二人して、という事は、自分の後ろで多分巧も同じようなリアクションを取っているのだろう。

……　って、いやいやそれよりも。

「何で、当たり前のようにまだそこにいるんですか……？」

暁奈の考えとしては、彼の身体を乗っ取ったメシエを倒してしまえば、『思念』として自分たちの前に現れた幻影の道化も消えてしまふのだろう、と思っていた。

恐らく巧も同じ事を考えていたのだろう。だから同じリアクションを取っていたのだ。

呆然としている二人を前にして、青年は涼しい顔で告げる。

「そりや確かに、ボクの事は気にしないでいい、って言ったけどさ。だからってボクの身体を斬る事で、今ここにいるボク自身も消滅するなんて言った覚えは無いよ？」

「いや、それはそうですけど……」

「まあいいじゃないか。結果としてキミたちは生き残ったんだし、ボクは『思念』としてだけど、こうして存在してる。まさに結果才ライだね」

「……」

本当に呆れると言葉が出て来ない物なんだなあ、と思いながら、

暁奈は全身の力が抜けるような気がした。この青年のいい加減さだけは、メシエ云々と言うより元々の性格なんじゃないかと本気で思う。

同じように脱力した感じのため息が聴こえて、チラリと暁奈は振り返る。

すると巧は、やはり呆れたような感じで頭を掻きながら、ファントム・クラウン 幻影の道化の方に歩いていく。

「とにかく、メシエは倒せたんだ。あんたのおかげだよ……。ありがとな」

そう言っただけで巧は優しく笑った。その表情を見た感じだと、先程までの虚しさは幾分和らいだ様子だ。

ファントム・クラウン すると幻影の道化も、同じように笑いながら返事をする。

「キミたちの協力があればこそだよ。ボクに出来た事と言えば、精々メシエの力を抑える事ぐらいだ。彼の駒に過ぎないのは事実だからね」

「でも、あいつはもう倒したんだ。これであんたも、晴れて自由の身って訳だろ？」

「うん、そうだね……」

そう言っただけで青年の表情に陰りが差した。その表情に、暁奈は嫌な物を感じ取った。

ファントム・クラウン 「幻影の道化さん……？」

青年は問い掛けても答えない。少し寂しそうな笑顔を浮かべて、自分と巧を交互に見た。

「……どうしたんだよ？」

「キミたちもわかってるはずだろ？」

巧の質問に質問で返して、ファントム・クラウン 幻影の道化は眼を伏せた。

「ボクはもう死んでるんだ。メシエの支配から逃れたとしても、その事実は変わらない。それにメシエが使っていたボクの身体は、ファントム・クラウン 幻影の道化としての『仮初めの身体だ。例えそれを取り戻しても、ボクは現実の世界に帰る事は出来ない……』」

「そんな……」

告げられた事実には、暁奈は言葉を失った。

知らなかった訳ではない。

ただ、眼を背けていただけなのかもしれない。

眼の前の青年は既に一度死んでいる。メシエから解放されたからと言って、彼自身が生き返る訳ではない。それがどうしようもない事実だった。

ファントム・クラウン

だが幻影の道化は、それでも優しく微笑んでみせた。

「それにキミたちは、この『鏡界』の創造主であるメシエを倒したんだ。この空間は、時が来ればやがて消滅する……。だからキミたちは、その前に現実の世界に帰らなくちゃ」

わかりました、とは暁奈には素直に言えなかった。

自分の少し前に立っている巧の様子を、チラリと窺ってみた。

少し俯いている巧も返事をせず、黙ったまま立ち尽くしていた。

ただ事実だけを告げる。今までも幻影の道化はそうだった。そこには何の意図も感情も無い。

（ここだけは変わらないんだな……）

相変わらず厳しい奴だと思い、同時にそれが多分正しい事なんだとも思う。巧は顔を上げると、幻影の道化の顔を真っ直ぐに見た。

「じゃあ最後の案内、任せていいか？」

「ああ、もちろん」

自然な笑顔で青年が頷いた時だった。

ズウン。

巧は、自分の身体が軽く上下に揺さ振られる感覚に気付いた。地震などという現実的な現象ではない。ここでそんな物が起きるはずが無い。

「おい、今の揺れ……」

「どうやら始まったみたいだね。急いだ方がいいだろう」

ファントム・クラウン
幻影の道化の言葉が意味する物は一つしかない。それは彼自身が言っていた事だ。

すなわち、『鏡界』の消滅。

「あつ！ でもここに囚われてる人達は？」

巧も忘れそうになっていた重大な事を、辛うじて暁奈が思い出す。心配そうな暁奈を見て、ファントム・クラウン幻影の道化は安心させるように柔らかく笑ってみせた。

「それなら心配無いよ。ボクが必ず、全員を現実の世界に帰すから」
「でも全員って言ったって、かなりの人数が囚われてるはずだろ？
今から救出してて間に合うのか？」

「今現在、『鏡界』内に囚われている人間はキミたちを除いて百二十七人いる。確かに、普通にやってたらアウトだろうね」

「百二十七人！？」

「そんなにいるの！？」

予想を上回る大人数に、二人とも驚きを隠せない。

巨大な『鏡界』の入口が現れた時点で大勢が巻き込まれた可能性は考えていたが、まさか百人単位で連れ去られているとは思いついしなかった。確かにそんな人数を一人一人救出していたら、どれだけ時間が掛かるかわからない。

しかも全員が別々の場所にいて、『鏡界』消滅という時間制限まである。ファントム・クラウン幻影の道化の言う通り、正攻法では間違いなくアウトだ。

「じゃあどうするんだよ……！？」

「焦らなくても大丈夫。要するに、『普通じゃない方法』で助けられ

ばいいんだから」

「え？」

不思議そうな顔で固まる二人を見て、青年はクスツと笑ってみせる。

「キミたちも一度体験したろう？ 出口を通らずに、現実世界へ帰る方法を」

「……！ そうか、オーバーン・ナイト
ファントム・クラウン赤褐色の騎士と接触した時の……！」

巧も暁奈も、幻影の道化に促されて思い出した。

彼が鎧の騎士たちに連れて行かれそうだった時、確かに自分たちは出口を通りもしないで現実世界に帰り着いた事があった。

記憶を辿っていた巧は、幻影の道化の声で現実に戻される。

「あの時、無理矢理キミたちを現実世界に送り返したのはメシエだからそのメシエの力を利用して、囚われてる人たちを一気に送り返すんだ。メシエを倒した今なら、それが可能なはずだよ」

「……すぐに出来そうか？」

少し躊躇った様子の巧を見て、幻影の道化は苦笑する。

「人数が人数だからね。多少時間は掛かるだろうけど、全員無事に帰してみせるよ」
ファントム・クラウン

幻影の道化の言葉には、何が何でもやり遂げようという強い意志が感じられた。

何だか本当に、最初に会った頃とは別人のようだ。

いや、元に戻った、と言わなければならない。

彼が命を落として、メシエの操り人形と化す前の、人間だった頃の彼らしさが戻ってきている。そう考えると嬉しい気分になった。

だが、そんな気分浸ってばかりもられない。

再び身体に揺れを感じると同時に、遠方から何かが崩れるような轟音が響いてきた。その瞬間、ファントム・クラウン幻影の道化の顔が厳しい表情に変わった。

「まず他の人たちを現実世界に送るから。キミたちは最後でいいかい？」

「ああ、その方が安心だ」

「私もそれでいいです」

巧と同じく暁奈も賛同した所で、青年は一度ニコリと笑って頷くと、意識を集中させる為に二つの眼をゆっくりと閉じた。

「我、扉を開く者なり。我、道を示す者なり。囚われし者たちのために、我が盟約の形を現せ」

ファントム・クラウン

幻影の道化は瞳を閉じたまま、ゆっくりと唱えた。そしてそのまま、無言で立ち尽くしている。

自分たちの近くでは何も変化が見られないが、恐らく別の場所では、囚われた人々が次々に現実の世界へ帰還しているはずだ。

沈黙が支配する中、無言で待っていた巧と暁奈は、再び『境界』の揺れを感じる。

「あとどれぐらいかな？」

揺れを感じて不安になったのか、暁奈が口を開いた。心配そうに幻影の道化の顔を見つめている。

「さあな……。こればかりは、俺たちが手伝える事じゃなさそうだし……」

巧は腕組みをして難しい顔をする。と、その時だった。

「？」

背後に何かの気配を感じて、巧はチラリと肩越しに振り返った。

そこで反射的に、巧は『心羅』を発現させて身構えた。無視する事も出来たのかも知れないが、身体が言う事を聞かなかった。

暁奈も巧の視線を追って振り向いた。そして同じように身構えてしまった。それだけ意識を引き付ける存在が、巧の前方に立っていたからだ。

「おい、マジかよ……！？」

二人の視線の先にいたのは、先程止めの一撃を受けて倒れたはずのメシエだった。

ファントム・クラウン

幻影の道化が叫んだのとほぼ同時に、意味不明なメシエの叫び声がピタリと止んだ。

それが合図だった。

巧がゆつくりと前を向くと、メシエの身体は崩壊し始めていた。

全身がガクガクと忙しく震え、身体のおちこちが熱で融解しているかのように、ドロドロと溶けていく。

だが不思議な事にその身体は、溶けた傍から地面に吸い込まれ、残骸らしい物を残していかない。代わりにその身体を中心として、真っ黒な何かが円状に広がり、地面を隙間なく染め上げていく。まるで地面の一部分に、大きな穴が開いているかのようなのだ。

「な、何だよこれ!？」

「それに触れたらダメだ! メシエを中心に『鏡界』の崩壊が始まったんだ! 触れた部分から消滅する事になる!」

「そんな展開アリかよ!？」

「こうなったら逃げるしかない! 二人とも付いて来て!」

宙に浮いて進む幻影の道化の後に、暁奈、巧の順番で続く。

走り去る瞬間、肩越しの視界の端で、巧は異様な物を見た。

徐々に広がり続ける黒い円の中から、おびただしい数の赤褐色の騎士^{ナイト}が、這いずるように出てきた。だが、赤褐色の鎧の部分は蠟のように溶け始め、辛うじて人型を成しているような状態だ。

その光景に言いようの無い危機感を覚え、巧は自分のやや前方を進む幻影の道化に問い掛ける。

「あれって赤褐色の騎士^{オーバーン・ナイト}だろ? なんであんなドロドロした格好になってるんだ?」

質問されても青年は振り返らない。後ろを見る余裕が無かったのかも知れないが、それでも一応答えを返してきた。

「彼らは『案内人』のボクよりも強く、メシエとの『盟約』によって縛られていた存在だ。メシエが倒された今、彼らの存在を支える

『盟約』が無くなった事で、『鏡界』の滅びの一部と化してるんだ」
「じゃあ、あれに捕まったら……」

「その時点でアウトだ」

言葉を詰まらせた巧の代わりに、ファントム・クラウン幻影の道化は結論を突き付けた。その背中を追いながら、巧はもう一度肩越しに後ろを見た。迫りくる滅びの現象は、ゆつくりとだが確実に広がっていく。

「次の角を右に曲がるよ」

振り返らずにそう告げられて、先導する二人に続いて巧も右に曲がる。そうする事で、視界から滅びの現象が見えなくなった。

それに少しだけ不安を感じながらも、巧は走る事に専念する。ファントム・クラウンすると、前を走っている暁奈が幻影の道化に話し掛けた。

「でも、一体どこまで逃げるんですか？ 崩壊が始まっているのは、さっきの場所だけじゃないかも知れないのに」

「うん。だから今は、とりあえず出口に向かって進んでる。他の人々たちを助けるのも重要だけど、キミたちが『鏡界』から抜け出すのも、同じくらい重要な事だからね」

「あと何人残ってるんだ？」

二人の間に割り込む形で質問すると、少し間を開けて答えが返ってきた。

「残り八十一人だ。やっぱり、移動しながらだと集中しにくいから大変だね」

「こんな事言いたくないけど、急いでくれよ。このままじゃ消滅に飲み込まれて終わり」

言葉の途中で進行方向右側に異変が起きた。

突然、建物が音も無く崩れた。

いや、崩れたと言うと少し語弊がある。まるで砂浜に作った砂の城が波にさらわれるように、物体その物が掻き消されていく。

後に残ったのは、先程見た空洞のような漆黒。ここでも『鏡界』の消滅が始まっている。

「言ってる傍からこれかよ!？」

「くっ！ その十字路を左に！」

あの現象に飲み込まれる訳にはいかないと、巧は指示通り方向転換する。隣を走る暁奈を見ると、彼女もかなり焦っているように見えた。

それもそうだろう、と巧は思う。消滅＝死という、わかりやすい答えが目前まで迫ってきているのだ。余程の死にたがりでもない限り、この状況で焦らない者などいないだろう。

自分たちの前を進む案内人。彼がいなければどうなっているかわからない。

「あと何人だ？」

移動しながらでは、救出作業は思うように進まない。幻影の道化の言葉を理解している上で、それでも巧は問い掛ける。

彼もそれをわかつているのか、文句も言わずに答えを返して来る。
「残り四十三人。二人とも、もう少しだから頑張っ！」

二人を導きながら他の人間も帰還させる、という荒業を幻影の道化は続けている。一体今、彼の頭の中ではどんな速度で情報処理が行われているのだろうと、巧は思わずにはいらなかった。

突然、幻影の道化が進むのを止めて立ち止まった。

「待つんだ、二人とも！」

急な制止だったため、巧と暁奈は幻影の道化を僅かに追い抜く形で停止した。

乱れた息を整えながら、巧は青年の方を見る。

「どうしたんだよ？」

「前方の道が途絶えてる……」

「ええっ！？」

巧と暁奈、二人の叫び声が上手い具合に重なった。

今三人が進んでいる道は、細い路地のような一本道になっている。左右を挟むのはコンクリート製の壁。もちろん曲がれるような道などどこにもない。

「どうするんですか？ さっきの所に戻ったって、結果は同じだろ

うし……」

「いつその事、建物伝いに飛び越えて行くか？ 『心羅』の力を使えばそれぐらい簡単に」

「いや、ダメだ」

ファントム・クラウン
巧の提案を、幻影の道化は即座に否定した。

「飛び越えている最中に、着地点にしようとした場所が突然消滅して、そのまま飲み込まれる、なんて可能性だってある。今こうして動き回ってる事だって、充分危険な事なんだ」

「でも、このままジツとしてたつて結果は同じだろ？」

「それはそうだけど……」

ファントム・クラウン
幻影の道化は言い淀む。どうやら巧や暁奈の身をかなり案じているらしい。危険な事はさせられないと、その表情が訴えている。

「ならここで救出作業を終わらせてください。立ち止まってるのなら、作業に集中出来ますよね？」

平行線を辿りそうだった状況で、今度は暁奈が提案した。

確かに、これ以上動けないと言うなら、もう方法はそれしかない。他の人間を助ける事が出来るのは、ファントム・クラウン幻影の道化しかないのだから。

「俺たちは最後でいいって言っただろ？ だから早く」

最後の念押しとして、巧はそう言い放つ。

ファントム・クラウン
すると幻影の道化は、二人の様子に観念したかのように苦笑してみせた。

「わかった。すぐに終わらせるから待ってて」

そう言っただけで、ファントム・クラウン幻影の道化は、再び瞳を閉じた。一度集中を始めると、彼の身体はピクリとも動かなくなる。

再び訪れた待つしかない状況に、巧は少々戸惑っていた。いつもの場所に消滅の波が押し寄せても不思議は無い。

もしも作業が間に合わなかった、その時は……。

「もうすぐ帰るんだよね、現実の世界に……」

一瞬諦めに支配されそうになった巧の思考は、そんな暁奈の言葉で中断された。見ると彼女は、少し残念そうな表情で紅黒い空を見

上げている。

「……やっぱ、後悔してるのか？ メシエを倒した事」

下手にオブラートに包むよりはと、巧はストレートにそう問い掛けた。

彼女は非日常に憧れている。それは紛れもない事実だ。

メシエを倒せば『鏡界』は消え去る。

非日常の世界は消えて無くなる。

それなのに、それでも、暁奈はメシエと戦う道を選んだ。それを今になって、今になったからこそ、彼女は後悔しているのかも知れない。

暁奈は空を見上げたまま、巧の問い掛けに答える。

「どうなんだろう……。メシエの事を許せないって思ったのは確かだけど、こうして消滅し掛けている『鏡界』を見たら、わからなくなっちゃった……。自分が一体、何を守りたかったのか……」

「……」

力の無い暁奈の言葉に、巧は黙り込む事しか出来なかった。

沈黙が支配する中で、『鏡界』の揺れは続いている。

もしも……、と巧は考える。

暁奈が『鏡界』を消滅させる事に反対していたら。メシエを倒す事を拒否していたら。自分は目の前にいる少女と、争う事になっていたかもしれない。

自分は日常を。

彼女は非日常を。

互いが頑なに、自分の憧れている物を守ろうと譲らなかったら、そんな展開もあり得ただろう。

だがそうはならなかった。

色々と思う所はあったにせよ、暁奈は自分と共に戦ってくれた。
ファントム・クラウン
幻影の道化のために力を貸してくれた。それもまた、紛れもない事実だ。

「あんたが力を貸してくれなかったら、俺は今ここにいなかったか

も知れない。例えあんた自身が、自分の行動に納得がいかなかったとしても、俺はあんたに感謝してる。だから……、ありがとう」

「……！」

巧の感謝の念を聞いて、暁奈はとても驚いた顔になった。礼を言われる事なんてしていないのに。そんな事を言いたげな顔だった。それでも巧は笑ってみせた。自分の日常を守る戦いに協力してくれた、恩人に向けて。

暁奈も、徐々に驚いた表情を解き、巧の顔を見て優しく微笑んだ。するとその時、和やかな雰囲気を消し去る現象が、二人の眼に飛び込んできた。

「！ 神藤くん！」

「！」

巧が周囲を見回すと、細い路地の前方と後方から、消滅の現象である空洞のような漆黒が自分たちのいる方向に向かって来ていた。その漆黒を引きつれるように、先程見た溶け掛けの身体をした赤褐色の騎士の姿が多数ある。

「くそつ、ついに来たか！」

ファントム・クラウン

「どうする、神藤くん？ 幻影の道化さんが言うには、触れたら即アウトらしいけど……」

三人を挟み撃ちにする形で、消滅の波はすぐそこまで来ている。このまま何もしないよりはと、巧は発現させたままだった『心羅』の長剣を構え、暁奈に背を向ける。

ファントム・クラウン

「幻影の道化が間に合わなかったら、どの道アウトなんだ。だったら、最後の最後まで足掻いてやる」

「……そうだね。私もそうするわ」

背後で暁奈が『心羅』を発現させるのが気配でわかった。幻影の道化を挟んで背中合わせになった二人は、消滅の波を迎え撃とうとした。

するとその瞬間。

「待たせたね、二人とも。準備完了だ」

背後から肩を掴まれ、巧は振り返ろうとした。
だがその瞬間、巧の身体は強い引力の奔流に飲み込まれた。

以前にも感じた感覚の中、巧は瞬間的に瞑っていた眼を、ゆつくりと開いた。

「ここは？」

眼の前には不思議な光景が広がっていた。何度も見た『鏡界』の紅黒い空が早送りの映像のように、自分の周囲を高速で駆け抜けていく。こんな光景を見るのは初めての事だった。

「神藤くん」

声が聴こえて振り向くと、いつの間にか自分の傍に暁奈の姿があった。彼女も同様に、周囲の光景に眼を奪われているようだ。

「ここって一体どこなんだろう？ こんな事、初めてだよな？」

「ああ。でも」

何となく巧には想像がついた。『準備完了だ』と言っていたのは、あの案内人なのだから。

「幻影の道化。ファントム・クラウン いるんだろ？ 最後ぐらい、ちゃんと顔見せろよな」

「やっぱり理解が早いよね、巧は」

ファントム・クラウン 親しげに巧の名前を呼んで、幻影の道化はどこからともなく現れた。柔らかな頬笑みを湛えたその顔を見て、巧はやっぱりなと思った。

別れの瞬間が、近付いている。

「巧、曉奈。キミたちのおかげで、ボクは『鏡界』から、メシエの支配から、解放された。どれだけお礼を言っても足りないくらい、感謝してる」

「囚われてた他の人たちは……？」

「ファントム・クラウン少し心配そうな顔をした曉奈を見て、幻影の道化は「大丈夫」と続ける。

「全員無事に、現実の世界に帰したよ。でも多分、少々厄介な事にはなってるだろうね」

「どういう事ですか……？」

「記憶と現象の改竄だよ。大勢の人間が姿を眩ましたという事実は、現実世界には残らない。恐らく、何かしらの事件が事故にすり替わって伝えられるはずだ。メシエが消滅しても、この法則だけは変わらないらしい。キミたちには、伝えておこうと思ってね」

「そうですか」

曉奈が返事を返した辺りで、青年の身体が質感を失っていくように透明になり始めた。

巧は一瞬声を詰まらせたが、どうにか言葉を紡ぐ。

「……逝くのか？」

「どうやらそうらしいね。意外と長く持った物だよ」

「ファントム・クラウンそう言って、幻影の道化は少し寂しげに笑う。

「そうだ、と巧は今になって思い出した。彼に肝心な事を聞くのを忘れていたのだ。」

「なあ、あんたの『本当の』名前、何て言っただ？」

「えっ……？」

「元は人間だったんだろ？ だったら俺たちと同じように、ちゃんとした名前があるはずだ。メシエから解放された今なら、思い出せるんじゃないか？」

「……名前」

「ファントム・クラウン幻影の道化はしばらく考え込んだ後、唐突に何かを思い出したような顔付きになった。そして、巧たちを見て嬉しそうに笑う。

「思い出したよ。ボクの名前は、森宮。森宮悠だ」
もりみやゆう

「森宮悠、か……。忘れないぜ、その名前」

「私も、絶対に忘れません」

巧と暁奈が告げると幻影の道化、ファントム・クラウンいや、森宮悠は笑って頷いた。

透明感が増し、その姿が完全に消え去る瞬間、悠の言葉が二人の耳に届いた。

「ありがとう……」

その直後、巧と暁奈の身体は、眩い光の中に包み込まれた。

エピソード Boy & Girl

午前八時十五分。

暖かさが徐々に暑さへと変わり始めている日差しの中、暁奈はゆっくりと通学路を歩いていた。

あの『鏡界』が消滅した日から、今日で丁度二週間。その間、朝倉高等学校は完全休校となっていた。

消滅の際、幻影の道化こと森宮悠の言っていた通り、『鏡界』に多くの人間が囚われていたという事実は、現実世界において別の形にすり替わっていた。

その内容としては、ずばり『集団食中毒』。

学校内にある食堂で食事を取った職員や生徒が、次々と中毒症状を訴え入院する者まで現れた、という事故。当初は何者かによる毒物混入ではないかと騒がれ、マスコミが学校に押し寄せるという事態にまで発展した。

結局、入院する者が現れた事と、マスコミが沈静化するのを待つ意味も込めて、学校は二週間の臨時休校を決定した。

そして今日、漸くその休校が解かれる日を迎えた、という訳である。

当事者である暁奈にとっては、妙な展開にすり替わった物だな、という感じだった。

だが一人も死者が出ていないという事は、森宮悠の言っていた通り、『鏡界』から帰還出来なかった人間は一人もいないという事だ。（喜んでいい事だよね、これは）

二週間経った今でも、あの少年に指摘された通り、後悔に似た感情があるのは確かだった。

自分は、望んでいた世界を手に入れて、そして自分の手でそれを捨て去った。

後悔しているのか？ あの少年はそう問い掛けてきた。

あの時はわからないと答えたが、今ならハッキリとわかる。自分はやはり、後悔しているのだと。

ただそれと同じぐらい、自分の行動が間違っていなかったんだという確信もある。

もしも自分が、あのまま非日常を求めていたら、間違いなく現実世界は大変な事になっていただろう。多くの死者を出し、しかもその全てが、死の内容を改竄されていたに違いない。

それほどの犠牲を出してまで、あの非日常の世界を守る価値はないと思う。例えば自分がどんなに、非日常の世界に憧れを抱いているとしても。

それを気付かせてくれたのは森宮悠であり、そしてあの少年、神藤巧だ。

彼らの存在があつたからこそ、自分は判断を誤らなかつたのだ。

非日常の世界に憧れる気持ちは今でもある。

だがそれでも。

「歩いて行かなきゃ、だよ。神藤くんと同じように、自分の日常を」

自分に言い聞かせるように声に出して、暁奈はフツと笑う。

少女の足取りは軽い。

自分はちゃんと、日常を守れたのだろうか？

そんな自問を、巧は心の中で繰り返ししていた。

非日常の世界と接触して、手に入れた物より、失った物の方が多いと思う。

ならば自分は何のために戦っていたのか。守り切れなかつた者が

いるというのに、自分の戦いに意味はあったのだろうか。

（いや、そうじゃないよな）

失った物の方が多い。

だがきつと、意味ならあった。

とある青年と出会い、その青年の魂を解放する事が出来た。それに、彼は最後に言ってくれた。

ありがとう、と。

例え、自分の日常が多少変化を起こしていても、彼を救った事で、結果として多くの人間を助ける事が出来た。巧が願っていた日常は、確かに守られたのだ。

「こんな事ばかり考えてたら、あいつに笑われるよな」

忘れないと誓った青年、森宮悠の最後の笑顔を思い出して、巧は顔を上げた。

すると後ろから聞き慣れた声がした。

「おはよう、神藤くん」

「おう、おはよう水嶋」

何気ない挨拶。だが自然と、何かが通じ合っている気がした。

「あのさ、神藤くん。今日もし良かったら、一緒にお昼ご飯食べない？ せっかく晴れてるんだし、屋上行こうよ」

「ああ、別にいいけど」

返事をしかけて、巧は背後からもう一人、自分に近寄ってくる人物がいる事に気が付いた。そして苦笑混じりに暁奈に提案する。

「なあ、もう一人連れて行ってもいいか？ そいつずっと前から、あんたと友達になりたいって言ってたんだ」

「うん、全然いいよ。じゃあ昼休みに屋上でね」

そう言って手を振ると、暁奈は軽い足取りで駆けて行った。

それと入れ違いになる形で、自分の許に駆けてくる人物がいた。

親友の高橋和真だ。

思った通り、暁奈と会話しているのを遠巻きに見ていたようだ。その顔は驚き半分、羨ましさ半分という変わった表情になっていた。

「おい巧！ さっきのつて水嶋さんだろ！？ お前、いつの間に水嶋さんと仲良くなったんだよ！？」

酷く興奮した様子の和真に、巧は涼しい顔で言い放つ。

「さあ？ 非日常の世界でもあったんじゃないのか？」

「は……？」

意味がわからないといった顔をする和真を見て、巧は可笑しそうにクスツと笑った。

少女は『非日常』を求めた。

少年は『日常』を求めた。

互いに違う物を求めた二人は、それによって失った物と、得た物があつた。

それが良い事だったのかどうか、今はわからない。

それでも、少年と少女は、再び『日常』を歩き始めた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0401u/>

鏡界戦 -ファントム・クラウン-

2011年6月12日23時55分発行